少年遊戯

桜井よろず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年遊戯

【Ｎコード】

Ｎ８９６８Ｄ

【作者名】

桜井よろず

【あらすじ】

拓海は受験帰りの電車の中で痴漢に遭い、そこで裕斗という同じ私大を受験した少年と出会う。奔放な裕斗の性格に振り回されつつも打ち解けていくが、ある日裕斗の同級生が現れて……（注：ＢＬです）

一、電車の中で

痴漢かよ、拓海は胸の中で吐き捨てた。

夕方の電車内は帰宅ラッシュだかなんだかで、ごったがえしている。

暦の上では春、梅もちらほら綻びかけたと言ってもまだ外は寒い。風邪をひいたらいけないから、と祖母に渡されたコートと混雑の人いきれのせいで車内は蒸し暑かった。滑り止めでしかない私大の入学試験は、特に頭を悩ます問題もなかったが、だからといって一週間後に始まる国立の前期試験を考えると気は休まらない。

傾いた西日のせいで車窓の外に広がる街は影絵になる。拓海は自分自身も影の一部でしかないような心持になってどうしようもない虚しさを感じた。

ふと我に返るとでもいうのだろうか。例えば、苦戦していた数学の応用問題がやっと解けたとする。解けた瞬間は束の間の達成感と恍惚に浸る事が出来る。けれどしばらくすればその問題が解けたからといって一体何になるんだろうと虚無感に似た疑問が残る。ないものねだりかもしれないが、どうしようもない。試験のための勉強をすれば、それなりの結果は返ってくる。だからといってそれが何のための勉強なのか、拓海ははっきりと自分を納得させれずに居た。

急かされるように大学に合格しなければと思う一方で、大学に入ってやりたい事が特にあるわけではない。かといって大学に入る以外の選択肢は進学校では与えられていないし、自分自身がそれ以外に生きていく術をまだ持っていない。

試験期間中はいつも焦りにも似た苛立ちのような、虚しさのようなどうにもならない沈んだ気分の波が襲ってくる。やめよう、拓海は自分に言い聞かせるように息を吐いた。今、自分が何なのかとか、

自分の人生をどうすべきかなど、考えた所で答えが出るわけではない。ただ今は、一週間後に控えた受験を無事終わらせる事だけに専念すればいい。拓海は鞄を持ち直して、車窓に寄りかかりつつ、西日に照らさて汗ばんだ額を拭った。

拓海が太腿に妙な違和感を感じたのはその時だった。

内股に這うようにぴったりと自分の体ではない何かが触れている。混雑のせいで他の乗客の荷物でも当たったのかもしれない、とはじめは思った。しかしそれにしては自己主張が強すぎる気がする、どう考えても無機質な物体が触れている感じではないし、探るように撫でまわされているといった方が正しい。その正体を確かめようにも膝まであるコートのせいで、そこに何が触れているのかは確認出来ない。多分、後方のコートの裾からそれは侵入してきているんだろう。拓海は正体のわからない何かに自分の体の一部を弄られていることに強い不快感を感じた。

……痴漢かよ、苦々しく心の中で吐き捨てて、どうしたものかと途方に暮れた。

拓海は自分が痴漢に遭うなんて事は考えた事もなかった。背丈だって平均よりは高い方だし、いくら華奢な方とはいえ自分の容姿は男そのものだ。つまり今、自分の体に断りもなく触れているのは、つまりそういう種類の人間という事なのだろうか、いや痴女という可能性もある。拓海はぼんやりとゲイの痴漢と痴女とはどちらの方が確率的に高いのか考えてみて、結局想像もつかずにやめてしまった。駅員に突き出すにしても国立受験を控えた残された時間を無駄に浪費するとなれば億劫だ。だからといって自分の降りる駅まで後三十分以上もある。それまで堪えて触らせてやる義理もない。

そんな事を考えているうちに、拓海が抵抗しない事に味をしめたのか痴漢の手の動きは大胆になってくる。内股を撫でるようにして

いたそれは、足のつけ根まで這い上がってきて焦らすように臀部へと伸びてきた。拓海はとにかくそれから逃げようと身じろぎしたが、混雑のせいで思うように動けない。人込みの中に立つよりは、と昇降口の反対の窓際に立っていた自分が呪わしい。暑さとは違う汗が額にじわりと浮かんでくる。自分が女だったら、すぐにでも「この人痴漢です！」とでも叫べるのに、それも自分が男だという妙な自尊心と羞恥心とが邪魔をする。一方では痴漢をひっとらえて駅員に突き出してやるか、この場で一発ぶん殴ってやりたい衝動に駆られるが、もう一方で、男子学生が痴漢されましたなんて憤って駅員に訴えるのは滑稽だとか、受験前に騒ぎを起こしたくないという理性が働く。

電車の中で他人の尻撫で回して何が楽しいんだよ！

拓海は心の中で毒吐きながら、よりによって何で自分なんだ、痴漢するにしても余裕のない受験生をわざわざ選んでする必要ないぢゃないか、と理不尽な状況に苛立った。試験の疲れと電車の混雑で、ただでさえ精神的に余裕はないのだ。苛立ちのピークはそのすぐ後に達した。臀部を這い回っていた手が、前へとやってきたのだ。唐突に急所を握られて拓海はカッとなって反射的に振り返った。

二、電車の中で

「あ、やっと気付いた」
振り向き様に楽しげな声がした。拓海は痴漢の正体を見て呆気にとられた。その人物が驚く素振りも悪びれる風もないのも予想外だったが、拓海は「痴漢」というものは中年の男性、「痴女」というものは妙齢から中年女性あたりだと勝手に決めつけていた。
しかし犯人の容姿は、拓海の想像とは一番遠いところにあるもの、小柄な男子学生だったのだ。
その学生は、自分の通う高校から二駅離れたところにある私立高校の制服を着ていた。その高校はあまり柄が良いところだとはいえないが、目の前に居る人物は特に不良ぶった格好をしているわけでもなく、むしろ育ちの良さそうな端整な容姿をしている。華奢な体といかにも美少年といった色白で柔らかそうな頬がそう思わせるのかもしれない。その少年が悪戯っぽい笑みを含んだ瞳を浮かべていないければ、到底痴漢がその少年と気付かなかっただろう、そう思って拓海は訝しげに少年を睨んだ。
「挨拶もなしかよ。俺さ、てっきり喋りかけてくるもんだと思って待ってたのに無視して帰るんだもん。冷てえよな」
睨まれた事に怯んだ様子も見せず、拗ねたように少年は言う。拓海は何の話か見当もつかずに逆に自分が怯んでしまう。
「朝だよ、試験会場で手ェ振っただろ。やっと知ってる奴見つけたとか思って嬉しかったのにシカトだもんな、お前。一緒に昼食おうと思ったのにさ」
少年は大人しそうな顔に似合わぬ横柄な口調で捲し立てる。試験会場で手を振られた覚えもないが、まず第一にこの少年に覚えがない。もともと人の顔と名前を覚えるのが苦手な方だから、試験会場にこの少年が居たのを覚えていなくても仕方がない。しかし、たいして広くもない自分の交友関係を探ってみても、この少年と過去に

知り合った記憶はない。
拓海はしばらく考えて、きっとこの少年が別の誰かと勘違いをしているのだろうと結論づけた。
「人違いだよ」
一体、誰と間違ったのかは知らないが先刻まで体をまさぐられていた事もあって、拓海は極めて冷淡に言った。少年が動揺でもして謝罪すれば許してやるしかない。何にせよ、あと十五分もすれば自分の降りる駅へと着く。多少気まずくなっても少しの我慢だ。
「は？　お前、拓海だろ？　萩原拓海」
目の前の少年は一瞬きょとんとして言った。
……今日はつくづく予想の外れる日だ、拓海はいちいち考えるのが面倒になってきた。フルネームを言い当てられてしまったからには人違いでは通せない。
「もしかして俺の事覚えてねえの？　裕斗だよ、渡辺裕斗！　保育園一緒だったじゃん」
拓海は頭が痛くなってきた。幼い頃は病気で保育園は休みがちだったし、何かと家もごたついていた頃でろくな記憶がない。必死にその頃を思い出そうとしても、ありふれた幼児の顔がぼんやりと浮かぶ程度で、目の前の少年と結びつくはずもない。裕斗という少年の記憶力が並みはずれて高いのか、自分が人の名前と顔を覚えるのが苦手なせいなのか、もう一つ解せないのは、仮に保育園が一緒でその頃仲が良かったにせよ、あの痴漢のような行為は一体なんだというのか。
「そんな昔の事、思い出せないな」
「開き直んなよ」
「それに、さっき俺の体触ってただろ。あれは何だよ」
「仕返し。無視されて頭きたから」
「あんな事する人間と仲良くなった覚えはないな」
「思い出せないからって開き直んなよ。あ、もう忘れんなよ」
開き直ってるのはお前の方ぢゃないか、拓海は思わずそう怒鳴り

そうになるのをこらえた。明らかに裕斗のペースに嵌ってしまっている。口では敵いそうにない。あと少しで目的の駅に着く、それまでの辛抱だ。拓海はわざとらしく溜め息を吐いてみせたが、裕斗はお構いなしに話しかけてくる。

「前期受けんの？」

「ああ」

「じゃあ国立大が本命？　どこの大学？」

「ああ」

「どこの大学？　合格圏内？」

「ああ」

「どこの大学？　前期終わったら遊ぼうぜ」

「断る」

「何だよ、聞いてんじゃんか！　（ああ）ばっか言いやがって！それ無視されるよりムカつく」

「わかったから大声出すなよ。迷惑だろ」

結局、拓海が折れて志望大学名を言うと、裕斗は満足そうに八重歯を見せて笑った。

「遠いとこ受けんだなぁ。一人暮らし？」

「兄がその大学行ってるから、一緒に暮らすことになると思う」

「つまんねえな。じゃあ今日受けたとこは滑り止めかよ」

拓海は苦笑して言葉を濁した。そろそろ駅に着く頃だ。

「俺、次で降りるから」

やっとこの強引な少年から解放される、そう安堵していくらか混雑の和らいだ人波を縫って降り口へと向かう。感じが悪いだろうと思いつつも早く電車を降りたいという気持ちが勝った。「まもなく……駅です」という車掌のアナウンスさえもどかしい。

「で、どうだった？」

既に解放されたものだと思っていた矢先、後ろから裕斗の声がした。驚いて振り返ると裕斗が当然のように背後に立っている。

「君も此処で降りるの？」
「俺は二駅先だよ。で、どうだった？」
「まぁ、普通かな。すこし古文で時間をとられたけど」
拓海は、試験の出来の事だろうと思ってそう答えた。実際、滑り止めの私大の問題に手を焼く事などなかったが、祐都にとって本命の大学だったら気を悪くするだろうと妙に気を使ってしまう。
「ばか、試験じゃねえよ。こっちの話」
そう言うなり、拓海のコートの上から股間を握ってくる。その手を退けようとすると襟首を掴まれて唇を塞がれた。電車の扉の前に立っていた数人が二人を見てぎょっとした顔をして電車を降りていく。
「前期試験終わったらココに電話しろよ。ほら、早く降りないと閉まるぞ」
裕斗は唇を離すと紙片を拓海のポケットに突っ込んで、からかうように笑った。

三、危うい均衡

黒いソファの背もたれに白い足がぶら下がっている。窓から射し込む陽を浴びて、それは小刻みにびくつきながら金色の残像を散らしていた。拓海の立っている位置からはソファの上で何が起こっているのかは見えない。ただその白い足が動く度に母親の甲高い呻きが聞こえた。

得体の知れない恐怖感に体が竦む。「おかあさん」と叫び出しそうになったところで温かい手に視界を塞がれる。

「僕の部屋に行こう」

兄の優しい声がした。

耳元で鳴り響く携帯の着信音で拓海は目を覚ました。まだ夢から抜け切れないぼんやりとした心地で通話ボタンを押す。

「悪い、寝てたのか？」

夢と同じ優し声調が響く。兄の声だ。

「うん、でも電話してくれて助かったよ。またあの夢を見てたんだ」

久しぶりに聞く心地よい兄の声に、甘えるように拓海は答える。

「試験で気が滅入ってるんだろう。気分転換はした方がいいぞ、今更無理に勉強しなくても拓海は充分に合格出来る学力があるさ。体にだけ気を遣っていればいい」

諭すように言われ、拓海も素直に同意する。兄は安心したように笑って電話を切ろうとした。拓海はまだ兄の声を聞いていたくて慌てて言葉を繋ぐ。

「兄さん、何か用があったんぢゃないの？」

「特にないよ。陣中見舞いってとこさ」

「そう・・・・・・あのさ、兄さんの所に行くの、もう少し早めてもいい？」

「飛行機のチケット、二十四日じゃないのか？」
「そうだけど・・・・・・」
受話器の向こうで、兄は沈黙している。拓海は思いつきで我儘を言った事を少し後悔した。ごめん、言ってみただけだよ、と言おうとした時、先に兄が申し訳なさそうに話だした。
「来る分には構わないけど、野暮用があって相手してやれないかもしれない。いや、俺が居ない方が邪魔にならなくていいかもな。でもやっぱり部屋が狭いからなぁ」
煮え切らない口調に、やんわりとした拒絶の意がある事を拓海は感じた。拓海は出来る限り平然を装って、
「冗談だよ。少し我儘を言ってみただけ」
と笑った。兄はすぐに来たくなったら来ていいんだ、と言ったが、それが彼なりの気遣いだという事は拓海には判っていた。また兄の方も拓海が遠慮する事をわかっていて気楽にそう言ったのだろう。拓海は兄が押しに弱く、頼みごとをはっきりと断る事の出来ない性質だということを充分すぎる程知っている。だからこそ必要以上に甘えたくなる反面、遠慮がちにならずにはいられなかった。過度の甘えや期待は、いつか自分だけでなくきっと兄も壊してしまう。
「じゃあ、寝てたとこ悪かったな。あまり無茶するなよ。大事な弟が病気にでもなったら、俺の方が参っちまうよ」
兄は笑って、また連絡するよ、と言って短い電話を終えた。拓海はシーツの上に寝そべったまま、酷く憂鬱な気分になった。兄が大学生になりこの家を出てもう二年が経とうとしている。兄が家を出てから、特にこの一年の間に自分と兄との関係が微妙に変わりつつある事を拓海は感じていた。意味もない電話のやりとりの中でも、兄は「大事な弟」という言葉を必ずといっていいほど口にする。二人の関係を一般的な「兄弟」の枠から踏み外さないようにするかのように。兄が自分自身にそう言い聞かせているのかもしれない。でも拓海は、兄から「大事な弟」と聞かされる度に、自分の兄に対する感情を牽制されているような気分になった。そして兄から見放さ

れたような心持がして寂しかった。

沈んだ気持ちを引き摺ったまま拓海は気怠い体を起こした。カーテンの隙間から見える空は曇天で濃い灰色の雲が光を鈍く遮っている。誰も居ない家の中は、ひっそりとしていて薄暗い。拓海は、もう眠りなおす気分にはなれなかった。特にあの夢を見た日は一人で家の中にじっとしているのは、たまらない気持ちになる。

九歳を過ぎた頃から、拓海はたびたび同じ夢を見る。黒いソファに足がぶら下がっている夢だ。歳を重ねるごとに見る回数は減っていったが、それでもまだ三月に一度はやってくる。あの夢には続きがある。

兄に連れられて部屋を出る時、拓海はもう一度ソファを見る。すると背もたれの上に知らない若い男が顔を出している。男は拓海と目が合うと気味の悪い笑みを浮かべる。

拓海は怖くなって兄に「あの人だれ？　おかあさんと何してるの？」と訊ねる。兄は「大きくなったら教えてあげる。それまで今みた事は誰にも言っちゃだめだよ」と言う。

それから段々と視界が薄暗くなり、急に耳元で大きな音がする。拓海が驚いて音のした方に目を凝らすと、薄暗い部屋の中で父が母へと暴力を振るっている。母は父に髪を掴まれ馬乗りになられた状態で奇声を発しながら足掻いている。そして拓海の存在に気付くと長い黒髪を振り乱して叫ぶのだ。

「余計な事しやがって！　クソガキ！　殺してやる！」

怒りと憎しみに満ちた瞳は血走って爛々として拓海を睨みつける。拓海は常軌を逸した母の眼光に恐怖で身動きがとれなくなる。

この夢を見ると拓海は大抵金縛りにあう。呼吸が上手く出来ずになって、やっと夢から醒めるのだ。夢から醒めても一時間は体がまともに動かない。今では金縛りにも大分慣れたが、九歳の頃は呼吸

困難で発作を起こし度々救急車の世話になった。本当に生死の境をさまよった事まである。その頃は夢に殺されてしまうのではないかという恐怖で不眠症になった。それを支えてくれたのが兄だった。夢をみた日はどうしても一人で居るのが堪えられなくて兄が傍に居なければ不安だった。兄との関係が単なる「兄弟」の枠を超えてしまったのは、拓海が丁度十三になった時からだ。その関係は兄が家を出るまでの三年間続いた。拓海は次第に自分の兄に対する感情が兄弟のそれではないと自覚していった。兄も同じだと信じて疑いもしなかった。

兄は一足先に変わっていく。拓海との関係を「兄弟」の範疇へと戻そうとしている。拓海はその兄の心持と自分の心持があまりにかけ離れていくのを、どうする事も出来ないでいた。

兄をこれ以上困らせたくはない気持ちはある。しかし拓海は自分自身の気持ちを処理しきれずにいる。表面上は仲睦まじい兄弟関係を維持出来ているように見えても、兄と自分の関係は危うい均衡をかろうじて保っている状態だ、そう思うと拓海はたまらなかった。

四、危うい均衡

夜の間に雨が降ったのだろうか。アスファルトは湿って黒く澱んでいる。太陽が分厚い雲で隠れてしまっているせいで、昼だというのに風は刺すように冷たい。拓海はマフラーを鼻の上まで上げて早足で歩き続けた。向かう先は市立図書館だ。

拓海は一人で家に居る事に堪えられなくなると、いつも図書館へ行っていた。その図書館は、高校の図書室に毛のはえた程度のこじんまりとした所で、学術書は殆どなく娯楽系の小説や雑誌ばかり置いている。学生用の自習室なんて気の利いたものもなく、四人掛けのテーブルが六つあるばかりだ。そのテーブルも夏休みこそ学生で埋まるが、大抵は数人の老人がちらほらと腰かけている程度で、平日などは特に利用者もまばらだ。その割に本の盗難や破損は頻繁に起こるらしく、入り口の壁には注意を呼びかける大きな張り紙がある。かといって手荷物は持込可で、職員の見回りもない。管理が杜撰なのだ。拓海は大きな図書館特有の堅苦しさのない、気の抜けたこの場所が気に入っている。

図書館は徒歩二十分程度の距離にある。たいした距離ではないが、前日の試験の疲れと今朝の夢の事や兄の態度に気分の塞がった拓海には辛かった。貧血の症状に似た眩暈と耳鳴りが緩やかな波のように絶えず襲ってきて、体の感覚すら曖昧になる。足は動いているはずなのに自分で動かしている実感がわかない。激しくなる動悸ばかりに気をとられて、体の感覚まで処理しきれていないのだ。意識と体が上手く釣りあわなくなる事はこれまでも度々あった。心因性のものでしょう、と医者に診療内科を勧められてから、拓海はその病院にも心療内科にも行っていない。原因は判りきっているからだ。その原因を「治療」という名目で他人に探られる事も無暗に触れら

れる事も拓海には我慢出来ないことだった。それが自分に悪い影響をもたらすものであっても、それは拓海に深く根付いて今の自分自身を形成している。それを安易に取り除かれると、今の自分の存在まで消えてしまう気がして拓海は不安だった。眩暈や動悸を伴うこの症状も発作のようなもので時間が経てば次第に治まる。拓海は途切れそうになる意識をこらえて歩き続けた。

図書館に着いた頃には、拓海の体はとうに冷え切っていた。
カウンターを抜けて閲覧ルームの一番奥の席に身を投げ出すように座ると、拓海はやっと安堵して息を吐いた。室温は人肌程度の生温さで強張った体を慈しむように包む。この緩い空気と静かだが完璧な静寂ではない穏やかな空間は、拓海の不安定な心と体を落ち着かせてくれる。館内には司書や利用者も居るが、干渉してくる事はない。近くに人が居ることを実感できて、だからといって何の関わりも持たなくていい、このくらいの距離感が拓海の孤独感を紛らわせるのにちょうどいいのだ。自分を誰にも損なわれることなく、不安定に揺らぎがちな自分の存在を保つ事が出来る。周囲に人が居れば理性が働く。寂寥や不安に泣きたくなっても、叫び狂いたいような衝動に駆られても、理性がそれを抑えてくれる。兄が家を去ってから、拓海は壊れそうになる自分の均衡をこの方法で抑えつけてきた。

しばらくぼんやりと椅子に背を預けて動悸こそ静まったが、拓海は到底何をする気にもなれないでいた。テーブルの上に持参した受験対策の参考書を開いて置いてはいるが、全く頭には入ってこない。ただ頬杖をついて読むでもなく眺めるばかりだ。二十五日から始まる前期試験の事を考えると気が重い。試験そのものというよりも、その先の結果が拓海を悩ませている。
拓海は、兄の傍に行きたいという一心で兄の通う大学を受験する

事に決めたし、そのための勉強をしてきた。兄が大学に入って変わったのは、単に物理的な距離だけではない、環境の変化か何らかの要因で兄自身も拓海との関係も微妙に変わりつつある。拓海はそれを最初は離れて暮らしているからだと思った。だから兄の大学へ行き一緒に暮らせば元に戻ると信じたかった。だがそれはあくまでも拓海の望みである。兄と同じ大学を受けると告げた時、兄は特に反対する素振りは見せなかった、その代わりに「大事な弟」と度々口にするようになった。兄が自分との関係をただの「兄弟」の枠に戻したいのなら、拓海の望みも兄に寄せる感情も単なる独りよがりで、兄には重荷にしかならないだろう。そう考えると拓海は辛かった。

だからといって、受験に失敗したり諦めたりしてもその先どうやって生きていけばいいのだろう。

兄と離れて暮らした二年間、拓海は決して一人で過ごす事に慣れたわけではない。ギリギリの所で堪えていただけだ。それも兄の存在が支えになっていたからだ。その唯一の拠り所を失って、一人きりでひたすら不安や寂しさに堪え続けていかなければならないなど、考えるだけで拓海は気が遠くなる。

これから自分がどうすべきか考えてみても、どちらを選んでも自分に与えられている路は薄暗い。報われない徒労ばかりだ。拓海は半ば投げやりな気持ちになって机上に突っ伏した。

四、危うい均衡（後書き）

更新遅くなってごめんなさぃ←
次の話から少しずつ性描写入ります。

五、閉架書庫

どのくらいそうしていたのだろう。眠るわけでもなく机上に伏せていた頭に軽い衝撃を感じて、拓海は我に返った。ゆっくり体を起こそうとすると更に後頭部に鋭い痛みが走る。

半ば無理やり上向けられた先に、全く歓迎出来ない顔がある。昨日電車内で体を好き勝手に弄ってきた少年、渡辺裕斗だ。目が合うと裕斗は悪戯の成功した子供のような笑みを浮かべた。そこで拓海は後頭部の痛みの正体が自分の髪を裕斗が強引に掴んでいるのだと気付いた。

「離せよ」

冷淡な態度を見せても怯むような相手じゃないことは昨日のやりとりで気付いてはいたが、拓海はそれ以外に態度のとりようがない。裕斗は拓海の知る人間の中で一番厄介なタイプだ。

干渉されない程度の距離で人と接する事を好む拓海にとって、裕斗のようなタイプと仲良くやれるとは思わない、むしろ出来れば関わりたくない。裕斗の接し方は干渉どころか傍若無人で、相手の意向など構わずに好き勝手に踏み込んできては拓海の感情を荒らしてゆく。それを楽しんでいる風なのが何より性質が悪い。

「何だよ、お前に会いに来たのに」

拓海の予想通り、裕斗は平然と笑っている。

「それとも何？　俺の事覚えてないわけ？」

「何で俺が此処に居るってわかったんだよ？」

拓海は裕斗の質問を無視して改めて裕斗に訊ねた。偶然会ったのならまだしも、自分に会いに来たというのが解せない。

「だってお前、いかにも図書館で勉強してそうな感じじゃん。高校だって超進学校だろ？　お前の高校の奴等どうかしてるぜ。電車の中でまで勉強してんだよ。此処来る途中、電車の中でお前の高校の制服来てる奴揃いも揃って参考書開いてんだ、かなり気持ち悪かっ

たね、あれは」
　裕斗はそう言い捨てて拓海の隣へと腰を降ろした。裕斗の物言いは一々挑発的だ。拓海は裕斗の挑発的な態度が彼の素の性格なのか悪意や敵意を持ってあえてそうしているのかを判りかねて返答に詰まってしまう。
「でも俺の勘は半分外れたな。図書館ってとこまでは当たってたけど。優等生面して勉強してると思ったら、わざわざ図書館まで来て寝てんだからさ」
「何か用があって来たんぢゃないのか？」
　裕斗の態度が故意でもそうでなくても、拓海は挑発に乗ってやるような余裕はない。昨日の事で、裕斗のペースに巻き込まれると面倒になるのはわかっている。拓海は出来る限り話を早く切り上げようと尋問に近い口調になる。
「だからお前に会いに来たんだよ」
「もう会えただろ？　帰れよ」
「まだ全然話してないじゃん」
「俺は別に話す事なんかない。それに此処は図書館だ、雑談する場所じゃない」
「……拓海って、全く俺に興味持たないんだな」
　出し抜けに暗い声で言われて、拓海は驚いて裕斗を見た。裕斗はあからさまに傷付いた顔をしていて、拓海は妙な罪悪感を感じてたじろいでしまう。さすがにこのまま追い返すのは後味が悪い。乱暴な話し方や挑発的な態度に惑わされがちだが、悄然として俯いたままの裕斗はいかにも繊細で脆そうな少年に見える。華奢な体や幼さの残る顔立ちは、人に警戒心を抱かせる事なく無条件に好意的な印象を与えるように上手くバランスを保っている。きっと周囲に優しくされてきて人に拒まれることに慣れてないのだろう。
「言い過ぎた。少し気が滅入ってたんだ」
　拓海は宥めるように口調を和らげた。裕斗は黙り込んだまま、探るようにじっと拓海を見つめてきた。裕斗は何か言いたげな表情だ

が、拓海は裕斗の真意がわからない以上黙っているしかない。ただ見られている居心地の悪さに拓海は堪えていた。しばらくして裕斗が席を立った。帰るつもりなのか、と拓海は半ば安堵して息を吐くと

「何ぼんやりしてんだよ。行くぞ」

と裕斗が振り返って、ぶっきらぼうな声を出した。

ほとんど強制的な物言いに、思わず拓海も従って立ち上がった。裕斗はそれを確認するとすぐに背を向けて歩き出す。椅子の上に裕斗の上着が置いたままだから外に出るわけではないのだろう、拓海は自分も荷物をそのままにして慌てて裕斗の後を追った。

「行くって、何処へ？」

「閉架だよ」

「へイカ？」

「お前を探してる時に閉架書庫で面白い物見つけたんだ。お前も見るだろ？」

裕斗はいつもの口調に戻っていて、一足遅れでついて行く拓海に笑いかけた。

拓海は裕斗が一体何を考えているのか全く理解出来なかった。急に黙り込んだかと思えば、同意もなく連れまわそうとする。拓海から見れば気まぐれを通り過ぎて奇行ともとれる言動でも、裕斗の中では一貫性があるのかもしれない。ただそこに拓海への気遣いが全く入っていないだけだ。拓海は結局裕斗のペースに巻き込まれている自分に気付いて憂鬱になる。きっと裕斗は、自分とは違い我儘も甘えも許されるような幸福な環境を生きてきたのだろう。愛される事が当然の立場にある者は、自己に対する卑屈さを持たず自信に満ち溢れている。変に他人の顔色を窺う事もない分、平気で無神経な言動をとる。裕斗の傍若無人ぶりは、恵まれた環境とコンプレックスとは無縁そうな整った容姿で形成されたのかもしれない、拓海は裕斗の奇異な言動にそう結論付けた。

裕斗は軽い足取りで閲覧室の隅にある階段を下りていく。拓海は図書館に来ても二階の開架しか使っていない。一階に閉架書庫がある事すら知らなかった。図書館は緩やかな坂の中腹に埋れるように建てられている。そのため入り口は一、二階両方にあり、図書館に用のある者は大抵二階の入り口を使う。一階は会議室と視聴覚室があるくらいだと思っていた。

「勝手に入っていいのか？」

閉架書庫の扉の前まで来て拓海は戸惑った。分厚い鉄の扉には立ち入り禁止の札はないが、一般公開されているという雰囲気ではない。

「鍵掛けてないんだから入っていいって事だろ」

裕斗は平然と言って中へ入ってゆく。拓海はドアノブに鍵穴があるのを見つけ、図書館の管理の杜撰さを改めて感じた。

暖房の効いていない閉架書庫はひんやりとして薄暗い。蛍光灯は点いているが、天井に届きそうな程大きな書棚が均等に置いてあるせいで、本のタイトルをなんとか確認出来る程度だ。拓海は書棚に並べてある本のタイトルを目で追ってみたが、薄汚れて破損したものや雑誌のバックナンバーが窮屈そうに収まっているばかりでたいして興味を惹かれるものはない。閉架書庫といっても貴重な蔵書を置いているわけではなく、単に古くなって開架に出せなくなったものを移して置いてあるだけのようだ。

「ほら、こっちだよ」

裕斗は躊躇う様子もなく奥へと進んでゆく。拓海は戸惑いつつも好奇心に負けて裕斗の後を追った。

一番奥の書棚の前で、裕斗は立ち止まってしゃがみ込んだ。拓海が傍に寄ると、

「お前って警戒心ねえよな」

と裕斗は拓海を見上げて笑う。その刹那、拓海は腕を掴まれて押し倒された。拓海は体制を崩し、壁に背中を打ち付けてそのまま床に座り込んだ。埃っぽいリノリウムの床も背をあずけている壁も冷え切っていて拓海の体温を奪う。体を起こそうと拓海が床に手をついたところで、裕斗が拓海の手を押さえてキスをしてきた。

六、閉架書庫

乱暴な所作とは対照的に、唇は穏やかに触れてくる。特に欲情されているという感じでもない。拓海は心地良ささえ感じてしまいそうな穏やかなキスに、反抗するタイミングを完全に逃してしまった。

「今日はやけに素直なんだな」

唇を離して裕斗はからかうように言う。

「抵抗して欲しいのか？」

「その方が燃えるだろ、やりがいがある」

真顔で言い返されて、拓海は溜め息を吐く。

「何で俺が煽るような真似しなきゃならないんだよ」

「じゃあ煽らなくていいぜ、抵抗すんなよ」

墓穴を掘った、と拓海が後悔した時にはシャツの下へと裕斗の手が入り込んでいた。指先で体のラインを確かめるように脇腹をなぞる。腋窩へ指が触れ、拓海はくすぐったさに身を捩った。裕斗は楽しげに拓海の反応を見下ろしている。

「こういう拷問あったよな。ひたすらくすぐり続けるってやつ」

裕斗の指の動きは情事のそれとは程遠い、ただ拓海を擽ってこそばゆがらせる事を目的としたものへと変わっていく。拓海は笑い出すわけにもいかず、その刺激に体を震わせながら堪えた。

「何がしたいんだよ」

一向にくすぐる事を止める気配のない裕斗にしびれを切らして拓海は言った。裕斗の行動は全く不可解だ。自分に付き纏うこともキスや過剰なスキンシップをとる事も、裕斗が自分に対して欲情しているというならばまだ納得出来るが、眼の前の彼にそんな様子はない。だからといって単なる冗談や悪ふざけにしては度が過ぎている。拓海は今の状況をどう対処するか決めかねていた。

「可愛い悪戯のつもりだったけど、」

言いながらくすぐっていた手が離れ、拓海の顎に添えられた。裕

斗の顔が近付いてくる。キスするつもりだろう、拓海はそう思っただけでそれを避けようとはしなかった。
「お前がそういう主義なら遠慮しないぜ」
唇を触れる寸前で一旦止め、裕斗は試すように言う。拓海が何か言い返す間もなく唇は重ねられていた。先程のキスと全く違う咬みつくような乱暴なやり方に拓海は戸惑いを隠せない。怯んだ隙に舌が割り込んできて、その濡れた感触ばかりが妙に頭の奥に響いた。
「な、に」
好き勝手に口内を蹂躙されて上手く言葉が繋げない。拓海は乱れた呼吸のまま裕斗を睨みつけた。裕斗は濡れた唇を拭いながら薄く笑みを浮かべる。
「男が好きなんだろ？　ヘテロならもっと動揺するはずだ」
沈黙を肯定と受け取ったのか、裕斗は拓海のシャツを捲くり上げて胸元へと唇を寄せてきた。無防備な肌が直に冷たい空気に晒されて拓海は身を固くする。裕斗の舌が触れ、その濡れた跡へと冷えた空気が纏わりついて奇妙な感触を残す。
「試してたのか？」
拓海は出来る限りの冷静な声で聞いた。
「ヘテロは相手にしたくないからな。面倒だし」
拓海の首筋に顔を埋めながら裕斗は答える。行為を中断する気はないらしい。
「確証が無かったから試したんだよ。お前の態度も冷たかったし、」
「俺はホモぢゃない」
拓海は裕斗の体を押し戻しながら、きっぱりと告げた。ノーマルだと言えば裕斗が行為をやめるだろうという考えから出た言葉だったが、実際に拓海は自分のことを同性愛者だとは思っていない。拓海は自分の兄に対する感情や欲望を一般に存在する恋愛感情とは違うものだと信じている。拓海にとって兄は唯一無二の存在で、兄以外の人間を必要とはしていないし興味もない。別に男が好きなわけではない。

「へぇ、じゃあ何で勃ってんだよ、ここ」
裕斗は拓海の言葉を鼻で笑って一蹴し、器用に左手で拓海のズボンを開けさせる。下着の上からでも判るくらいにそこは芯を持っている。
「まだ勃つほどの事はしてないぜ」
揶揄を含んだ口調で言われて拓海は赤面する。そのまま下着を下ろされ露になったものを躊躇う様子もなく裕斗が握ってくる。拓海は思わず声を漏らした。
「こういう事をしたらヘテロでも反応するかもな、でも」
裕斗は話しながら、拓海のそれを手で扱きはじめる。
「キスとあの程度の前戯じゃヘテロは勃たない。嫌悪感が先にくるからな。まさか俺が女に見えたってわけでもないだろ？」
ほら、と裕斗は拓海の手を掴んで自分の股間へと当ててみせる。拓海は羞恥と焦燥とがない交ぜに襲ってきて、言い返す言葉も浮かばない。諦めに似た投げやりな気持ちで、為されるがままに裕斗へと触れた。次第に裕斗も欲情してきたらしく、小さく体を震わせて拓海の膝を跨いで体を寄せてくる。起立した互いのものが触れ合って、拓海は小さく声を漏らした。裕斗は右手でその二つを擦り合わせるように触りながら、左腕を拓海の肩へとまわして唇を重ねてきた。拓海には自分が何故こんな事をしているのか省みる余裕も残っていなかった。下肢を湿らせている蜜も、触れ合った体の熱も、胸に響く速い鼓動も自分のものなのか裕斗のものなのかすら判断出来ない。渇望しながらも長い間与えられなかった人肌の感触と温もりに意識を奪われて、溺れてしまいたいような衝動に呑み込まれていく。

束の間の恍惚は余韻を残さず忙しなく去っていく。セックスとはいえない遊戯の後、拓海は虚しさでも後悔でもなく、言葉に出来な

いくらいの強い恐怖心に襲われた。今まで信じて守り抜いてきたものを自分自身で壊してしまったような不安だ。拓海は自分の事がわからなくなった。慕う人がありながら目の前の少年に流されてしまったことだけではない。たいして親しいわけでもない他人同然の彼に触れられて吐精したという事実を自分自身どう処理していいのか判らない。裕斗との行為は、初めの穏やかなキスこそ兄を思い起こさせるものがあったが、それ以降は全く別のものだ。兄の触れ方は慈しむような柔らかいものだ。抱かれる度に自分の存在を静かに認識できるような深い安心感に満ちている。裕斗との場合は違う。焦燥に駆られて何も考えられなくなるような自我も保てないものだ。だから今、どうしようもない不安を感じるのだ。別のものだと考えようとしても、射精したという事実は変わらない。それが拓海の不安に拍車をかける。今まで拓海の中で培われてきた兄との愛情を確かめる行為そのものを、誰とでも出来るような瑣末な事だと認識しなくてはならなくなる。拓海は浅ましいとは思いながらもそれだけは避けようとした。

「好きな人が居る」

はぐらかされないように拓海は言いたい事だけを口にした。書棚に凭れたまま指先に絡みついたままの精液を持て余していた裕斗は、唐突に発された拓海の言葉に顔をあげる。

「その人は男だ、でも俺はその人しか好きじゃないし、他の人を好きになるつもりもない。だから別に男が好きなわけじゃない」

そこまで言い切って拓海が改めて裕斗を見ると、別人のように冷ややかに笑う裕斗の顔があった。

「狡いな、気の迷いとでも言いたいのか？」

拓海は何も言い返せず黙り込むしかなかった。

「お前がどんな恋愛観を持ってんのかなんて知らないし興味ねえよ。別に俺は恋愛ごっこがしたいわけぢゃない」

裕斗は薄く笑みを浮かべたまま、拓海の首筋を指でなぞる。

「意外と締まってんだよな、お前の体。もっと貧弱かと思ったけど」

指は首筋から胸元へと下り臍の当たりで止まる。拓海は裕斗の真意がわからないまま話の続きを待った。

「最初から俺はお前の体以外興味ないよ。拓海が誰に恋焦がれてようと関係ない。欲望には肉体の欲望と精神の欲望がある。男は好きじゃないとお前が思ってても、お前の体は男に欲情するだろう。全く別の二つの欲望をごっちゃに考えるから矛盾が生じる。切り離して考えろよ。俺は拓海には肉体の欲望しか持たないし、拓海の肉体の欲望しか関心はない。だからお前の精神の欲望に答えるつもりもなければ尊重する気もさらさらないね」

饒舌に語られた裕斗の持論を、拓海はすぐに理解は出来なかった。考え方が自分とはかけ離れすぎている。ただ拓海は自分が感じた恐怖の一端が、裕斗の考えからもたらされたものだと知った。もし肉体の欲望と精神の欲望というものが別個のものとして存在するのなら、裕斗のやり方では肉体の欲望にばかり過剰に働きかける事になる。そうなると精神と肉体のバランスは崩れて保てない。自分の感じた恐ろしさは、同じように渇望していた二つの欲望の一つだけを無理やり満たそうとして自分が保てなくなった事かもしれない。そう納得しかけて、拓海に一つの疑問がわいた。裕斗が何故肉体の欲望に固執しているのか、だ。どちらか一つだけで足りるものなのだろうか。それとも裕斗には精神の欲望を満たす者が居るのだろうか、それとも・・・・・・

七、溢れひたす闇に

試験までの数日を拓海は慣れないベッドの上で過ごす羽目になった。

裕斗と別れた後、ふらふらと宵闇の中を彷徨った末体調を崩したのだ。幸い流行りのインフルエンザではなく微熱と食欲不振という症状の単なる風邪だった。それでも一人で家に置いておくわけにはいかない、という祖母の考えで伯父の家で養生する事になった。拓海の父は仕事一本の人でほとんど家に帰って来ない。ここ数年は月に一度顔を会わせる程度で、ろくな会話もしていない。そういう事情で拓海は実の父よりも、父の兄である伯父の方に肉親としての親しみを持っている。伯父の家で暮らす祖母は週に何度か拓海の様子を見に拓海の家へと足を運ぶ。休日などは伯父も祖母の送迎役として付き添ってやってくる。子煩悩の伯父は、拓海に対しても優しかった。大人の威厳には欠けるがその分人の良さそうな顔をしている。偉そうな素振りを見せる事もなく、好んで道化役を買って出る。

「拓の風邪が良くなるように母さんとお参りしてきたんだよ。あと林檎も買ってきた。食べれるかい？」

拓海は礼を言って林檎の盛られた皿を受け取る。伯父は小さな子供に接するような手つきで拓海の頭を撫でる。

「少し痩せた？　拓は小食だからかな、でも背は伸びるんだから不思議だ。もうおじさんより高いだろう？　まぁでも横幅は当分抜かれそうにないな」

鷹揚な声で言って伯父は中年特有の緩みのある腹を叩いてみせる。屈託のない笑顔は伯父の周りだけでなく、伯父の家の隅々まで行き渡っている。陽射しの匂いの残る寝具や、壁に飾られた色褪せた従姉妹たちの拙い絵画、硝子棚に並べられたアルバムや写真立ては正月に来た時よりも数は増えている。写真立ての中身は振袖姿で微笑

む従姉のものへと変わっていた。見渡せば見渡すほど、破綻のない明るい家庭の空気が全ての物に馴染んでいる事を拓海は感じた。伯父も祖母も、自らの持つ幸福を惜しみなく滲ませて他の者がそれに触れることを拒まない。

「気兼ねする事はないさ。受験生は我儘にふるまっていいんだ。暁なんて受験を盾にデートばっかりしてるんだよ。気分転換が必要だって言って毎日出かけてるよ。最近の中学生は大胆なんだな。しかもその彼女が可愛くていい子なんだ。ほんとに父親は出る幕なしさ。でもその子と喧嘩した時は酷く落ち込んでたな、夕飯の時に鍋をひっくり返したんだ。テーブルはひっくり返らなかったみたいだ。あの時は嫁さんと思わず笑ったよ。ちゃぶ台にしておけば、ちゃぶ台返しが見れたってな。それでちゃぶ台を買いに行ったんだけど、その日に暁は彼女と仲直りしたらしいんだ。だからちゃぶ台は庭の物置で出番を待ってる」

伯父は快活に笑って家族の話を続けた。拓海はほとんど聞き手にまわる事になったが伯父に話しかけられている時は少し気分が和んだ。ただ同時に言いようのないやるせなさを感じるのもたしかだった。当たり前のように幸福で真っ当に生きてゆく人々と拓海はあまりにもかけ離れたところに居た。拓海は無性に兄に会いたかった。

空港で伯父と祖母に見送られて、拓海は焦がれ続けた兄のもとへと向かった。兄とは一年近く会っていない。しかし拓海には冷静に兄との関係を考えたり兄の真意を危ぶんだりするような余裕はもう残っていなかった。ただ兄に会いたいという気持ちばかりが勝っていた。空港まで迎えにいく、という兄の言葉をわずかな理性で断って、拓海は乗り慣れないバスに揺られていた。兄の住むマンションには引越しの手伝いの際に一度行ったきりだ。もう二年も前のことになるが、拓海には兄の部屋までの道すじを完璧に思い出すことが出来る。会わずにいる間、何度もこの街に住む兄の事を空想してい

たからだ。繁華な大通りは並ぶ店の顔ぶれも変わっていたが、そこを脇道へと入るとマンションやアパートの並ぶ閑静な住宅街で、小さな公園やひっそりと看板を掲げる寂れた古書店なども二年前と変わっていない。逸る気持ちを抑えることも出来ずに、拓海はバスを降りるとすぐに駆け出していた。

乱れたままの呼吸を整えようともせず、拓海は呼び鈴を鳴らした。扉が開いて焦がれ続けた面影が視界に映った瞬間、挨拶も忘れて拓海はそこへ崩れるように抱きついていた。

「ちょっと見ないうちに大きくなったな」

兄は拓海の体を支えるように抱き寄せて笑う。確かに抱かれる感触は違う。それは拓海の背が伸びたこともあるだろうが、兄の体も確かに変わっていたからだ。兄は身長こそ変わっていないが、胸板も肩から背にかけての厚みも増して以前のような少年期特有の弱弱しさはない。無駄な贅肉も過度の筋肉もない均整のとれた大人の男の体がそこにはあった。一瞬、感触の違いに拓海は戸惑ったが耳に響く兄の声が聞き慣れた変わらない優しい声調なのに安心して目を瞑る。全てが変わってしまうわけではない。外面の変化よりも本質を示す声や体温の方が拓海にとっては重要なのだ。

「迷わなかったか？　遠慮なんかしなくても迎えくらい行けたのに」

しがみついたままの拓海の背をあやすように撫でながら兄は問う。

「だって、兄さんと会うと自制が効かなくなる。迎えに来てもらったら、空港で人目も気にせず抱きついてたと思う」

拓海は素直に白状しながら、自分の言った事に自分で照れて兄から離れた。

「体調崩してるって聞いてたけど、そんなこっちまで照れちまう事が言えるんだから大丈夫そうだな」

兄はまた笑って、照れ隠しのようにぶっきらぼうに言ってみせる。拓海はその分、素直に兄に甘えることが出来た。

守られているような柔らかい空気に、不安も何もない子供のよう

に甘えきった心持が無防備なまま現実に突き落とされたのは一日目の試験を終えて兄の部屋に戻った時だった。
　此処に来てから兄が自分に対して性的な意味のある接触をしてこないのは、体調を崩していた事と受験中でもある自分への配慮だろうと甘えた気持ちに浸っていた拓海は軽く考えていた。電話ではくどいくらいに繰り返されていた「大事な弟」という言葉を、会ってからは兄が一度も使わなかった事も拓海を安易な考えと向かせた。しかしその安易な考えをあっさり打ち破らせた突然の訪問者だ。
　兄がキッチンで夕食の準備をしている間、部屋で明日の試験に備えて参考書を開いていた拓海は不意に鳴った呼び鈴の音に顔を上げた。
「いい、俺が出るから」
　蛇口を閉める音とともに、キッチンから兄の声がする。拓海は参考書へと視線を戻しかけて訪問者らしい人の声を聞いてそれどころではなくなった。若い女の声だ。

八、溢れひたす闇に

嫌でも二人の会話は拓海の耳に入ってきた。話しぶりからも兄がその声の主と親しい事はわかる。女特有の甲高い媚を含んだ声質が妙に拓海の神経に障る。

「え？　弟くん来てるの？　見たい見たい！」

「莫迦いうなよ。明日も試験あるんだから邪魔すんなよ」

「ちょっとくらい良いじゃん。紹介してよ」

「だめ。今度埋め合わせするから」

「なによ、ケチ」

「膨れんなって」

女と話す時の兄の口調は拓海に対するそれよりもぶっきらぼうだ。だがそれが逆に遠慮のいらない程親しい仲である事を暗示している。頼み事をされると出来る限りの誠意を見せようとする兄が、あっさりとその女の頼みを却下するということは、兄がその女に対して些細な事では揺るがない信頼を置いているからではないだろうか。しかも会話の雰囲気には二人の関係が親友というだけでは片付け切れない含みがある。拓海は急激に体内の血が冷たくなっていくのを感じた。

「今の人は？」

拓海は力の抜けきった声で部屋に戻って来た兄に訊いた。

「ああ、大学の子だよ」

何気ない風を装って兄は答える。どういう関係、と拓海が続けて訊こうとした時、兄の携帯が鳴った。

「悪い。すぐ戻る」

そう言い残して、兄は携帯の画面を確認するとすぐに慌しく部屋を出ていった。拓海は呆然と兄の背を見送った後も無機質な音をたてて閉まった扉を見つめ続けた。きっとあの女のもとへ行ったのだ

ろう。

・・・・・・結局、何もかも幻想だったのか。突然襲い掛かった現実の暗さに拓海は愕然とした。一人きりなった部屋は、守られている気になって油断しきっていた拓海に手の平を返すように現実を叩きつける。例えば煙草だ。窓際のチェストの上に置かれた灰皿と煙草の箱、兄は煙草の苦手な自分を気遣って煙草を吸わなかったし、拓海自身煙草に詳しくないから深く考えなかったが大抵喫煙者は一つの愛煙のものがあるのではないだろうか。灰皿の横に置かれた煙草は二種類ある、マルボロとバージニア・・・・・・味の違いなど拓海には知る由もないが、度数が違う事くらいはわかる。拓海はこの兄の暮らす空間を共有している者が居る事を疑わずにはいられなくなった。テレビ台に並べられたＤＶＤの中に兄の趣味ではなさそうな恋愛映画が混じっていたり、書棚にさりげなく兄の学ぶ理系科目教材に埋れるように近代の詩集が並べられていたり、些細な違和を感じさせるそれらを見落としていた自分の愚かさが憎い。拓海の中に生まれた疑心は確信に変わりつつあった。兄と先刻の訪問者との関係に一つの結論をつけなくてはならない。

すぐ戻る、と言った兄は中々帰って来なかった。もう日付も変わろうとしている。打ちひしがれて兄の帰りを待っていた拓海は半ば自虐的な気分で書棚から到底兄のものとは思えない詩集を抜いた。何度も開かれ読みこまれた形跡のあるそれは、やはり読書の趣味のない兄が愛読する類ではないはずだ。

つめたい！　光にかがやかされて
さまよひ歩くかよわい生き者たちよ
己は　どこに住むのだらう――答へておくれ
夜に　それとも昼に　またうすらあかりに？

己は　嘗てだれであつたのだらう？

（誰でもなく　誰でもいい　誰か――）
己は　恋する人の影を失つたきりだ

何気なく開いたページを目で追って、拓海は冷静に詩集を眺める余裕すら無くなってしまった。この詩人の意図など拓海にとって問題ではない。拓海がこの詩のくだりを目にした偶然でさえ、拓海には兄ではないであろう詩集の持ち主からの挑発に感じられた。被害妄想じみた意識に連動するように視界が真っ白になっていく。拓海は手にとったそれを怒りに任せて引き裂きたい衝動に駆られた。だが結局それは鈍い音をたてて壁に投げつけられただけだった。水から放りだされた魚のように喘いで拓海はベッドの上に倒れ込んで泣いた。

「寝たのか？」
ひとしきり泣いてシーツの中で放心していた拓海は兄の気配を感じ目蓋をあげた。妙に頭はずきずきと痛んで、体は鉛のように重い。兄は独り言のように問いかけたが、反応のない拓海を寝ていると判断したらしく、点けたままだった蛍光灯を消し間接照明に切り替える。薄明かりが白い壁を橙に染めた。
「・・・・・・兄さん」
「起こしちまったかな、すまない。遅くなった」
拓海は兄に背を向けたまま壁に映し出される兄の影を見つめた。想像以上に自分の発した声は弱々しい。それでも拓海は兄の声を無視して話し続けた。
「俺が十三になった時の事覚えてる？　あの日、伯父さんの家で誕生日のお祝いをしてもらった。あの家の人達は皆優しいし、伯父さんも俺達の事まで本当の家族みたいに接してくれた。だから、ずっと伯父さんを父さんの代わりみたいに思ってた。・・・・・・誕生日ケーキが出てきた時、暁が興奮して転んだよね。鼻血が出て中々

止まらなかった。もうお祝いどころぢゃなかったし、伯父さんは蒼ざめてずっと暁を介抱してた。邪魔になっちゃいけないと思って二人で家に帰ってきてから、どうしようもなく寂しかった。今考えてみれば幼稚な寂しさだと思うよ。伯父さんはきっと怪我をしたのが暁じゃなくて俺でも同じようにしてくれたと思う。でも、家族っていう絆があって、当たり前のように心配されてる暁を見てると、愛情に満ちた家庭の有様を見せつけられると、たまらない気持ちになった。自分で壊しておいて、そんな資格なんて俺には無いのに、愛されたくてたまらなかった。それを俺は、兄さんに求めたんだ。もっと確実な証が欲しくて。それであの日の夜、・・・・・・愛したくて、愛されたかった。ずっと兄さんしか居ないし兄さん以外は要らないと思ってた。・・・・・・ねぇ、俺は重荷だった？　ずっと独りよがり、で、」

背後から力強い腕にきつく抱きしめられて、拓海の言葉は途切れた。

「明日、・・・・・明日ちゃんと話そう。今までの事も、これからの事も」

耳元で初めて聞く兄の切羽詰った声に、拓海はそれ以上何も言えなくなる。いつも拓海を安心させる兄の体温も声も、最早拓海の不安を増長させるだけだった。これから、その四文字がこの声も温もりも離れていく予感を拓海に与えている。壁に映る重なった二人の淡い影だけ、まるでそれが一つの存在のような像を形作っていて拓海は切なさに息が詰まった。

八、溢れひたす闇に（後書き）

作中引用している詩
立原道造（大正三年～昭和十四年）
「溢れひたす闇に」（『暁と夕の詩』昭和十二年十二月）

美しいものになら　ほほゑむがよい
涙よ　いつまでも　かはかずにあれ
陽は　大きな景色のあちらに沈みゆき
あのものがなしい　月が燃え立つた

つめたい！光にかがやかされて
さまよひ歩くかよわい生き者たちよ
己は　どこに住むのだらう――答へておくれ
夜に　それとも昼に　またうすらあかりに？

己は　嘗てだれであつたのだらう？
（誰でもなく　誰でもいい　誰か――）
己は　恋する人の影を失つたきりだ

ふみくだかれてもあれ　己のやさしかつた望み
己はただ眠るであらう　眠りのなかに
遺された一つの憧憬に溶けいるために

九、嘘の繋がり

気まずい朝を迎えて、鎖に繋がれた罪人のような気分で試験会場へと向かった拓海はほとんど心ここに在らずといった状態で試験を受けた。自分が一体何をしているのか、何のためか、そんなこともわからないで、試験が終わると逃げるように大学を後にする。校門を出て、他の受験生たちの列に呑み込まれながら、拓海は自分がどうやって試験を受けたのか、解答をきちんと書いたのかのかさえ思い出せなかった。ただ、大学内に居たくなかった。大学は春休みだし、受験日は在学生の立ち入りは禁止されているはずだ。キャンパスには大学生らしい人影は見られなかった。それでも拓海は昨日兄を訪ねてきた女と鉢合わせてしまいそうな気がして恐ろしかった。

それにもうその場所は拓海にとって、兄の学び舎として懐かしさを感じるものでも、志望大学としての憧れを抱くものでもない、兄とあの女を出会わせ、兄を変えてしまった呪わしいものになっていた。そんな場所に一秒たりとも長居したくはない。だからといって、兄の部屋へ戻るのも恐ろしかった。帰らなければならない、きちんと兄の話を聞かなければならない、そう思う一方で面と向かって兄から拒絶の言葉を告げられたら、と考えるとやりきれない。感傷を通り越して死んでしまいたいような絶望的な気分に浸りながら、拓海は重くなってゆく足取りを鞭打つようにして帰路についた。

「おかえり。遅かったな、疲れただろう。夕飯用意してあるけど」

兄は拓海の顔を見るなり、優しい声をかける。兄の態度は平然を装ってはいるが、どこかよそよそしさが残る。拓海はただ首を横に振って、俯いたままソファへと腰掛ける。兄は苦笑して、じゃあお茶を淹れよう、とキッチンへと入っていった。極刑を言い渡される直前の罪人の心持で、湯の沸く音を聞きながら拓海は身を固くした。

……縋りついて捨てないでと懇願して、兄が自分の思い通りになるというのなら事は容易い。しかしそれをやるだけの勇気すら拓海にはない。その上、兄の態度には寸分の隙も気の迷いもなく、あくまでも落ち着いている。感情的に事を運ぼうとしても流されるような人ではない。テーブルに置かれた珈琲を見つめながら、拓海は何の覚悟も出来ないでいた。

兄は拓海の隣に腰を下ろして、緩慢な所作で珈琲を口に運ぶ。少しの沈黙の後、煮え切らない態度のままでいる拓海に向かって、兄は最初にこう言った。

「昨日、拓海が言った事だけど……俺は一度だってお前を重荷だと思った事はないよ。拓海は俺の大事な弟だ。頼られて嬉しいと思うことはあっても、負担に感じることはない」

拓海は膝の上でぐっと拳を握りしめた。兄の口調は、覚悟を決めてしまった者の持ち得る一種の気楽さを含んでいる。拓海は話を聞く覚悟すら持てないままなのに、兄は既に何らかの覚悟を決めてしまっていて、それを一方的に進めようとしている。拓海はそう感じて理不尽な苛立ちに震えた。

「昨日、訪ねて来た人は誰？　兄さんが俺を単なる弟に戻したいのは、その人のせいだろう」

兄を少しでも動揺させたいだけで発した言葉は、結局拓海自身にはね返ってきた。兄は特に躊躇う様子もなく話し続ける。

「たしかに、その人とは親しい関係だ。拓海の考えてるような仲になるんだと思う。でもそれを盾に拓海に何か言うつもりはないよ。ただ俺もお前も愛情の方向を間違ってしまっただけなんだ。拓海は、あの女、……母親との事がトラウマになって女性に対して嫌悪感しか持てないんだと思う。俺も実際そうだった。でもそれは克服していかなきゃならない事なんだ。俺達が不道徳で不自然な関係になったのは、家庭の環境に問題があったからだ。環境を変えて新しい世界に身を置いて少しずつでいいから、変わっていかなければいけない。今のまま同じ傷を持つ者同士で寄り添って傷を舐めあってても

何も変わらないし、トラウマも克服出来ない。色んな人間と接して、女にも少しずつ慣れていけば、きっと本道に戻れる。最終的に拓海も大切にしたいと思える女に出会う日が来る。そして新しい家庭を築いて幸せになって欲しい。そうするのが拓海にとって一番良いことなんだ。俺と二人で過去に執着して閉じこもっても、結局何の解決にもならないよ。そのうち絶対に行き詰る」

拓海は感情的にならずには居られなくなった。あくまでも常識的に事を運ぼうとする兄をどうしようもなく詰りたい衝動に駆られる。

「たしかに、兄弟でずっと今の関係を続けるなんて無理かもね。俺じゃなくて、兄さんには」

言いながら拓海は、自分の発言の浅ましさに嫌気が差すが止められない。いっそのこと打たれて完璧に嫌われてしまった方が踏ん切りがつく。拓海は態と乱暴な言葉を選んだ。

「この間、男に触られてイったよ。はじめは本意ぢゃなかったけど、俺の体は男に触られて、触って興奮した。女が苦手なのは認めるけど、俺の体が男に反応したのは紛れもない事実だ。しかも兄さんとは丸きり似てない男の体だ。俺と兄さんは違うんだ。俺だけ真性だったって事。兄さんはもう俺に欲情なんてしなくなったんだ。兄さんとセックスしてた頃の俺は、まだ背も小さかったし顔も幼かった。高校に入るまでは女に間違われる事も度々あった。でも今の俺はそうじゃない。体も声も男そのものだ。兄さんが俺を単なる弟に戻したいのは、もう俺を以前のように抱けないから……兄さんは俺と違って真性ぢゃあ無かった」

兄を貶めようとする歪んだ気持ちから発した自らの言葉に拓海自身も傷付いて、拓海は自嘲した。兄は初めて乱暴な言葉を使う拓海に呆然としていたが、次第に怒りを露にして拓海の肩を掴んだ。

拓海は打たれると思って反射的に目を瞑る。だが痛みを感じたのは頬ではなく背中だった。ゆっくり目を開けると拓海は床の上に押し倒されていた。肩は痛いくらいの力で床に押し付けられている。

後頭部だけは、兄の腕に抱えられていて無事だった。拓海は至近距離にある兄の顔を混乱したまま見上げた。
兄は拓海を押さえ付けたまま怒りを押し殺した低い声で言う。
「俺が、拓海を女の代わりにしてたって言いたいのか？」
拓海ははじめて見る兄の苛立ちを滲ませた表情と声に何も言えなくなる。不意に左肩を抑えていた手が離れて、そのまま下着の中へと入り込んで来る。兄の手は乱暴に拓海の下半身を弄った。
「普通、いくら女みたいでも実の弟をそれだけで女の代わりに抱けると思うか？」
冷たい兄の声が響く。拓海がその声に身動きもとれずにいるうちに、兄の手は拓海のそこを離れ、素早く拓海の服を乱してゆく。
「それに、こんな事も」
兄は冷笑して、まだ反応しきれずにいる拓海のものを口に含む。兄の心を計り切れないまま、拓海は急激に熱をあげた自分の体に小さく喘ぐ。兄の触れ方はいつになく乱暴で性急だ。拓海の体を知り尽くしている舌は、敏感な所ばかりを刺激して、痛いくらいに拓海の熱を引き出そうと吸い上げてくる。拓海の意思も伴わないくらいの速さで、熱ばかりが上がっていき、そのまま拓海のそれは兄の口の中で果てた。一箇所に集中していた熱と快感が一足遅れて拓海の全身へと巡り出す。拓海は力の抜けてゆく体を持て余したまま、初めて見せる兄の苦悩の色に滲んだ表情に戸惑った。
「何もわかってない、拓海は、」
兄は、拓海の精液を自らの手に吐き出して苦しげな声を出す。
「俺がお前をどういう目で見てんのかも」
その声を聞いた途端、拓海は自分の中に兄の指が入ってくるのを感じて、小さく声を漏らした。まだ慣れ切っていないそこを押し広げられるような異物感に拓海は肩を震わせる。精液は潤滑剤の役割として機能するに至らず兄の指が動く度に擦れるような痛みが走る。拓海は顔を苦痛に歪めて、ただその痛みに堪えた。
「っ……そんなこと……」

苦しそうな拓海の表情を見かねたのか、兄が指の代わりにそこへ舌を這わせようとしているのを知った拓海は、顔を赤らめながらはじめて抵抗する素振りを見せた。兄は構わずに拓海の足を開いて、顔を寄せてくる。力では到底敵わないと知りながら、拓海は恥ずかしさから身を捩った。

「此処も使ったのか？」

頑なな拓海に観念したのか、兄は拓海の上から退いて潤滑油を出した。拓海の上へとそれを垂らしながらぶっきらぼうに問う。

「え？……っ」

冷たい液体を下に浴びながら拓海が兄の質問の意味を判らずにいると、また兄の指が乱暴に挿入されてくる。拓海は声を詰まらせた。

「お前は此処も他の男に触らせたのかって訊いてんだよ」

ぐっと中で指が動かされる。改めて兄に詰問されて、やっと拓海はその意味を理解した。

「……そんな事、出来るわけないぢゃないか」

「……どこまでしたんだ？」

「触りっこだよ、後ろは使ってない」

しばらく間があって、兄は少し冷静さを取り戻した触れ方になる。拓海は兄の怒りが嫉妬なのではないか、と思うが口には出せない。単純に期待を抱ける程、これまでの経緯もこの関係も簡単なものではないことを拓海は十分に知っていた。それでも、拓海は兄に触れられる懐かしさを思い起こさずにはいられない。抱き寄せてくる兄の腕に、今は何も考えずに抱かれていたい。拓海は兄に体を委ねた。

「お前に欲情しなくなったから、離れようと言ってるわけじゃない」

拓海を背後から抱きしめたまま兄は静かに言う。

「見た目云々の問題でもない。わかるだろ？　弟相手にこうなる奴が、ノーマルなわけがない」

「兄さ、」

拓海は後ろに熱を持ち固くなった兄のものを当てられるのを感じ

て声を漏らす。
「こういう時くらい、名前で呼べよ」
兄にそう言われて、拓海はさらに自分の体が熱くなっていくのを感じた。自制も効かないくらいに兄を貪欲に欲している。

「……ゆう、と」
拓海が躊躇いがちに名前を呼ぶと、中に兄のものが入ってくる。拓海は何度もその兄の名を繰り返し読んだ。熱に浮かされて目の前の兄の感触しか分からなくなる。自分と兄以外は存在していないかのような錯覚。それ以外の色は消え、過去も未来も世界も存在しない事になる。不安も恐怖もない、感覚は全て内面へと響く快感へと集約していく。拓海は意識を失うまで激しく自分を支配する快楽原則に従って、熱に溺れた。

十、嘘の繋がり

拓海が兄の声で起こされたのは、既に日付けも変わってしまって朝の十時を過ぎたところだった。

きちんと寝巻きを着て、肌は昨夜の名残りを微塵も見せない程丁寧に拭かれている。ただ下半身に残る気怠さだけが、昨夜の情事が夢ではない事を拓海に伝えていた。のろのろと覚醒しきらないままの体を起こした拓海の横に、兄は腰掛けて拓海の頭を撫でる。

「乱暴にして悪かった、何処か痛むか？」

拓海は照れながら首を横に振った。兄は俯いて拓海から視線を逸らすと、ポツリと呟く。

「本当の俺はこんな人間だ。嫉妬して身勝手な行動をとる。拓海は特別な存在で、弟以上の感情を持ってる。でもこのまま進めばいつまでも優しい兄では居られなくなる。わかっただろう？」

拓海は驚いて思わず叫んだ。

「それでもいい！　兄さんになら何をされたっていいんだ」

兄は静かに首を横に振って言った。全て白状する、と。

「俺は狡い人間だ。拓海はそれを分かってない。それもそうさ、俺がずっと隠してたんだから。母親の事……拓海はずっと自分のせいだと思いこんでいただろうけど、あれはお前のせいじゃない。あの女が他の男を連れ込んで遊んでた事は、お前が父さんに言う前から父さんは知ってたよ。俺が先に父さんに教えていたから。あの時の事は、お前の記憶も曖昧になってるだろうけど、俺はその場所に居なかっただろ？　入院してたんだ。……あの女に階段から突き落とされて」

「ど、うして？」

拓海は初めて聞かされる真実に息を呑む。

「入院といっても大した怪我じゃない。軽い脳震盪を起こしたから一日検査入院しただけだ。あの日、俺はあの女に直接言ったんだ。

もう家に男を連れ込むのは止めろって。俺だってその時にはあいつが何をしてるかくらい判ってたし、いい加減ウンザリしていた。でもまだどこかで信じてた部分もあった。子供に言われたらあんな母親だって少しは考えが変わるんじゃないかって。すぐに階段から突き落とされて、その望みは消えちまったけど。異常な物音に気付いた隣のおばさんが通報して、あの女は警察に、俺は病院に運ばれて大事にはならなかった。それで病院に駆けつけた父さんに全部話したんだ。父さんは当然憤ってたんだと思う。ここからは俺の憶測に過ぎないけど、家であの女が帰ってくるのを待っていた。そしたら拓海が無邪気に聞いてきた。「母さんはいつも男の人と何をしてるの？」って。間が悪い事に、丁度帰ってきたあの女はそれを聞いていた。父さんはそれに気付くなり、怒りに任せてそいつを殴ったんだろう。馬鹿な女は、自分が殴られているのは拓海が告げ口をしたせいだと思って拓海を罵った。でも実際は、父さんは俺を危険な目に遭わせた事に憤っていただけで、何も浮気くらいで女に手をあげる人じゃない。だから、拓海は何も悪くないんだ。自分を責める必要はない。今までその事を教えてやれなくて、すまなかった」

兄は俯いたまま苦しそうに息を吐いた。そして語気を強めてまた話し出す。

「身勝手だと自分でも思う。今までその事を教えなかったのは、拓海が離れていくのが怖かったからだ。拓海は今の俺達の関係を持続させようとして、過去の傷をあえて克服しようとしないだろう。それに気付きながら、俺は見過ごしていた。お前がそれを克服しない限り俺から離れていかないと思って。俺は卑怯な上に歪んでいる。でも、これ以上拓海を追い詰めたくない。……一年前、父さんが出張の帰りに此処に来た。長い間、ほとんど家族らしい会話もしてなかったから、逆に冷静に話し合う事が出来たよ。今まで殆ど親らしい事をしてやれなかったとまず謝られた。それから拓海の事を心配していた。拓海は自分の事を怖がっているから、出来る限り自分の分まで拓海を支えてやって欲しいと言われた。父さんは、あの晩に

拓海が発作を起こして倒れたのを母を殴っている自分に怯えたからだと思っている。だから拓海を怯えさせないように、仕事ばかりして家を空けるようになった。あの人は弱い人なんだ、でも俺達に親としての愛情を持っていないわけじゃない」

「兄さんは、俺との関係を終わらせたいの？」

拓海は兄の独白から滲む意図を悟って、震える声で聞いた。兄は痛いくらいに拓海を抱き締めて

「……俺は父さんを裏切れない。拓海のことは本当に愛している。出来る限りのことはしてやりたい。でも、もう俺は拓海と普通の兄弟以上の関係は持てない。わかってくれ」

辛そうな声を搾り出すように言う。拓海は、もう何も言えなかった。拓海を追い詰めたくないと言った兄を、自分も十分過ぎる程追い詰めてしまっていた事を感じて拓海は愕然とした。

泣く事も出来ずに虚ろな心を引き摺ったまま兄の部屋を後にした拓海は、伯父に出迎えられて一晩伯父の家で過ごした。呆然としたままの拓海には、色々と世話を焼く伯父やその家族に無理矢理の笑顔を返すことすらひどく苦痛だった。幸い伯父達は拓海の喪心を受験の失敗だと勘違いしているようで、何も詮索されずに済んだ。それでも気遣いを返す労力する起こらない拓海は、愛想笑いをしなければならない苦痛に堪えかねて、伯父の心配を振り切って翌朝伯父の家を出た。

意識もほとんどないまま、闇雲に歩いて駅に辿り着いた。周囲の人の流れに動かされるように切符を買い、改札を通ると行き先も確認しないまま到着した電車へ乗る。何も考えることが出来ないくらい、拓海は喪心しきっていた。電車はゆっくりと動き出し、窓の外の景色は移ろい始める。移ろう景色も朝日に照らされる街並みも何一つ拓海の心を動かすものはない。ただ電車に揺られていた拓海は、車掌に訝しげに話しかけられた。「終点ですよ」と。

電車を降ろされて拓海は駅のベンチへと力なく座り込んだ。寂れた駅には、ほとんど人の姿はない。次の電車がこの駅へと来るのは一時間も先の事で、当然と言えば当然である。拓海は目的を失ってしまっていた。兄を慕う事が許されない状況へとなった今、拓海を動かす力は何もない。それが拓海はどうしようもなく寂しかった。自分の心持を打ち明ける人間も居ない。そういう生き方をしてきた。自分がこれからどうやって生きていけばいいのかも分からない。生きている実感すらない。拓海は漠然とそう考えると無性に自分を傷つけて痛みで気を紛らわせたいような投げやりな気持ちになってきた。

不意にポケットに入れたまま忘れていた紙片に気付いて、拓海は半ば無意識に紙片に記された番号へと電話をかけていた。紙片は裕斗が以前強引に拓海に押し付けたもので、書かれているのは裕斗の携帯の番号だろう。

「誰？」

数回の呼び出し音の後、ぶっきらぼうな声がする。

「拓海、だけど」

「何の用だよ」

途端に聞こえてくる裕斗の声は棘棘しくなる。何に対して裕斗が不機嫌になっているのか判らず、拓海は黙り込んだ。

「お前が受けた大学って、試験が四日もあるんだな」

何も言わない拓海に痺れを切らして、裕斗は皮肉っぽく言う。何も考える余裕のなかった拓海は、そう言われて、紙片を渡される時に裕斗に言われた言葉をやっと思い出した。

「電話、待ってたのか？」

拓海が問うと、裕斗は少し間をあけて呟いた。

「……お前、その前に俺に言う事があるだろう？」

謝罪の言葉を待っているのだろう、拓海はそう考えたが、自分が発した言葉は全く別のものだった。

「会いたいんだ」
裕斗が呆れたような笑い声をたてた。
「今、何処に居るんだ？」
「××駅」
「何でそんな所に、……まぁいいや、四時にK駅に来い。会ってやるから」
裕斗は楽しそうにそれだけ言って電話を切った。拓海は自分が何故彼に電話をしたのかも、会いたいと口にしたのかも、わからないでいた。それをきちんと考える気力すらない。ただ急かされるように時刻表を確認に行った。

思いの他遠い所まで行っていたようで、裕斗の指定した駅に拓海が着いた時には約束の時間を五分過ぎてしまっていた。人波に押し流されるように改札を出ていくと自販機の前に不機嫌な顔をした裕斗が立っている。薄手のセーターと黒のボトムを着ている裕斗は薄着な分、いつにも増して細身が際立っていた。
薄着の彼を見て初めて拓海は今日がコートを着込むような気温ではない事に気付いた。厚着をしていても暑さを感じないどころか、全く外の温度の事など考えずにいたのだ。
「誘っておいて遅刻かよ。いい根性してんな」
裕斗は拓海に気付いて、まず毒を吐いた。
「それにしても、試験やつれにしては酷すぎる顔してるぜ」
拓海をまじまじと見上げて裕斗は不審気に言う。
「気分が悪いなら先に言えよ。別に俺がお前のとこまで行っても良かったんだからさ」
裕斗は少し口調を和らげて不満を言いながら拓海の手を引いて歩き出す。行き先がどこかも分からないまま、拓海はただ裕斗に従った。

五分程、無言のまま歩いて着いた場所は裕斗の家だった。裕斗は

当然のように拓海を招き入れる。拓海もそれに従って裕斗の部屋へと足を運ぶ。
「で？　振られたのか？」
部屋に通されてすぐに直球で問われて、拓海は固まった。
「試験なんかでそこまで落ち込まないだろ？　死にそうな顔してるぜ、お前」
裕斗は心配しているような感じでもなく面白そうに拓海を見つめる。拓海は投げやりな気持ちではあったが、裕斗に正直に答えるような気にはなれず俯いて黙り込む。
「第一、お前が態々俺に電話をよこすなんて、そうとしか考えられないな。慰めて欲しいんだろう？」
裕斗はあえて拓海にそれを認めさせたがっている。拓海は観念して乱暴に吐き捨てた。
「その通りだよ。だからお前に抱かれにきたんだ。体目当てなら、望み通りにやってくれるんだろ？」
裕斗は感情的な拓海の言葉を一笑して、ベッドへと腰掛ける。拓海は裕斗の次の行動を待った。
裕斗は座ったまま特に何もしてくる気配はない、拓海はどうしていいのか分からないまま訝しげに裕斗を見た。裕斗は拓海の視線に気付いて、また笑う。
「何、ぼんやりしてんだよ。お前が誘ったんだろ。先に断っておくけど、俺は死人みたいな顔した奴相手に勝手に発情する程困ってるわけじゃないぜ」
裕斗は拓海を試すように言う。裕斗が何を言わんとしているかは拓海にも判った。
「どうすればいいんだ？」
戸惑う様子も見せない拓海に、裕斗は少し驚いた顔をする。しかしすぐにいつもの悪戯っぽい笑みを見せて
「口でしろよ」
と言った。

拓海は言われるまま、裕斗の足元に跪いて覚束ない所作でベルトを外す。そして露になった裕斗のまだ反応していないものをそのまま口に含んだ。拓海は口淫の経験はなかった。口内に感じる慣れない感触と味に初めて戸惑いを抱く。拓海にある知識は兄にしてもらった時の事だけだ。行為を続けるにあたって拓海は必然的に兄との事を思い出さなければならなかった。胸が苦しくなって段々と今している事に集中出来なくなる。裕斗は泣き出しそうな顔をした拓海を見て溜め息を吐いて離れた。

「下手くそ、お前経験あるのか？」

拓海は俯いたまま弱々しく答える。

「ない。してもらった事はあるけど……」

「無駄に大事にされてたんだな。お前は振られた腹いせに別の男を誘うような奴なのにな。相手はどんな男？　よっぽどの馬鹿だろ？」

裕斗の侮りを含んだ言葉に、拓海はカッとなって手を振り上げた。打つ前にその手は掴まれてしまい、裕斗に引き寄せられる。裕斗は素早く唇を被せてきていた。拓海は泣きたい気分でキスがどんどん深くなっていくのを受け入れた。

十一、漂泊の憂い

「どんな男？」
長いキスの後、裕斗は改めて聞いてくる。拓海は俯いて話題をどう逸らそうか思案したが、自分にそういった能力がない事も裕斗に気遣いや弁えがない事も判りきっている事だ。拓海は諦めて簡潔に答えた。
「兄だ。血の繋がった、」
拓海は多少の軽蔑や好奇の眼差しを向けられることを覚悟していたが、意外な程裕斗の態度はあっさりとしたものだ。
「不毛だな。何でそんな面倒なのに惚れるんだよ。で、振られた理由は？　まぁ大体想像つくけど」
「……もう普通の兄弟以上の関係は持てないって」
「くだらないな」
おずおずと言い添えた言葉をばっさりと切り捨てられて、拓海はたじろいで裕斗を見た。慰めを期待していたわけではないが、隣に座る裕斗は先刻までとは別人のように冷めた表情をしている。
「駅の裏に公園がある」
「え？」
「同類が集まるとこさ。相手が欲しいんなら、其処へ行け。あんたは顔だけは良いからな、相手くらい簡単に見つかる」
そう言い捨てられて、何も言い返せずにいる拓海に、裕斗はさらに捲し立てる。
「馬鹿らしい。何で俺がお前の自暴自棄に付き合ってやんなきゃなんないんだよ。そりゃあ割り切った遊びなら構わないぜ。性格はともかくお前の体は好みだし。でもお前は一方的に愛されたがってるだけだ。そんな奴に割り切った遊びなんて出来るわけがない。自分を悪者にする気のない奴の自棄に付き合わされるのなんて傍迷惑だ」
「……別に、愛してくれとか言うつもりはない。自棄なのは認める

けど、割り切った遊びで良いんだ。俺だってそのくらい割り切って考えられる」
「その程度の読解力でよく進学校に受かったな。俺は自棄になってる奴に割り切った遊びは出来ないって言ってんだよ。どうせ自分が投げやりになってんのも兄貴に振られたせいにするつもりだろう？
それで俺に抱かれたら、傷付いた寂しさに付け込まれたって事にでもするんだ。冗談ぢゃないぜ」
「違う、」
「違わないね」
感情的になった拓海の言葉を遮って裕斗は言い捨てる。拓海が言葉を続けようとする前に、裕斗が首に腕を回して抱きついてきた。
「違うって言うなら、お前が抱けよ」
「何言って」
「拓海が、俺を抱け」
拓海の位置からは裕斗の表情は見えない。華奢な肩と異様に白い首から背中へのラインが見えるだけだ。唐突な裕斗の命令の真意を判りかねて拓海は何も言えずにいると、裕斗は一旦体を離して、ほら見ろ、とでも言いたげに見上げてきた。
「ただ欲望を満たしたいだけなら、別にお前が挿れる方でもいいはずだ。躊躇う必要なんかないだろ？　拓海は結局、重荷を背負いたくないだけなんだよ。受身にまわってりゃ自分の意志かどうかなんて考えなくて済むからな。自分から誘っておいて、その事に責任を持つつもりはない、腐った女みたいな思考で反吐が出るね」
裕斗の言い方が自分に対する単なる挑発である事は拓海にも理解できた。だが、その言葉が全くの真実であるような気がして拓海は何も言い返せない。裕斗はつまらなそうに舌打ちして、服の乱れを直すとそのまま部屋を出て行った。一人残された部屋で自己嫌悪に打ちひしがれていた拓海の耳に階下で談笑する裕斗の声が届いた。会話の内容は聞き取れないが、途切れがちに聞こえる笑い声は女のものである。おそらく裕斗の母親だろう。拓海はぼんやりとそれを

聞きながら、帰ろう、と決意した。階段を昇る足音を確認して、拓海は立ち上がる。
「開けろよ。ちょっと手が離せないんだ」
扉のすぐ向こうで裕斗の声がする。言われた通りにすると、紅茶と焼き菓子を載せたトレイを覚束ない所作で持った裕斗が入って来た。
「甘いの大丈夫？　適当に砂糖入れてきたけど」
テーブルの上に紅茶を置きながら話す裕斗の声も表情も、先刻までの事がまるで無かったかのように平然としている。ドアの前で立ち尽くしていた拓海は、裕斗の豹変ぶりに呆然としながら答える。
「帰るよ」
「は？　泊まってけよ。そういう事になってんだから」
「なんだよ、それ」
「俺は小食なんだよ」
「意味が判らない」
「だから！　おふくろが拓海の分の晩飯まで作っちゃったんだよ。俺一人ぢゃ食いきれない。それにおふくろは今から出かけるんだ。一人で家に居たって退屈だろ。相手くらいしろよ」
「……帰る」
身勝手な裕斗の言動に付き合い切れなくなった拓海は踵を返して部屋を出たが、階段を降りようとしたところで、階下に認めた人影に身動きがとれなくなってしまう。その間に裕斗が追いついて背後からしがみ付くように抱きついてきた。濃紺のスーツを妙齢の女性には似つかない華奢な体に纏った階下の人は、二人に気付き柔らかく微笑んで会釈をする。固まってしまった拓海の腰に腕を回したまま裕斗が「いってらっしゃい」と声をかけると、その人はもう一度微笑んで慌しく出ていった。
「何固まってんの？」
無理矢理腕を引っ張って拓海を部屋に連れ戻しながら不審気に裕斗が問う。

「女の人は苦手なんだ。特にあのくらいの年齢の人が」
思わず素直に白状した後で、拓海は自分の態度は礼を欠いたものだったと実感して言い添えた。
「後であの人に謝っておいてくれないか。挨拶もちゃんとしてなかった」
「別にそんな細かい事で腹立てたりしねえよ、おふくろは」
裕斗は声をたてて笑って、拓海をベッドに座らせる。甘ったるい紅茶を口に運びながら少し落ち着きを取り戻した拓海は不意に一つの疑問が浮かんだ。
「はじめから俺を抱くつもりは無かったんだろう？」
「は？」
「普通、親が居る時にそういう事はしないだろ。しかも男同士で。からかってたんだな」
「お前、結構根に持つタイプだな」
「はぐらかすなよ。人を振り回して楽しいのか？」
ムキになって言い返す拓海に、裕斗は呆れたように問う。
「何時、俺が拓海を振り回したんだよ」
「いつも振り回してるぢゃないか、再会した時も、図書館でも、今日だって」
「再会？　は、笑わせんなよ。俺に何の興味もない癖に被害者面すんな。拓海が勝手に流されてるだけだろう？　勝手にふらふらしておいて、全部人のせいにしたいんだな。第一、今日誘って来たのは拓海の方だぜ。俺はお前の自棄に付き合ってやらなかっただけだ。それが何でお前を振り回してる事になるんだよ」
あっさりと裕斗に論破され、拓海は黙り込むしかなかった。窓から差し込む西日は特に怒っている風でもない裕斗の横顔を浮き立たせている。拓海にはそれがまた不可解だった。裕斗が急に冷めた表情になって辛辣な言葉を吐き出す事は何度かあった。だが、怒っているわけでもない平然とした様子で責められるのは拓海にとっては初めての事でいよいよ裕斗の真意が見えない。裕斗は暫く飲み干し

てしまったティーカップを指で弄んでいたが、不意に顔を上げ拓海を見つめてはっきりと言った。

「遊びは終りだ」

十二、漂泊の憂い

「何、」

訝しげに問い返した拓海に裕斗は呆れたように笑う。

「単に素直なのか兄貴に大事に扱われすぎてそういう風になったのかは知らないけど、拓海は無防備すぎるぜ。何で俺の言う事をいちいち馬鹿正直に受け止めるんだよ。別に俺はお前に自分の考えを押し付けようとしてるわけぢゃない。ただ俺の考えを言ってるだけだ。聞き流せばいい事なのにお前はそれを真に受けてわざわざ傷付いた顔をする。ほら、今だって、」

裕斗は拓海の頬に手を添えて唇を寄せてくる。唇は拓海の目蓋の触れて、わずかな熱だけを残して離れた。薄く閉じた左目の睫が濡れて、拓海は自分が泣くのを堪えていたことを知った。

「拓海みたいなタイプは、女と付き合った方がいい。お前みたいに人の言う事に惑わされて傷付く奴には男同士ってのは荷が重過ぎる。世の中には自分の意見が正しいと信じ込んで押し付けてくる人間はごまんと居る。そういう人間は否定と批判は得意分野だ。拓海じゃ到底太刀打ちできない。どうせ流されるんなら、障害の少ない真っ当な方へ行った方がいいだろ？　俺は拓海の精神の方まで世話してやるつもりはないからな。だから遊びは終りだ」

裕斗は拓海から離れて立ち上がる。悲しいのか悔しいのか分からないまま、拓海は感情的になって裕斗の腕を掴む。急に掴まれた腕を引かれて体勢を崩した裕斗は呆気なくベッドの上に倒れこんだ。拓海はその上に被さるように体を寄せて泣き出しそうな声を出す。

「何も……何も知らない癖に、兄さんと同じことを言うんだな。そうやって、突き放すなら、何で最初から、放っといてくれなかったんだ……」

終いは途切れがちだった。裕斗は困惑した表情で拓海を見上げる。拓海はそれに気付いて、裕斗の腕を押さえ付けていた力を緩めたが、

裕斗は特にそれを振り払う素振りは見せない。
「そういう事は兄貴に直接言えよ。突き放すも何も俺達の間には繋がりなんて何もないだろ？　俺は拓海がどうやって生きてきたかなんて知らないし、拓海だって俺の事は何も知らない。知る必要もない」
「それは、」
「拓海は気付いてないみたいだけど、俺と拓海は元々何の繋がりもないぜ。同じ保育園ってのも只の作り話さ。たまたま受験会場で好みの奴を見かけたから受験票盗み見て帰りに声かけただけ。少し考えれば分かるだろ？　住んでる所も離れてんのに同じ保育園のわけがない。そうでなくても卒業アルバムをチェックするなり同じ保育園の奴に聞くなりすれば分かる事だ。つまり、拓海はそれをするだけの興味すら俺に抱いてない。そのくせ当然のように縋ろうとする。俺はそんなのに付き合うほどお人好しぢゃないんでな」
　唐突に打ち明けられた事実に拓海が呆然としている隙に、裕斗は拓海の下をあっさりとすり抜けて体勢を直す。拓海は我に返って動揺を隠し切れないまま言葉を発した。
「嘘だなんて考えもしなかったんだ。子供の頃の記憶は曖昧だし、それに」
「言い訳なんてしなくてもいい。もうこの話は止そうぜ。それより腹減ったな、飯にしよう」
　裕斗は拓海の声を遮って立ち上がった。拓海はそれ以上何も言えなくなって、裕斗に言われるままに部屋を出る。拓海自身、何で弁解がましい言葉を口に出してしまったのか戸惑っていた。弁解の言葉もある意味真実ではあるが、自分が兄以外に興味がなかった自覚もあるし、兄との事を考えるあまり裕斗の存在をないがしろにしてきたとも思う。そう考えれば、拓海は自分に興味を抱いていないという裕斗の言葉もまた拓海にとっての真実であるはずだ。それなのにその真実を認めようとせず、言い訳がましいことを口にしてしまった。それが何故、何のためなのかは拓海自身にも判らない。ただ、

その理由も裕斗の考えでは、兄と別れた寂しさを紛らわすために裕斗に縋ろうとしているだけらしい。拓海は、浅ましくてもその通りかもしれないと感じる一方で、その理由がそれだけだと片付けてしまうには変な違和感も同時に感じていた。

広々としたダイニングのテーブルに用意されていた食事は、豪勢なものではないがそれぞれが手のかかるものばかりだ。伯父の家に招かれた時のような宴席じみた鍋や盛り合わせなどが並ぶ派手さはない。かといって拓海が一人で摂る簡単な即席のものでもない。鰆のあんかけや若竹煮、ほうれん草のひたしなど旬のものが程好い量で丁寧に盛り付けられている。来客があったからといって気を張った風でもない食膳は、普段から裕斗の母が食事にまで細やかな気遣い尽くしていることを充分に表していた。汚れ一つない清潔な洋卓も窓辺を彩る福寿草の黄の色も、此処に一つの理想的な家庭が在る事を示している。裕斗が自己を疑うことなく奔放に生きてゆけるのも、確固たる居場所を持っているからなのだろう。此処も結局、自分の居ていい場所ではない、拓海はそんな卑屈な考えすら抱きがちだった。

「小さい頃は体が弱かったから殆ど保育園には行ってない。それにその頃の写真もアルバムも母さんが家を出て行って処分したから、残ってないんだ」

食事を済ませ、裕斗の部屋に戻るなり拓海は口を開いた。裕斗は拓海の方へ振り返って何か言おうとする様子を見せたが、拓海はそれを遮って言った。

「最後なら、弁解くらいさせてくれ。聞き流してくれて構わないから」

裕斗は何も言わなかった。拓海はそれを了解の意と受け取って話し続ける。

「母さんは子供に興味のない人だったし、当然のように家に男を連れ込んでた。それでもどこかでありふれた家族の絆みたいなのを俺は母さんに持ってた。まだ子供だったから、母さんと男の人が何をしているのかなんて分からなかったし。……でも、結局母さんは俺を罵るだけ罵って家を出て行った。それからは散々だった。母さんと同じ年頃の女の人を見るだけで発作を起こすし、だから小学校にも行けなくなった。父さんは家に殆ど戻って来なくて、帰ってきても俺の事は避けてた。ずっと家に引き篭もっていたけど、それでも夢を見るんだ。母さんが男を連れ込んで、その後俺を殺してやるって半狂乱で暴れる夢。それを見たら発作を起こして病院へ運ばれる。そんな俺を見捨てずに支えてくれたのは兄さんだけだった。ずっと寂しかったんだ。特に、幸せな家族を当たり前みたいに見せ付けられると。だから兄さんに普通の兄弟以上の関係を求めてしまった。兄さんは答えてくれて、俺も学校に通えるくらいには回復した。女の人だって母さんと同じ年代じゃなければ普通に話せるようになった。でも、全てを克服するつもりは無かったんだと思う。俺が弱いままなら兄さんは俺から離れていかないと思ってたんだ。俺の弱さが兄さんをずっと苦しめてるなんて知らずに、愛されたがってばかりだった。……もっと前に、発作を起こした時にでも死んでおけば良かったんだ、俺なんて、」

頬に鋭い衝撃が走り、拓海は床に倒れた。手加減なしで拓海を打った裕斗は舌打ちしてそのままベッドへ腰を下ろす。

「それ以上、余計な事話すなよ。お前の独り言に苛々させられるのなんて迷惑だ」

拓海はのろのろと上体を起こしながら、痛みの残る頬を押さえた。打たれた痛みよりも妙な安堵感の方が強い。父も兄も母でさえも今まで自分に手を上げた事はなかった。打たれる事を承知で乱暴に詰った時でさえ兄は拓海を打たなかった。拓海は今になって裕斗のもとを訪ねた自分の心持を悟った。慰められたかったわけでも、肉体の欲望を満たしたかったわけでもない。拓海自身が持て余す身勝手

な自己や罪悪感をただ叱責して欲しかったのだ。同情や偽善的な優しさでは、もう手の施しようがない程に甘やかされ自分を憐れむ事に慣れきった情けない心をどうにかし鞭打たなければならなかったのだ。急に靄がかっていた意識が澄んでいくような気がして、拓海は思わず笑ってしまう。

「何笑ってんだよ。打ち所が悪くておかしくなったのか？」

裕斗は急に笑い出した拓海に吐き捨てるように言う。

「遠慮なしに打つんだな、と思っただけだよ」

「お前に遠慮してやる義理はないからな」

「俺も裕斗には遠慮しない事にした」

拓海が笑ってそう言うと、裕斗は一瞬驚いた顔をしてみせて、

「拓海が俺に遠慮した事なんてないだろ。そういう気遣いがあったら今此処に居ないはずだ」

と笑う。言われてみればその通りかもしれない、と拓海が今までの自分の態度を思い返していると、

「名前、」

と裕斗が不意に呟いた。

「え？」

「俺の名前呼んだの初めてだよな。どういう心境の変化？」

痛い所を突かれた、と拓海は一瞬黙り込んだが、どうせなら全て白状して詰られるだけ詰られたいような居直った気分になった。

「兄さんと同じ名前だから呼びにくかったんだ」

「へぇ。じゃあ尚更不思議だな。何で今になって呼べるようになったんだよ」

拓海の意に反して、裕斗は怒る素振りも見せずにさらに訊いてくる。

「……わからない、けど殴られて吹っ切れたのかもしれないな。兄さんは俺に手を上げる事はなかったから。同じ名前でも裕斗は兄さんとは全然違う。もう混同して流される事はない」

「……狡いな。やっぱり今まで精神と肉体の欲望を混同してたって

事か。そんな事ならもっと早く殴っとけば良かった」
　裕斗は急に不機嫌な声を出す。拓海は裕斗が機嫌を損ねるポイントが自分の発言のどこにあるのか探りあぐねて、結局裕斗が事あるごとに口にする精神と肉体の欲望について訊いてみることにした。
「裕斗はそう言うけど、本当に分けて考えられるものなのか？　俺はもう兄さんと裕斗を混同する事はないけど、それを分けて考えられるかは別問題だ」
「お前に俺の意見を押し付けるつもりはないって言っただろ、それは俺の考えだ。別に拓海が分からないならそれでいいさ。お前との遊びは終りにするって言っただろう、俺の考えにも付き合う必要はない」
　裕斗は不機嫌に拍車がかかって半ば突き放すような言い方をする。拓海は裕斗の真意が判らない事がもどかしかった。本気で怒っているらしい裕斗を宥めようと肩に触れた手をあっさりと振り払われて、拓海も感情的になる。
「精神的に満たされてるんだろう？　愛されて何不自由なく育ったから、肉体とか精神とかの欲望を分けて考えられるんだ。俺はそれが判らないから、どっちも一人に求めてしまう。兄さんにだって、両方を求めてしまった」
「何でも環境のせいにすんなよ。第一、兄貴には愛されてたんだろう。肉体の面倒を見てもらえなくなったとしても、家族の情くらいは残ってるわけだろ？　何の不満がある」
「ずっと兄さんしか居なかったんだ。俺は肉体と精神を分けて考えられないし、まだ両方とも兄さんに求めてしまう」
「それなら両方求めてればいいじゃないか。そうはっきり言ってやればいい」
「これ以上、追い詰めたくない」
「お前が本心でそう思うなら、分けて考えるしかないだろ。お前にとっての精神の欲望が家族愛だって言うならな」
　裕斗は小馬鹿にしたように笑ってみせる。

「幸せな家庭で育ったやつには分からないよ。愛されてて縋るものがちゃんとあるから、そうやって奔放に思い通りに生きられるんだ」
思わず口をついて出た恨み言じみた自分の言葉にたくみはひどく憂鬱な心持になる。
「分かりたくもないね。自分の境遇を不幸だと思ったところで何になる？　他人と比べて不幸だと思ってもそれをいちいち嘆いても仕方ない。人の一生にしろ境遇にしろ与えられてるもんは違うんだぜ。同じもんなんて与えられてるわけぢゃないし、大きかろうと小さかろうとそれぞれに不幸がある。生き物なんてその与えられた場所で生きていくしかないんだ。満たされてる人間だって居るし、満たされたくても満たされることのない人間だっている。平等なんてのは空想だ。拓海は周りが幸せそうに見えるから、自分も同じように幸せになるべきだって思ってるだけだろ？　他人をそれに当然のように巻き込むなよ」
饒舌に語った内容と裏腹に、裕斗は拓海の首に腕をまわしてしがみ付いてくる。拓海はそれを拒もうとして体勢を崩しベッドの上に倒れ込んだ。自分よりもひとまわり華奢な裕斗の体のどこにこんな力があるのか、拓海は驚きながらも自分の上から退く気配もない裕斗を何とか引き離そうと身じろぎする。裕斗は一層まわした腕に力を込めて頑なに離れようとしない。
「何もしない。だから抵抗すんな」
首筋に裕斗の声が触れる。拓海が観念して四肢を投げ出すと、裕斗も抱擁を緩めつつ拓海の首筋に顔を埋めたまま独り言のように呟く。
「大抵の人間は精神とか肉体とか分けて考えねえよ。それでいいんだ」
拓海はその言葉を聞きながら、この抱擁が裕斗にとってどちらを満たすためのものなのか、それとも両方なのか、どちらでもないのか、ぼんやりと考えた。その答えを出せないうちに裕斗の体温に絆された体にこれまでの疲れが一気に実感を帯びてきて拓海は半ば意

識を失うように眠りに堕ちた。

十三、紺青の溝

目が覚めた時には、裕斗の姿はなかった。代わりに机の上に走り書きのメモが置いてある。

「学校行ってくる。鍵はポスト」

人の事を無防備だと馬鹿にする割に、裕斗は初めて家に招いた人間に鍵の在り処を教え平気で置き去りにする。起こしてくれれば良かったのに、と拓海は独りごちて眠気の抜けきれないまま身支度をした。

高校生活は卒業式を控えただけだった。拓海の通う高校は進学校特有の考えからか、センター試験後の自己採点と最後の進路相談を終えてしまえば卒業式当日までは出席はしなくてもよい事になっている。生徒各自の判断で、予備校に通うなり補習を受けるなりして受験勉強の仕上げをする。生徒の自主性を慮る校風と言えば聞こえがいいが、実際は教師も生徒も試験の点数ばかり気にかけていて人間味の感じられない場所だ。特に受験に必要のない行事は疎かにされる傾向が強く、文化祭も体育祭もそういう行事が好きな一部の生徒以外はほぼ無関心で盛り上がりに欠けるものだ。そういう行事に無関心な立場の拓海も、いわゆる高校生らしい青春からは程遠い日々を過ごしてきた。孤立していたわけではない。クラス内はいくつかのグループに別れ、そのうちの一つに拓海も属してはいる。しかし昼食を共に摂るか、雑談する程度で親密な話をする事もなければ校外で遊んだ事もない。卒業すれば連絡を取り合うこともないだろう。それは人と距離を置いて接する事を好む拓海の性質によるものもあるだろうが、拓海の高校の生徒全員に通じる気質だと言っていい。むしろ拓海の性質自体、その高校で培われたものなのかもしれない。裕斗のように奔放に振舞う生徒は一人も居ない。

裕斗の通う高校は、地元でも大きな私立高校で通う生徒のタイプも様々だ。高校自体にはあまり良い印象はない。それも少人数クラ

スの特進、進学コースを除いた大多数を占める普通科の生徒の素行が良いとは言いがたいからだ。進学と普通科の壁は大きく、公立高校受験者は大抵滑り止めとしてその高校の進学科を受け、その中でも成績の優秀な者だけが特進科へ振り分けられるようになっている一方で、普通科は名前さえ書ければ受かるという噂が立つほどに敷居が低く、そのために悪い評判の立つような素行の生徒が目立つ。拓海が知っている裕斗の高校の情報はその程度の断片的なもので、実際の校風やカリキュラムなどは知る由もない。裕斗は特に学内の話をするわけでもないので、拓海は裕斗がどの科に属しているのかすら知らない。ただ裕斗が大学を受験している事を考えると特進か進学だろうと推測する他ない。

改めて裕斗の事を何も知らないのだ、と拓海は思い知らされた。裕斗が「お前は俺に興味を持ってない」と詰ってくるのも当然だった。

裕斗の家を出て、駅へと向かいながら拓海の気持ちは複雑だった。三回会っただけの素性も知らない裕斗に今まで誰にも打ち明けた事の無かった自分の内面を曝け出してしまった事、いくら兄に別れを告げられて投げやりな気持ちがあったとしても正気の沙汰ではない。二度目に会った時の言動も、今思い返せば常軌を逸しているが、それは強引な裕斗に惑わされたと言い訳出来る。だが、昨日の事は違う。裕斗に抱かれようとしたのも、過去の事や卑屈な心持を吐き出したのも全て自分からやった事だ。裕斗は初めから自分の内面に興味はないと断言していたし、実際に自分の愚痴っぽい話を聞かされるのを拒んでいた。つまり昨日の出来事は自分の意志だという事になる。拓海にはその「自分の意志」が明確に何を意味するのか分からなかった。……そして裕斗のあの抱擁の意味も。

その答えを出せぬまま拓海は週末を慌しく過ごす事になった。前期試験の結果は絶望的なものだろうとタカをくくった拓海は、願書

の取り寄せや担任への連絡など何かと忙しかった。兄の大学に行く事を目的としていた拓海は、後期の願書も兄の大学の分しか用意していなかったのだ。兄をこれ以上追い詰めないと覚悟を決めた以上、志望大学は変えざるをえない。それが自分にとっても最善の方法だろう、と拓海は思った。だからといって今更新たに受験勉強をする気も毛頭ない。センター試験の点数と希望する学部で都合の良さそうな所を適当に幾つか選んだ。受かればそれに越したことはないし、駄目ならそれはそれで仕方がない。先のことは運命に任せよう、拓海はそんな気楽な気持ちに不思議となっていた。

その二日の間に、拓海は度々裕斗に電話をかけようと考えた。それは純粋に自暴自棄になって迷惑をかけたことを詫びたいという気持ちからのものだ。ただ気恥ずかしさと裕斗の言った「遊びは終りだ」という言葉が引っ掛かって行動に移せずにいた。裕斗は自分との関わりを一切断つつもりでそう言ったのかもしれない。明確な拒絶なら裕斗は電話には出ないだろう。それが拓海を怯ませる原因の一つだった。裕斗の中では全て終わった事として処理されていて今さら電話を寄越されても迷惑かもしれない。裕斗がそれで良くても、泊めてもらって何の挨拶もなしに、しかも朝目覚めたら既に裕斗の姿はなかったという終わり方は、拓海には納得がいかない。裕斗に振り回される形で始まった関係でも、最後くらいは短い付き合いになるとしても納得のいく形にしたい。色んな感情が絡み合ったまま、拓海は携帯の発信履歴を眺めるだけだった。

卒業式当日、拓海は複雑な心境のまま高校に着いた。高校自体に思い入れはない。クラスメイトの大半も拓海と同じようで、普段通りに受験の結果や試験内容について雑談している。卒業という言葉の持つ感慨に浸る女子生徒の数名ばかりが目元を拭っているだけだった。儀礼的な祝辞、答辞を無感動に終えて式も卒業生の退場を残すばかりになった時、他の卒業生と共に起立した拓海は講堂を足早に出て行く男の背を見た。礼服を纏った白髪交じりの中年男性であ

る。装いからして誰かの父親だろう。生徒の視線を避けるような素振りだったが、逆に悪目立ちしていた。式に参加する卒業生の保護者に対して明確な決まりがあるわけではないが、卒業生が列をなして講堂を退場してゆくのを拍手で見送った後に席を立つのが暗黙の了解となっているからだ。拓海が講堂を出た時には、その中年男性の姿は何処にも無かった。拓海は微かに胸の底が熱くなっていくのを感じたが、その人を探そうとはしなかった。彼は父さんかもしれない、その淡い期待を一つの優しい思い出として胸に刻んでおく事を拓海は選んだのだ。

最後のＨＲを終えて、騒がしい教室を足早に抜け出した拓海は、そのまま裕斗に電話をかけていた。これまで怯んでいた事が馬鹿馬鹿しく思えるくらいに、呆気なく裕斗は電話にでた。

「何？」

受話器の先は騒がしい。裕斗の声に拒絶の色はないが、傍に人が居るらしく忙しげだ。

「あ、少し話があって電話したんだけど、」

忙しそうだから後でかけなおすよ、と拓海が続けようとする前に電話は一方的に切られた。

「じゃあ駅で待っててくれ。場所も時間もこの前と同じ。遅れんなよ」

と当然のように言い残して。

十四、紺青の溝

三日ぶりのK駅構内は相変わらず人が多かった。待ち合わせの時間より三十分も早く着いてしまった拓海は、人込みを逃れたい気分もあって街を散策することにした。裕斗の住む街は駅周辺こそ栄えてはいるが、駅前通りを抜けると長閑な住宅地に変わる。手入れの行き届いた街路樹と並ぶ家々の生垣の緑が気だるい春の午後の空気を彩っていた。木々の揺れる音に耳を傾けながら短い散歩を済ませて駅に戻ると、制服を着崩した裕斗が駅前の時計台に凭れるように立っていた。

「何でそっちから来るんだよ」

拓海が傍に寄るなり訝しげに問う。

「早く着いたから、少し歩いてたんだ」

裕斗は拓海の言葉には返事をせずに歩き出して、通り沿いの駐輪場の奥にポツリと置かれた古びたベンチへ腰を下ろした。

「座れよ。話って？」

裕斗の声も態度もいつも以上に素っ気ない。言われた通り拓海が隣に腰掛けると、寄りかかるように拓海の肩に頭を乗せてくる。裕斗の素っ気なさの原因は拓海に対して不機嫌になっているというよりも単に疲れ果てているという雰囲気だった。

「この前、泊めてもらったお礼も言ってなかったし、自棄に付き合わせて悪かったなと思って」

遠慮がちに拓海は口を開く。

「……別に自棄に付き合った覚えはないけど」

「でも急に押しかけたようなものだし、色々聞かせて迷惑かけた。それに感情的になって裕斗にも失礼な事言ってしまった。反省してる。裕斗は遊びは終りだって言ってたから、今さら連絡するのも迷惑かと思ったけど謝りたかったんだ」

「あぁ、そういえばそんな事も言ってたな」
裕斗は他人事のように呟く。拓海は裕斗の言う「そんな事」が自分の失言を指すのか裕斗の「遊びは終り」という言葉を指すのか判断しかねた。絶えず電車の通り抜ける騒音が響き、駐輪場にも学生が入れ替わり立ち替わり姿を見せるので、この場所は落ち着いて話をするには向かない。その上、当初の目的だった謝罪の言葉を言ってしまった後では、拓海は何をしていいのか途方に暮れるしかない。普段、強引に事を進める裕斗が口数も少なく怠そうに視線を空に向けたままなのも、拓海を戸惑わせていた。
「何だか、いつもと感じが違うな。体調でも悪いのか？」
拓海は遠慮がちに訊いた。
「疲れてるだけだ。今日は」
裕斗は何でもないような口調でそう答えたが、投げ出すように寄りかかっていた裕斗の体が一瞬強張ったのが拓海には分かった。言葉通りに受け取るには、裕斗の見せたその些細な変化は不可解だ。小さな疑心が一つ生まれると、それを取り巻く全てのものがその疑心を中心に色を変え始める。客観的に物事を判断しようとして理屈っぽくなる割に独りよがりのネガティブな思考に囚われてそのまま結論を急ぐ拓海の性質は、兄との別れを経験しても尚変わってはいなかった。拓海の訝しげな心持を孕んだ視線に気付いた裕斗は、拓海から体を離してベンチの肘掛へ凭れるように座り直す。距離が離れた事でおのずと拓海からは裕斗の表情も姿も確認しやすくなる。
「うちの高校ぢゃ、卒業式が終わった後に打ち上げがあるんだ。全校生徒あげてのレクリエーション、まぁでも子供騙しさ。俺はその委員で、準備や進行で一日中走りっぱなし。だから疲労困憊してるってわけ」
裕斗は拓海の気持ちを見透かしたように笑う。本来なら裕斗のその言葉で拓海も納得がいくはずだった。ただ裕斗の弁解を聞く前に、拓海はその疑心を増幅させるあるモノに気付いてしまった。その発見の後では、裕斗の言葉は余計に拓海の気持ちを逆撫でるだけだっ

た。
「……これも、レクリエーションの一環か？」
拓海は裕斗の首筋に触れて訊いた。裕斗は一瞬、きょとんと拓海を見上げたが直ぐに拓海の言わんとするところを理解して身を固くする。それは裕斗自身にも思い当たる事があるという事だ。裕斗の首筋に鮮明に残る小さな鬱血の痕が、単なる打ち身や痣の類でないことくらい拓海にだって判る。裕斗はもう弁解するつもりもないらしい。顔を背けて如何にも面倒くさそうに息を吐いてみせる。
「遊びは終りって、そういう意味だったんだな」
拓海は半ば独り言のように呟いた。――つまり、裕斗にとって自分は肉体の欲望を満たすためだけの存在で自分との関わり自体もまさにそれである、それだけを求める裕斗に内面の私情を持ち込んだのは自分自身で、それに付き合わされるつもりのない裕斗は遊びは終りだと言った、そう言って日も経たぬうちに裕斗は新しい遊び相手を既に見つけてしまったのだろう――考えたところでそれまでである。裕斗は初めから自分の精神的な欲望は興味も尊重もしないと断言していたのだから。
「棘のある言い回しだな。言いたい事があるなら、はっきり言え」
裕斗はあからさまに不機嫌な口調になった。拓海は感情的になって裕斗を詰ったり、痴話喧嘩まがいのことをしたりするつもりはなかった。重苦しい気分を圧し込めたまま、出来る限りで冷静な声を出す。
「喧嘩したいわけぢゃないんだ、どうせ口では裕斗には敵わないし。ただ、俺は裕斗の言う遊びの意味がよく分かってなかったんだ。でもやっと分かった。体の関係の事だったんだろ？　俺は肉体だとか精神だとかを混同してしまうから遊び相手には向かないだろうし、それで裕斗はもう新しい相手を見つけた。言い方が気に障ったのなら謝るよ。変に誤魔化されるよりは、はっきり言って欲しかっただけだ」
「拓海がそう思ってるなら、別に構わない。解釈なんて自分の主観

でしか出来ないからな」
　裕斗は否定も肯定もせず、まるで他人事のように言う。はっきり言ってくれればそれで済む話なのに、と拓海はもどかしい気持ちになる。このまま終わってしまえば、最初から最後まで裕斗の真意がわからないままだ。だからと言って微かな苛立ちと憂鬱に押されて口論になるのは避けたい。前回、感情的になって身勝手な言動をとった事を謝るために疲れているらしい裕斗を呼び出しておいて、そこで口論になってしまえば本末転倒だ。第一、裕斗が他に遊び相手を作ろうと素っ気無く振舞おうと、それは裕斗の勝手でそのことを拓海が責める筋合いはない。そう思えば思う程、不思議と苛立ちは募る。整理のつかない拓海の心を知ってか知らずか裕斗は挑発するような言い方をしてみせる。
「遠慮しないんぢゃなかったのか？　お前って怒ってる時あからさまに顔に出す癖に黙り込むよな。だから簡単に付け込まれるんだよ」
「付け込まれるって、」
「表情なんて気付かなかったで済む話だからな。嫌だと言えば良いのに言わないから拓海は結局俺に流されてきただろ？　それとも電車でも図書館でもあぁいう事されんのがお前の望みだったわけ？」
　挑発に乗ったところで結果は目に見えている。むしろ裕斗が挑発的な言葉を使うのは、自分を戸惑わせて彼の真意を悟らせまいとしているように拓海には思えた。裕斗がそのつもりならどうしようもない。拓海は諦めて立ち上がった。
「……帰るよ。今日は謝りたかっただけだから」
　陽は傾いて春日の曇りを物憂げに染め始めている。埃っぽい空気も次第に肌寒さを感じるものになってきた。陽が落ちれば更に冷え込むだろう。疲れている裕斗を此処でいつまでも付き合わせるのも気が引ける。それが情事の後だというのなら尚更だ。裕斗は怠そうに立ち上がると、そのまま拓海の手を掴んだ。その指先は冷え切っていて、拓海はその冷たさに驚いて裕斗を見つめた。
「謝るのは態度ぢゃなくて言葉なんだな」

いつもの試すような口振りだ。
「態度で示した方がいいのか？」
「あぁ。都合のいい事だけ言葉にして、言い難い事は態度で示すってのは卑怯だぜ」
裕斗はそう言って歩き出す。拓海も一歩遅れて裕斗の後を追った。
「どうすればいい？」
「そうだな、考えとく」
「分かった、」
駐輪場を抜けて駅前に着くと裕斗は振り返って言った。
「俺は別に新しい相手なんか見つけてないぜ」
「え、」
「これを付けた奴とはお前と会う前からそういう関係があるって事」
裕斗は冷淡に笑って自分の首筋を手で押さえてみせた。拓海はその笑みの意味も分からないまま呆然と立ち尽くして、去っていく裕斗の後ろ姿を見つめた。

十五、屈辱の後先（前編）

「何の罰ゲームだよ」

裕斗に呼び出されてディスカウントショップへと連れて来られた拓海はうんざりした顔で裕斗を睨んだ。駅で別れて三日後、つまり昨日の夜に裕斗から電話を受けた時は、裕斗の要望を聞いて拓海は安堵していたのだ。言葉ではなく態度で償えと言った裕斗の要望は、拍子抜けする程簡単なものに思えた。それは、その日裕斗の受験した国立大の合格発表があったらしく、それに受かったから合格祝いを買えというものだった。自分に買える範囲のものなら、と快諾した拓海は今の状況を目の当たりにするまで本当に気楽な心持でいた。

「罰ゲームに見えるから良いんぢゃないか。国道沿いの専門の店に行ったっていいんだぜ」

裕斗は悪びれる様子もなく笑って、子供のようにはしゃいでいる。平然と手にとって品定めしているそれは所謂アダルトグッズで平日の昼間からその類のコーナーに居る自分たちに、一般の買い物客や店員が訝しげな視線を無遠慮に投げかけてくる。ただでさえ人の目を惹く容姿をしている上に小柄で少年地味た裕斗は特に、そのコーナーには不釣合いで余計に周囲の関心を惹き付けている、拓海は居た堪れず早く帰りたかった。

「早くしろよ」

「この兎のヤツ可愛いよな、でも女の構造に合わせて作ってあるし」

憔悴している拓海を余所に裕斗は呑気なものである。

「何でもいいから早く決めてくれ」

「莫迦、俺のもんになるんだから何でもよくねーよ。うわ、これ相当エグいな、こんなの挿入（はい）る奴居んのかよ。拓海いける？　これ」

「何で俺に聞くんだよ、いいからさっさとしろ！」

「お前、相当変わってんな」
会計を済ませて逃げるように店を出て駅前のショッパーズモールまで来た時、拓海は心底疲れ切っていた。階段の踊り場にあるベンチに頭を抱えて座る拓海の横で、裕斗はそう言って堪えきれないという風に吹き出した。とにかく無我夢中で此処まで逃れてきたのはいいが、一旦体を落ち着けて冷静さを取り戻すと余計に消え入りたい程の恥かしさに襲われる。それに追い討ちをかけるように裕斗は隣で笑いながらからかってくる。
「拓海も欲しかったのかよ、これ」
袋から黒い包装紙で包まれた商品を一つ取り出して、裕斗は包装紙を破ろうとする。
「こんなとこで開けんなよ！　欲しいわけないだろ」
拓海は乱暴にそれを引っ手繰って袋の中に戻した。真っ赤になった拓海の顔を見て裕斗は肩を震わせて必死に吹き出すのを堪えている。
「じゃあ何で同じの三つも買うんだよ、俺に三つも使えっていう、わけ」
言葉の途中で裕斗は吹き出して、遠慮なく笑い転げる。
「〜〜だって、一つだと一緒に使うみたいだし、二つだったら如何にも俺とお前の分って感じだしッ」
「それで三つ？　三つだったらどう思われるわけ？」
「それは……」
「……っ……ほんとにあの時の拓海の顔、最高だったぜ、マジで笑い堪えんの大変だったんだからな……しかも同じ種類のバイブ三本って、意味わかんねえよ、流石進学校の秀才くんは考える事が違うな。凡人の俺には理解出来ねえ」
笑い過ぎて裕斗の言葉は途切れがちになる。
「言うなよっ！　こっちは死にたいくらい恥かしかったんだから」
拓海は真っ赤になって怒鳴った。ディスカウントショップのアダ

ルトグッズコーナーの前で気の遠くなる程裕斗の買い物に付き合わされた拓海は、羞恥心と焦りで動揺しきっていた。やっと裕斗が目当ての品を決めて、それを手渡された時、唐突に頭に浮かんだ一つだったら～の考えに動かされて勢いで三つ商品を掴んでそのままレジに直行してしまったのだ。商品は気を利かせて黒い包装紙で中身は分からないようにされていたが、それは他の客には分からなくても店員は別だ。拓海は支払いの時も気が気ではなかった。逃げ出したい一心で、釣銭を貰い忘れ呼び止められ、尚且つそれを受け取り損ねて小銭をフロアにばら撒くという醜態を演じてしまったのだ。拓海は自分の醜態を思い出してまた頭を抱えた。

「いや、でも、良かったぢゃないか。レジの店員は罰ゲームだと思ってたよ、はじめはポカンとしてたけどさ、お前があんまり緊張してるからさ、プレゼント用の包装しますか？　って聞いてたぢゃないか」

「それを裕斗が断ったんだろ！　俺が貰う物なんでいいです、とか言って！　絶対誤解された、もう絶対あの店には行けない」

「本当の事言っただけだろ、まさか三つも貰えるとは思わなかったけど」

裕斗は相変わらず笑っている。何故裕斗はこんなに平然としてるんだ、と拓海は恨めしい気持ちになるが、実際に今拓海を襲っている羞恥心は白昼堂々バイブを買わされた事ではない。むしろそれを買う事くらいで必要以上に動揺してしまった自分自身に対しての方が大きかった。

「大体、そんなもの何に使うんだよ」

このまま裕斗にからかわれ続けるのはたまらない。少しでも話題を逸らそうとして拓海は疲れた顔で訊いた。

「何って、そりゃあナニに決まってんだろ。拓海も興味ある？」

裕斗は悪戯っぽい笑みを浮かべて含みのある言い方をしてみせる。

「冗談じゃない。俺の謝罪はそれを買って終りだ、それ以上は付き合わないぞ」

「話を飛躍させんなよ。そこまでは言ってないだろ、何？　そういうの期待してた？」
裕斗は見透かしたように笑って、拓海の内股を撫でてくる。そのまま唇を被せられそうになって拓海はたじろいで赤面した。
「止せよ、莫迦、こんな場所で」
「何だよ、ケチ。誰も居ないんだからいいだろ」
裕斗は拓海に肩を押し返されて不満気に口をとがらせる。まだ春休みに入っていない平日の午後、確かに若者向けのショッパーズモールは人も疎らだ。特に今二人の居る場所には他の人の姿はない。エレベーターもエスカレーターもあるフロアで態々階段を使うような客がいるわけもなく、だからこそ拓海は逃げ場にこの場所を選んだわけだが、そうは言っても絶対に人と会わないという保障はない。二人の居る中二階の踊り場にはベンチ以外何も置かれていないが、三階の踊り場は喫煙所になっているからだ。此処に用はなくとも、その喫煙所に用のある人間が通りかかる可能性は高い。
「今は居なくても、誰か来るかもしれないだろ。こんな場所でしようなんてどうかしてる」
拓海が溜め息を吐いて言った途端、裕斗は素早く拓海の腕を引き寄せて唇を重ねてきた。唐突な短いキスに唖然としたままの拓海に、したり顔をして裕斗は唇を舐める。
「どうかしてんのは拓海だろ、さっきからそっちに話を飛躍させすぎだぜ。欲求不満なのか？」
裕斗にそう言われて拓海ははっとしてまた赤くなった。これでは自分がまるで裕斗にそういう期待を抱いているみたいだ。裕斗にしてみればいつもの戯れで、今の事だって単にふざけてキスをして自分を困らせようとしただけに過ぎない。それを勝手に裕斗がその先の行為までしてくるんじゃないかと思ってしまっていた自分の思考が拓海は恥かしかった。そんな心持を悟られまいと拓海は裕斗を睨みつけて問う。
「遊びは終りって言った癖に、何でこういう事するんだよ」

「遠まわしに誘ってんのかと思ったからだよ」
悪びれる風もなく裕斗は平然と言ってのける。
「誘ってなんか……警戒してるだけだ！　裕斗は場所とか関係なくそういう事してくるから。初めて会った日も、図書館で会った時だって……」
「まぁ、電車の時はともかく閉架ではあそこまでする予定は無かったな。くすぐってる間に拓海の方が怒って帰るだろうと思ってたけど。拓海が何がしたいんだよって聞いてきたからさ、」
「だったら何だよ？」
「続きをしろって急かされてると思うだろ？　普通」
自己弁護のつもりが墓穴を掘った気分になって拓海は赤面したまま言葉を詰まらせた。それだけでなく閉架でのことまで鮮明に思い出してしまって妙にきまりが悪い。それに裕斗は平気で都合の悪い事ははぐらかしてしまう。拓海がずっと内心引っ掛かっていた「遊びは終り」という言葉の真意も裕斗は説明する気はないらしい。それも裕斗は話を逸らす際に単に誤魔化すのではなく、あえて拓海を混乱させるような事を言って巧妙に本題をずらしてしまうから始末が悪い。裕斗の遣り口を知っている以上、拓海は裕斗の真意を探るには何かしらの痛手を負う事を覚悟しなければならない。そうでなくても裕斗にも不安定な所があり、笑っていたかと思えば急に別人のように冷めた眼をして辛辣な言葉を吐いてくる。裕斗の真意を知るにはそれらを全て乗り越えるだけの強さが必要だ。拓海は未だ自分にそれが備わっているとは到底思えなかった。
「何でそうやってはぐらかすんだよ」
「はぐらかすって？」
「……遊びは終りってどういう意味？」
「拓海こそ何でその言葉に拘るんだよ、俺とまだ遊びたいわけ？」
「それを言ったら、裕斗は俺の質問に答えてくれるのか？」
「それは拓海の答え次第だな」
結局予想通りに有耶無耶にされて、拓海は溜め息を吐いた。裕斗

は隣で余裕のある笑みを浮かべたままだ。拓海自身、何故自分がここまで裕斗の真意に執着するのか分からない。ただ自分の内面ばかりを曝け出してしまった事が歯痒いのかもしれない。だからこそ余計に距離が掴めなくなる。裕斗が終わらせたいものが一体何を指すのか――単に自分との関わりを断つというのなら、電話に出た事も今こうして会っている事も変な話で、だからといって遊びが欲望を満たすための体の関係だと限定してみても裕斗が戯れでキスをしてくるのは矛盾している――それに裕斗の態度は会ったばかりの時と全く変わらない。強引で奔放、試すような口振りも、拓海を困らせて悪戯っぽい笑みを浮かべるところも。だからこそ拓海は錯覚してしまうのだ。これまでと変わらずに裕斗が不意に自分の体を求めてくるのではないか、と。

十六、屈辱の後先（前編）

「……裕斗の中で、もう遊びは終わってるのか？」
「ああ」
どうせはぐらかされるだろうとタカをくくって訊いた拓海は、裕斗にあっさりと肯定の言葉を返されてたじろいだ。しかしそれは拓海を核心に迫らせるというよりも混乱させるばかりだ。
「でも、俺に対する裕斗の態度が変わったようには見えないけど」
拓海は納得のいかない気持ちでそう言った。裕斗の不自然なまでに自然な態度が拓海の中で何か引っ掛かって躊躇わせているのだ。
「それは俺の中での問題だからな。別に拓海の前で一々態度変えたりはしねえよ。遊びって言っても目的くらいある。強いて言えば、拓海は俺の期待に答えてくれそうもないから遊びは終りにした。気は済んだか？」
裕斗は事も無げに言い放って、挑発的に拓海を見上げた。瞳には面倒な話題を終わらせたいという裕斗の意図が透けて見えて、拓海は黙り込むしかなかった。
「拓海がこだわる事ぢゃないだろ？　大体、遊びって言葉自体お互いが了承して始めたもんぢゃない。俺が勝手に始めたものだ。終わらせるのだって俺の勝手だ」
何も言えずにいる拓海に追い討ちをかけるように裕斗は言葉を重ねる。予想していた以上に突き放す言い方をされて拓海は呆然とした。
裕斗の家に泊まった日から拓海はある種の負い目のようなものを裕斗に対して感じていた。それは謝罪の目的とは別のところで、である。謝罪そのものは、兄と別れた苦痛を紛らわせるために裕斗を利用しようとした浅はかな自分を宥めるためのものでしかない。だからそれを理由に裕斗に詰られる事も突き放される事も受け入れるべきだと拓海は考えている。でも、拓海が裕斗に言われた「遊びは

終り」という言葉に固執しているのはそれだけが理由ではない。K駅で別れてから、裕斗から電話が来るまでの三日間、拓海なりに真剣に考えて一応の結論は出していたのだ。

自分は目の前の少年に惹かれている、と。

だからこそ告げておきたい事があった。それを言うために逃げ帰りたい恥を忍んで、拓海は裕斗に謝罪の品を買った後も、あえて別れずにこの場所に来たはずだったのだ。だが現実は想像していたよりも上手くゆかず、拓海は考えていた言葉を告げる程の余裕もない状況にいる。自分が裕斗に興味を持ったと同時に、裕斗は自分への興味を失ってしまっている、お互いの心情が噛み合う事なく離れていってしまった事実を裕斗の言葉で知らされた拓海は、それがどうしようもなく歯痒かった。

「……それに付き合わされた方の気持ちはどうなるんだよ？」

「だから拓海への態度は変えてないだろう、何が不満なんだよ？」

裕斗が拓海の心持を知るはずもない。拓海の中で感情的な衝動が増す程に裕斗の声は落ち着いてきて、拓海を宥めるようなものへとなっていく。だが裕斗は、それが逆に拓海の感情を逆撫でてしまっているという自覚はないらしい。

「……そこまで見くびられてるとは思わなかった」

「どういう意味？」

「見くびってるぢゃないか！　裕斗のいう期待は、俺が割り切って考えてお前の体の欲望を満たしてやれるかって事だろ？　勝手にそんな期待を持たれて失望されるのなんて人を馬鹿にしてる。……終りだって言われた時、俺は兄さんの事で自暴自棄になって裕斗を利用しようとしたから、裕斗はそれに嫌気が差したんだと思った。俺は欲望を分けて考えられないから。だから俺の精神の欲望に付き合わされるのが嫌なら仕方がないと思ってた。裕斗は自分の考えに人を巻き込むなって言ったよな？　でもお前だって結局、身勝手な遊びに俺を巻き込んでるぢゃないか」

堪えきれなくなって拓海が感情の勢いに任せて口走った言葉は酷

く支離滅裂なものだった。責めるような口調で拓海が詰っても、裕斗は動じる様子もみせない。ただ眼を伏せて

「悪かったよ」

と呟く。その謝罪の言葉で、拓海は行き場のない苛立ちを言葉にする道を断たれてしまう。かといって胸の内に流れ出す怒りとも悔しさともとれない遣る瀬無さは止まる事はない。だから罵るより先に、手が出てしまったのだ。乾いた音と右手に残る痺れるような痛み、それを感じて初めて拓海は勢いに任せて裕斗を打ってしまった事に気付いた。裕斗は打たれた事に驚きもせず、痛がる素振りもみせなかった。ただ無表情のまま見つめられて、拓海は罪悪感に似た後味の悪さを感じるばかりだ。裕斗は顔には出さないが、自分は酷く力を込めて打ったはずだ。裕斗の口の端には薄く血が滲んでいる。その自分が負わせた傷を目の当たりにすると、それまで自分を支配していたはずの苛立ちも嘘のように消えてしまって、拓海は頭の中が冷えていくような気分になった。

「大丈夫か？」

「よく云うぜ、手加減無しで打っといて」

不安になって拓海が打った頬へと手を当てると、裕斗は怒るわけでもなくぶっきらぼうに笑う。叩かれたはずみで八重歯で唇を切ったらしい。上唇の端から滲む鮮血が小さな八重歯を赤く染めている。かすかに熱を持った左頬と唇の傷を確認した拓海は、裕斗の体が自分の想像以上に脆い事に改めて気付かされた。普段の裕斗の強気な態度ばかりを見せ付けられている拓海にとって、裕斗の華奢なつくりの肉体の本質は見過ごされがちなものである。裕斗自身が打たれて平気な風を装ったとしても、裕斗の身体それ自体は見た目通りに傷を負いやすく強靭なものとはかけ離れたものなのだ。そう思うと尚更手をあげた拓海は後味が悪かった。

「冷やした方がいい、腫れるかもしれないから」

拓海がハンカチを濡らしにいこうと立ち上がると、裕斗はその腕を掴んで隣へと強引に引き戻す。

「たいした傷ぢゃない。舐めてくれれば治る」
出し抜けにそう言われて拓海は思わず赤くなってしまう。裕斗はいつもの拓海をからかう口調に戻っていて、先程までの遣り取りの緊迫感も沈んだ空気も全て打ち消してしまっている。ただ未だに罪悪感を引き摺ったままの拓海はそれに直ぐ対応し切れずに戸惑った。
「冗談だ、そんな顔すんなよ」
裕斗は自分で口端を舐めて八重歯を見せて笑う。自分がどんな顔をしていたのかを考えて拓海は妙に気恥ずかしくなった。
「でもお前って本当にネガティブだよな」
急に裕斗は面白そうに笑い出す。困惑した表情の拓海を一瞥して裕斗は続ける。
「遊びは終りって言った後に、今まで通りこうやって会ってるんだぜ？　もう一つくらい解釈の仕方があってもいいだろ？」
「何、」
「例えば、俺が本気で拓海を口説く気になったとか、」
「なッ……思えるわけないだろ！　あの状況で終りって言われたら」
「それもそうだな」
「それに、本気で口説こうと思ってる相手に普通こういうモノ買わせないだろ」
「口説いて落とせるとは思ってなかったからな。これは拓海の代わりに使うんだよ。丁度お前のあれってこれくらいの大きさくらいだったし」
「何だよ、それ」
「どうせ大学入ったらお前とは離れる事になるんだし。新しい相手が見つかるまでコイツで我慢するさ。そういえば拓海は合格発表済んだのかよ？　まぁ、どうせ受かってるんだろうけど。あ、じゃあやっぱり一つ分けてやるよ。俺からのささやかな合格祝いだ。拓海も兄貴の代わりに使えばいい」
裕斗は真顔でそう言って、黒い包装紙に包まれたそれを強引に拓海に押し付けてくる。もう会話は普段通り裕斗のペースになってい

た。拓海は心の中で少し安堵しつつ、自分の心情を裕斗に伝えるのは今しかないと思った。裕斗に無理矢理渡された玩具を押し戻しながら、覚悟を決めて自分でも驚くくらいに静かな声で言う。
「合格発表は十日だけど、多分駄目だったと思う。それにもし受かってたとしても行かない。別の大学を受け直すことにしたから」
「何で？　兄貴に振られたからか？」
「それもあるけど、兄さんには彼女っぽい人が居るみたいだし、……やっぱり俺も兄さんに頼らずに生きていけるか試さないといけないと思って」
「そっか、それなら尚更これが必要になるぢゃないか。遠慮すんなよ、一つ分けてやるから」
「……人が真面目に話してんのにからかうなよ」
「俺なりの思いやりだよ」
「別のものがいい」
「意外と強欲だな。何が欲しいわけ？」
やっと本題に入れる、と拓海は息を吐いてはっきりと告げた。
「約束だ」
「約束、」
「もう一度、付き合って欲しい」
裕斗は唐突な拓海の言葉に一瞬驚いた顔をして、それから眉をひそめて首を傾げた。結論を言い急ぐあまり言葉が足りなかったと拓海は気付いて慌てて弁解をする。
「付き合うっていっても、恋人とかそういうのぢゃなくて、普通の付き合いでいいんだけど、」
「ああ、そういう意味か。なんか色々混乱した。で、もう一度っていうのは？」
「多分、今の儘だと前みたいに身近な温もりに縋りたくなって、また裕斗を利用しようとするかもしれない。裕斗がそれに応じないのは分かってるけど。だからと言って甘えるわけにはいかないし。裕斗に言われて気付いたんだ。俺自身、卑屈な所があって過去の事を

引き摺ってばかりだから、幸せな環境に恵まれてる人間を見ると、どうしても住む世界が違う気がして距離を置いてしまう。でも流されてしまうのは臆病な癖にどこかで愛されたがっているんだと思う。だけど裕斗の云う通り、結局は自分の人生も過去も変えようのない事だし、誰かに縋るんじゃなくて自分で責任を持って生きてかなきゃいけない。まだ充分とはいえないから、もう少し自分に余裕が持てるまで強くなれたら、もう一度裕斗と最初からやり直したい」

拓海がそう告げると一瞬裕斗は何か言いたげな顔をして、直ぐに眼を伏せて暫く黙り込んだ。拓海はそれ以上重ねる言葉もなく、ただ裕斗の返事を待つほかない。伏せた瞳の奥で裕斗が何を考えているのか拓海が探りあてるよりも先に、裕斗は小さく笑って顔をあげた。

「つまり、拓海は俺に興味を持ったって事だな？」

声も表情もいつもの揶揄いの色を含んでいる。今度は拓海が眼を伏せる番だった。肯定するより他はないのだが、揶揄うように裕斗に云われると妙に照れくさくなる。はにかんだ拓海を笑って、裕斗はまた試すように言った。

「いいぜ、約束してやる。でも俺は気が短いからな。あんまり待たされるとお前の事忘れちまうかもしれないぜ」

拓海は裕斗の言葉に顔をあげた。裕斗が笑みを濃くしたのは自分が不安気な顔をしていたからだろうか。拓海はそのまま首に腕を回されて引き寄せられた。裕斗は顔を近づけて至近距離で囁く。

「キスしろよ。お前から」

驚いて目を見開いた拓海に、裕斗はさらに注文を加える。

「俺が忘れられなくなるくらいのを」

拓海は言われるままに唇を重ねていた。元から受身にまわる性質の拓海に積極的なやり方が分かるわけもなく、緊張感ばかりが増して鼓動が煩くなる。おずおずと舌を唇に当てると微かに血の味が舌先へと触れる。裕斗はやんわりと唇を開いて拓海の舌を受け入れた。濡れた音を立てて、緩く舌先を吸われる。深い割に激しさのない穏

やかなキスも、結局主導権は裕斗の方へといつしか移ってしまっていた。拓海は差し出した舌を裕斗の口内で弄ばれながら、こっちが忘れられなくなりそうだ、と緩やかな快感に浸りながらぼんやりと考えていた。

十七、屈辱の後先（後編）

階上から男の話声と足音が聞こえ、拓海は急に現実に引き戻されたような気分になって裕斗から離れた。裕斗はすぐ上の階に人が居た事など気にとめる様子もなく、平然と濡れた唇を手で拭っている。拓海はいくら人気が無かったからとはいえ、公共の場で自分から裕斗に口付けた事が恥かしくなって裕斗の顔を見る事も出来ず俯いてしまった。男達の笑い声と階段を下りてきているらしい足音は次第に近づいてくる。上の喫煙所に居たのだろう。喫煙所に人が居た事に気付かなかったという事は自分達の会話も向こうには届いていないはずだ、そう思って拓海は少し安堵した。男達が階段を下りていく少しの間をやり過ごせばいい、拓海は少しの照れと気まずさで俯いたまま考えていた。だからこそその男達が裕斗の知り合いだという事は全くの予想外だった。

話し声と足音がいよいよ鮮明になった時、それまで平然としていた裕斗が急に身を固くした。拓海がそれに気付いて裕斗を見ると、裕斗は酷く困惑した顔で階段上に姿を現した人物を見詰めている。

裕斗の視線の先には、同じ年頃のいかにも柄の悪そうな四人組みの男達が、そういう人間特有の投げやりな足運びで階段を下りてきていた。拓海には全く見覚えのない顔ぶれだ。裕斗は知り合いなのだろうが、裕斗の強張った表情を見る限りその男達と歓迎するべき関係を持っているとは言い難い。

「あれ？　裕斗じゃねえか」

拓海が裕斗に何か聞こうとするよりも先に、裕斗に気付いた四人組の一人が声をあげた。その男が軽快に階段を駆け下りて裕斗の前に立つと、裕斗は反射的に肩を揺らして怯んだ様子を見せる。

「思ったより元気そうだな」

彼は隣に座っている拓海を一瞥して、含みのある言い方をする。運動に長けた者特有のしなやかな身体のラインが褐色の肌に馴染ん

でいる。身長は拓海とさほど変わらないが、体格には数段の差があった。肩幅や薄手のシャツの上からでも判る程好く発達した筋肉の在り様は、拓海や裕斗の身体とは異質の力強さを持っている。短く刈られた黒髪も端整な顔立ちと身体に似合っていた。しかし拓海には眼の前に現れた人物が単なる健全なスポーツ少年としては映らなかった。それは単純に残りの連れ三人が不良っぽい容姿をしているからだけではない。話し方や自分達を見下す視線が、今までに何度となく拓海が向けられた事のある不良に属する人間が優等生を小莫迦にするような侮蔑を含んだそれと同一のものを持っているからである。圧倒的に力関係が上だと知る者の持つ余裕に満ちた表情は、畏れるものが何一つないと思い込んでいるだけに健全とは言い難い鋭さと危うい雰囲気を纏っている。

拓海は小声で「誰？」と裕斗に訊いてみたが、裕斗は眼の前の男を見上げたままで黙りこんでしまっていた。

「やけに小奇麗なの連れてんじゃん、新しいおホモダチかよ」

「卒業して秋津とヤれなくなんのが寂しいんじゃねえの」

「慣れたもんだよな、初めは一週間くらい休んでなかったっけ？」

遅れて階段を下りてきた三人は、裕斗を見るなり下卑た笑みと言葉を投げかける。裕斗は秋津と呼ばれた男から目を逸らして、その三人を睨みつけ冷めた声で言った。

「関係ない。こいつはヘテロだ」

拓海は不審気に裕斗を見た。裕斗は硬い表情のまま拓海を一瞥してすぐに視線を逸らす。一瞬自分に向けられた瞳には、（話を合わせろ）と有無を言わせずに拓海を従わせようとする裕斗の意思が感じられた。

「懲りないな、まだヘテロに手を出してんのか？」

秋津という男は蔑むように笑って、裕斗の髪を乱暴に掴んで顔を上向けさせる。裕斗は微かに怯んだ様子を見せたきり抵抗しようとはしない。何時になく弱気な裕斗の姿勢に戸惑いつつも、拓海は裕

斗を助けようと秋津の手を掴もうとして別の男に逆に肩を掴まれた。
「うわ、細えコイツ」
岩のようにゴツゴツとした指で拓海の肩を掴んだ男は驚いた声を出して揶揄う。
「秋津とは違うタイプだな、一応懲りたんじゃね？」
浅黒いニキビ肌に黄ばんだ歯を見せて、別の男が秋津へと笑いかける。秋津は裕斗の髪を掴んだまま
「へぇ、次は大人しそうな男にしようってわけだ」
と冷ややかに笑う。裕斗は目を伏せたまま何も言わなかった。
現状を把握しきれない儘、対応を決めかねていた拓海は次第に冷静になってきた。目の前の男達が裕斗の知り合いだとしても、明らかに良い関係とは言い難い。それに揶揄されている裕斗があえて黙っているのは相手に何か弱みでも握られているのだとしても、初対面の自分まで侮辱されてそれに堪えてやる義理はない。冷静になったと同時に理不尽な状況に苛立ちを感じて、拓海は肩を掴んでいる手を勢いで振り払った。振り払われた男は不愉快そうに拓海を睨みつけてくる。喧嘩などしたこともないし、体格でも人数でも明らかにこちらの分が悪いのは拓海も承知していた。ただ気持ちの上で、この状況に屈服したくなかっただけだ。どうせなら一発くらい殴ってやりたい、そう思って拓海も相手を睨み返した。

「止せよ、拓海」
一触即発という状況で、裕斗は酷く冷たい声を出した。
「お前まだ受験終わってないんだろ？　暴力沙汰なんて起こすもんじゃないぜ」
裕斗は淡々と言葉を続ける。納得のいかない気持ちで拓海が裕斗を見ると、裕斗は自嘲的な笑みを浮かべて
「それにムカついてんのなら、また俺を殴ればいいだろ」
と言う。その言葉の意味がわからずに困惑した拓海を無視して裕斗は拓海と睨み合っていた方の男に宥めるように話しかける。

「悪いな、そいつ気が立ってんだよ。さっき俺に手ェ出されそうになったから」
「ヘッ、それでホモ扱いされてキレてるってわけだ」
裕斗の言葉を受けて興味が移ったらしく、その男は睨むのを止めてにやにやと下拙な笑みを浮かべる。
拓海はすぐに口先だけの言葉に惑わされるその男がひどく滑稽に見えて、少し安心した。喧嘩にならなかったからではない、裕斗がいとも簡単にその男の怒りを打ち消したからだ。裕斗はこういう類の人間の扱いにに慣れているのだろう、拓海はそう思ったのだ。何も馬鹿正直に相手をして事を荒立てる必要も無い、裕斗があえて拓海の事をヘテロだということにしたがるのも、この男達との会話を早く終わらせるためにはその方が都合が良いのかもしれない。拓海は先に見せた裕斗の弱気な態度も、この状況を切り抜けるための演技なのだろうと独り合点して、自分が余計な口を挟むよりも裕斗に任せた方がいいと思い込んでしまっていた。

……浅慮だった、と気付かされたのは、そのすぐ後だ。自分でも愚かしく思える事に、不良達が裕斗を揶揄する際、何度も口に出した「秋津」と呼ばれる男と裕斗の関係の事を拓海は考えていなかったのだ。秋津も残りの三人と同等のものだと片付けてしまっていた。それが痛恨のミスとなって思いもよらない痛手を負わされる羽目になった。
「殴られたのか？　……あぁ、確かに少し腫れてるな」
秋津は裕斗の右頬に手を当てて静かに言う。裕斗は気まずそうに視線を落として表情を曇らせた。
この時、初めて拓海は裕斗にとって秋津の存在が残りの不良達とは異質のものであると気付かされた。思い返してみれば当然の事だ。裕斗が普段とはかけ離れた弱気な態度を見せたのは秋津に対してだけで、そう考えれば単なる揶揄だと思ってしまっていた不良達の軽

口も現実味を帯びてくる。
裕斗は秋津に特別な感情を抱いている、拓海は確信した。
――ただそれが恋愛感情だとは、拓海はどうしても思いたくはなかった。無論、それ以外に考えようはない。だが、そう結論づけてしまえば、裕斗の秋津に対する感情を知っているらしい不良達の言動や秋津の態度は裕斗にとってあまりに残酷で痛ましいものではないか。拓海は裕斗の心情を想像して苦しかった。

秋津は不意に裕斗の頬から手を離して、何か面白い事でも思いついたとでもいう風に不良達を呼び寄せて何か小声で話し始めた。不良達は不適な笑みを浮かべて横目でこちらを見てくる、拓海は嫌な予感がした。裕斗もまた如何にも悪巧みをしているという風の秋津達を不審気に見詰めている。それに気付いた秋津が裕斗に何か耳打ちする。裕斗は一瞬驚いた顔をして、その後すぐに声をあげて笑い出した。

「いいぜ。早くしろよ」
そう言って立ち上がった裕斗に先程までの弱気な面はない、別人のように冷ややかに笑っている。
何が起こったのか分からないうちに、拓海は秋津に腕を掴まれていた。逃れようと体を捻ると、乱暴に強い力で後ろ手に拘束される。裕斗は振り返る事もせず階段を上り始めた。拓海は無理矢理背後から押上げられる形で階段を上らされた。混乱した拓海に裕斗の真意を考える余裕はない、それどころかこの状況で裕斗を信じていいのかすら分からない。身の危険を感じざるを得ない状況だ。頼みの綱だった喫煙所に人の姿はない。裕斗は踊り場の端にある障害者用のトイレへと入ってゆく。遅れて拓海も半ば突き飛ばされる形でそこへ押し込められた。
一瞬拘束が解かれて拓海の頭に浮かんだのは、とにかく助けを呼ぶことだ。障害者用のトイレには非常時用の緊急呼び出しボタンが

あるはずだ。拓海は洋式トイレの横のタイル張りの壁にある赤いボタンを探し当てて、藁をも掴む心持でそれに手を伸ばした。
その手を掴んで遮ったのは、他の誰でもない裕斗だった。
「な、んで」
瞠目して拓海は震える声で訊いた。
「大人しくしといた方がいいぜ、怪我したくないなら」
裕斗は冷笑して、拓海に触れるだけの口づけを落とした。
「先走ンなよ、裕斗」
「また殴られるぞー」
すかさず野次が飛んでくる。拓海はその野次をぼんやりと聞きながら、あぁ、自分は裏切られたのか、と絶望的な気持ちになった。

十八、屈辱の後先（後編）

わずかな望みも完全に断たれて、拓海は体中の力が抜けていくような錯覚に襲われた。何よりも微かな希望を他の誰でもない裕斗本人に打ち消された事が拓海を絶望的な気持ちにさせていた。

裕斗や不良達が一体何を企んでいるのか最早それすらどうでもいい。殴るなり陵辱するなり好きにすればいい、拓海は投げやりな心持で、相手の気の済むようにやらせて少しでも早くこの場から解放されたいと思った。

裕斗は抵抗する素振りを見せない拓海に少し安堵した顔をして、手早く拓海のベルトを抜く。そのベルトで拓海は洗面台の横の手すりに繋がれる形で後ろ手に縛られた。ベルトは拓海の手首に食い込む程、キツく巻かれている。裕斗は自分を逃すつもりは微塵もないのだ、拓海はそう悟った。

「やけに従順だな。これから何されんのか分かってないのか？」

秋津は大人しく縛られた拓海を見て、訝しげに裕斗に問う。

「びびってんだろ。まぁ、何されんのかは分かってないだろうな、東高のエリートには」

吐き捨てるように答える裕斗に、先程までの弱気な面は全くない。普段通りの勝気な物言いだ。

拓海は自分が今この状況に追いやられている事さえ、はじめから裕斗によって仕組まれた事なのかもしれない、と疑念を抱いた。

「うっわ、超進学校じゃん。勉強以外は何も分かりませんってか？」

「いかにも温室育ちって感じだしな」

「それじゃあ丁重にモテナシてやらないと」

裕斗の言葉に不良達は一層笑みを濃くして口々に軽口を言う。ただ秋津だけが裕斗の勝気な態度に不満気に顔を歪ませた。裕斗はそれに気付いていないのか平然としている。

秋津の表情の変化に気をとられていた拓海は、不意に浅黒い顔を

した男に上着を掴まれて反射的に
体を強張らせた。薄手の春物のコートを脱がせようと釦に手をかけている。陵辱したければすればいい、と開き直ったつもりではあったが、実際に事が差し迫ってくると恐怖感と嫌悪感がない交ぜに頭の中を支配してしまう。筋張った男特有の粗雑な造りの手が服の中へと侵入して来た時、殴られた方がマシだ、と拓海は身を捩って叫んだ。
「男の体触って何が楽しいんだよ！　裕斗の事ホモだって莫迦にしてた癖に、これじゃお前等の方が悪質だ！」
「なんだと？」
男達は、抵抗されるのもまた一興だ、とでも言いたげに切羽詰まった拓海を面白そうに眺めている。そんな中で、秋津だけが拓海の言葉が酷く気に障ったらしく拓海を睨みつけて冷酷な声を出した。拓海は秋津が過剰なほどにホモ扱いされる事を嫌悪しているらしいと思い至った。それならば秋津をもっと罵倒すればいい。それが更に自分を窮地に追い込もうとも、これから自分が受ける屈辱の少しくらいは秋津へと報復出来るだろう。第一、自分が犠牲になって相手を面白がらせてやるつもりは毛頭ない。自分が傷付くのならば、傷つける相手も相応の傷を受けてしかるべきだ。拓海は報復の対象を秋津一人に絞って、いかに罵ってやろうかと妙に冷えた心持になった。

それをまたしても遮ったのは裕斗だった。秋津も不良達も拓海が何と言い返すか、あるいは喚きはじめるのか様子を窺っていたのだ。拓海も出来る限り相手の怒りを引き出す言葉を吐き出そうとしていた。そこへ妙な沈黙など気にも留めないという風に裕斗は拓海の前へと歩を進めてきたのだ。そして有無を言わせず拓海の下着の中へと手を突っ込んできた。拓海は驚愕して表情を引き攣らせた、裕斗は構わずに直にそこを握ってくる。
「何で、こんな事を、」

堪らずに拓海は震える声で訊いた。不良達が自分に何をしてこようと、怒りで自分を保つ自信がある。でも、裕斗が相手なら話は別だ。自分は裕斗に惹かれているのだ、まだ裕斗に裏切られてこんな目に遭っているとは信じたくない気持ちが残っていて現実を整理出来ていない。まだ今の自分は心底裕斗を憎む事も恨む事も出来ずにいる。こんな状態で裕斗に触れられると、きっと自分を保てなくなる。拓海は哀願するような気持ちで裕斗を見つめた。

裕斗は拓海の表情を見て、そこへ触れていた手を離してズボンから抜いた。その時、裕斗がほんの一瞬だけ泣き出しそうな顔をしたのを拓海は見逃さなかった。その一瞬の裕斗の表情に、彼の真意があるのだとしたら……そう思うと拓海は言いようのないやりきれない心持になる。脳裏に焼きついた裕斗の苦しげな瞳の色が、拓海の心を酷く揺さぶった。

しかし裕斗はそれを打ち消すかのように別人のように冷ややかな笑みを作った。もう瞳に感情はなく、拓海が自分に縋る事は許さない、とでも言いたげな突き放した笑みだ。

「ご親切な事に、俺が拓海の体を手に入れる手助けをこいつ等はしてくれるってさ。条件は一つ、お前の後ろの具合をこいつらにも味見させてやる事だ」

「な、に」

裕斗が唐突に明らかにした不良達の企(くわだ)てを聞いて拓海は呆然とする。

「運が悪かったな、拓海。俺だって本意ぢゃないんだぜ」

裕斗は悪びれる事なく笑っている。拓海は呆然としたまま、裕斗が不良達の企てに乗った真意が判らずにいた。本意も何も、今まで裕斗は回りくどい事をせず、好き勝手に触れてきたはずだ。それに単に体を手に入れたいなら、裕斗の家に泊まりに行った時どうとでも出来たはずなのだ。

「よく言うぜ、乗り気なくせに」

秋津が嘲笑を含んだ声で裕斗を揶揄った。裕斗は動じる事なく秋

津の方へと振り返って言い放つ。
「まさかお前等がヘテロ相手に手を出そうとするとは思わなかったからな。結局お前らも俺と同類って事だろう」
「興味本位さ、それに俺は男より女の体の方が好きだし」
「ホモじゃなくてバイだぜ、俺らは」
不良達は悪びれる風もなく笑った。ただ秋津だけが何も言わずに裕斗を睨みつけている。拓海の推測通り、秋津はホモ扱いされる事が我慢ならないようだ。しかしそれは初対面の拓海よりも裕斗の方が承知しているはずだ。拓海は裕斗があえて秋津を怒らせるであろう言葉を言ったのか訝しかった。
「お前と同類だって？　冗談じゃない。同情に決まってんだろう、こっちは男のお前とヤんのなんてウンザリしてんだよ。でもそれで捨てたら可哀想だと思ってな。他の男とくっついてくれりゃ、俺もわざわざ男のお前なんかと遊んでやらずに済むからな」
秋津は吐き捨てるように言う。それは弁解というよりもむしろ裕斗を傷つける事を目的とした言い様だった。拓海は一抹の不安を感じて裕斗を見た。だが裕斗は背を向けたままで、どんな表情で秋津の言葉を聞いたのか拓海には知る由もない。
「男相手に欲情するくせに」
何気ない風を装って裕斗が返した言葉は、明らかに秋津に向けた挑発だった。
秋津の表情からは既に笑みは消えていた。乱暴に裕斗の襟首を掴んで、
「予定変更だ。まずはお前がどういう人間なのか、お友達に知ってもらわないとな」
と怒りを押し殺した低い声で言う。
「へぇ、あんたが可哀想な俺の相手になってくれるってわけだ」
裕斗の声に怯えはない。あくまでも秋津を挑発するつもりらしい。
「新しいのより、使い慣れた玩具の方が何かと便利だからな」
負けずに挑発し返した秋津の顔を引き寄せて裕斗が耳元で何か囁

く。次の瞬間、裕斗は激昂した秋津に床に突き飛ばされていた。裕斗は衝撃に顔をしかめてタイル張りの床に腰をついている。明らかに裕斗にとって不利な方向へと状況は進んでいる。拓海は裕斗が何故あえて挑発的な態度をとって自ら悪い方向へと事を進めるのか理解出来なかった。裕斗を助けようにも縛られた状況では手の打ちようがない。秋津は床にしゃがみ込んだままの裕斗を見下ろして一笑すると、靴底で裕斗の股間を押さえ付けた。裕斗は苦痛に顔を歪ませる。秋津は靴先でそこを弄りながら楽しげな声を出す。

「そういう顔の方が裕斗らしいぜ。これからどうして欲しいか言ってみろよ、いつもみたいに」

秋津を見上げた裕斗の顔にはもう挑発的なところも強気なところも残っていなかった。拓海の目に映ったものは、弱々しく傷付き疲れた少年が瞳を潤ませている姿だ。

「……抱いて、くださ、い」

か細い声で途切れがちに少年は言った。

「何だ、結局いつものパターンか」

「裕斗は秋津には逆らえないからな、惚れた弱みってやつ？」

「秋津とやってる時だけは可愛気があるよな」

目の前で繰り広げられている光景に呆然としている拓海の横で、傍観している不良達は平然と談笑している。拓海はただただ言葉もなく、立ち尽くしていた。白で統一されたトイレは明かりが灯されていないせいか薄暗く灰色地味ている。無駄に広いつくりの障害者用トイレの真ん中で、裕斗は秋津に犯されていた。苦しげな裕斗の喘ぎ声が、四角い空間に響き渡って拓海の耳に否応なく届いてくる。不良達がどう考えていようと、裕斗が本心からその行為を承諾していようと、拓海にとって目の前で行われている事は歴然とした強姦だった。秋津はいわゆる前戯、何の準備もなく裕斗に挿入した。た

だでさえ挿入される側に大きな負担がある事を知る拓海は、受身の苦痛を知る分裕斗が今されている事を考えると身の毛立つ程だ。そもそも性行為に使う器官として作られていないはずのそこを、女のそれの代わりとして以上に乱暴に扱っている。それがどれだけ危険な事なのか秋津も不良達も全く考えていない、これはセックスではない、単なる暴力だ、拓海は血の気が引いて今にも意識を失いそうだった。

「やめてくれ、それ以上やったら死んでしまう、」

裕斗の内股を伝う鮮血を見て、拓海は堪えきれずに震える声で叫んだ。秋津はそれを聞いて律動を止め嘲るように笑う。

「こんなんで死ぬかよ。それにコイツだって楽しんでるんだぜ？」

秋津は拓海に見せつけるように背後から裕斗のモノを握ってみせる。裕斗は身体を震わせて濡れた声を漏らす。

拓海の視先に気付いた裕斗は、痛みと快楽に歪む顔に痛々しい笑みを浮かべる。それは拓海に対してというよりは、残りの不良達に向けて作った煽情的な笑みの形だ。拓海はもう何も言えなかった。

後ろから突き上げられる度、裕斗は拓海の全く知らない表情と声を出す。それが演技なのか裕斗の本来の姿なのかすら拓海には判別出来ない。ただ、裕斗は射精した瞬間、伏し目がちにひどく自虐的な笑みを浮かべた。泣きたくても泣けない状況に居る時、自分を守ろうとする何かが無理矢理顔を歪ませた時にできるそれだ。しかしその直ぐ後に秋津が身勝手に果てた時、裕斗の顔からその笑みは消え、ひどく冷めきった無表情へと切り替わった。

「ほら、次いいぜ」

事が済んでしまうと、秋津は裕斗の存在にはまるっきり無関心で突き飛ばすように裕斗を不良達の方へ押しやってそう吐き捨てた。そして何事も無かったかのような顔で精液と血で汚れた下部をトイレットペーパーで拭っている。不良達はそれを気にするわけでもなく、目の前に与えられた餌に飢えた獣が飛び付くかの如く、抜け殻と化した裕斗の体を獰猛に貪り始めた。裕斗の表情は苦痛も嫌悪も

失って、意志を持たぬ人形のように為されるがままになっている。肌に血の気はなく、不良達の浅黒い肌が重なる度、一層その青白さは際立った。図々しい程に粗雑で強靭な肉体を持つ男達は、愚鈍で短絡的な思考からか自分達の体と裕斗の体を同一視しいるらしかった。自分が堪え得る範囲で乱暴な扱いをしても平気だと思い込んでいる。傍から見ている拓海は、裕斗の腕よりも二周りも太い男の腕が遠慮なく裕斗の華奢な肩を掴んで引き寄せる度、硝子細工が脆く崩れるように裕斗の肩が壊れてしまうのではないかと気が気でなかった。

間断なく男達は裕斗の体を蹂躙して、気の遠くなる程の雄の匂いが個室の空気を満たす。不良達の欲望から解放された裕斗は力なく壁に凭れかかっていた。服の乱れを直している不良達の横で、それまで傍観していた秋津が、冷笑を浮かべたまま裕斗の傍へと寄る。秋津に気付いた裕斗は冷めた目で秋津を見上げる。何か言葉を発する余力も裕斗には残っていないらしい。無表情のまま見上げてくるだけの裕斗の髪を掴んで、秋津は乱暴に裕斗を引き寄せる。

「勘違いするなよ。お前は俺にとってただの便所だ」

秋津はそう言って裕斗の肩に歯を立てながら笑った。裕斗は空を見つめたまま、その言葉に冷めた表情を崩す事なく黙りこんだままだ。秋津は裕斗の首筋に鬱血の痕を残してそのまま身を翻す。

「……良かったな、裕斗が身代わりになって」

秋津は、惨状を目の当たりにして半ば放心していた拓海を挑発するように笑い、そう言い捨ててトイレを出て行った。自分に向けられた蔑むような笑みの中に、拓海は秋津の歪んだ欲望を垣間見た気がした。

十九、少年遊戯（前編）

不良達も秋津の後に続いて出て行き、其処には裕斗と拓海の二人だけが残された。裕斗は乱れた衣服を直すこともせず、力なく壁に体を凭れさせている。

……身代わり、確かに秋津はそう言った。つまり本来なら、拓海が裕斗と同じ目に遭っていたはずだったのだ。拓海はやりきれない気持ちだった。偶然ならまだ良い、単に不良達の興味が逸れて標的が自分から裕斗に変わってしまったというのなら、裕斗が不本意ながら自分の身代わりになったというのなら、身勝手に憤って裕斗を罵って全て忘れて諦めてこれからの自分を保つ事くらい出来るのかもしれない。たが自分とは違って、裕斗はあの状況から不本意な方へ進む事を阻止する事も、そこから逃れる術も持っていたはずだ。裕斗が自分を庇って酷い目に遭ったというのならたまらない。自分は縛られていたからとはいえ、何も出来ずに傍観してしまったのだから。

本当は何故こんな事になってしまったのか、裕斗に全て問いただしてしまいたい。裕斗が一体何を考えているのかはっきりと知りたい。しかし眼の前で傷付き弱っている裕斗の姿を見ると、これ以上裕斗を疲れさせる事も追い詰める事も拓海には出来なかった。

しばらく無言の状態が続いた。裕斗は動くのも億劫そうに壁に背をついていたが、何も言い出せずにいる拓海に無言のまま体を引き摺るように気怠げに近寄ってきた。床には剥ぎ取られた服が散乱したままで、裕斗は釦の千切れた薄青のストライプシャツを羽織っているだけだ。しかし裕斗は恥らう事も気まずそうな素振りも見せず、冷え切った無表情で拓海の傍へと寄った。裕斗の肌にはいくつもの鬱血の痕と、強く押さえ付けられて出来たらしい青痣が浮かんでいる。距離が縮まって、それらがいよいよ生々しく鮮明に拓海の瞳に

映った時、拓海は直視し続ける事が出来ずに俯いた。
裕斗は淡々と拓海を縛りつけていたベルトを外し始める。手首に触れる裕斗の指先は血の通ったものとは思えない程、冷え切っている。拘束を解かれた拓海は不安になって裕斗を振り返った。裕斗は果たすべき役目は終えたという顔で、手すりに寄りかかって目を伏せている。拓海に何の言葉もかけるつもりはないらしい。何も訊かずに自分がこの場から早く立ち去る事を望んでいる、拓海と目を合わせようともしない裕斗の態度を見て、拓海はそう感じた。
……たしかに自分は裕斗にかけるべき言葉を持ち合わせていない。でも、だからといって、このまま裕斗を放って帰れるわけがない。たとえ裕斗がそれを望んでいるとしても。
裕斗の指先の冷たさに拓海は覚えがあった。卒業式の日に駅で裕斗に逢った時だ。そして、その日もたしか裕斗の首筋にはキスマークがあった。あの日も、裕斗は今日と同じような目に遭っていたのではないか。そしてそれを自分は何と言ったか。拓海はそれを思い返して消え入りたいような罪悪感に襲われる。
それだけではない。裕斗がこれまで幾度となく秋津達に陵辱されてきたのだとしたら、そしてそれが裕斗が必要以上に「欲望」を分けて考える事に拘っている理由になっているのだとしたら、どれだけ自分は無神経な事ばかり裕斗に言ってきたのだろう。拓海は初めて今迄何度となく考えてきた裕斗の真意の一部を知った気がした。そしてそれは、今迄自分が裕斗の事を何一つ分かっていなかった事と自分の事ばかり考えて知らないうちに裕斗を傷つけていただろう事を充分すぎる程、拓海に思い知らさせた。それは拓海を、裕斗と顔を合わせられない、逃げ出したいような気持ちにさせる。
でもそれを許さないのは、裕斗を放っておけないという気持ちだけではない。裕斗があえて秋津達の企みに乗って、わざわざ自ら酷い苦痛を甘んじて受けた真意を思ったからである。本当の理由は、裕斗以外の誰にも分からないだろう、だが拓海は、何も知らずに裕斗の言う「欲望」や「遊び」に拘泥して身勝手な憶測ばかりする自

分に対して、裕斗はその意味を悟らせようとしたのではないのかと考えたのだ。それは裕斗に興味を抱いた事を白状した拓海に、自分の本当の姿と真意を裕斗なりに示したかったのではないか、そう思うと拓海は逃げ出すわけにはいかなかった。

でも拓海はまだ、裕斗に何と言葉をかけたらいいのか、それとも何も言わない方がいいのか分からずに居た。無神経な言葉を吐くわけにはいかない、そう構えれば構える程、頭の中には色んな感情や言葉の羅列が絡まりあって喉の奥で詰まってしまう。裕斗は考え込んでいる拓海の横で、何をするわけでもなくただ壁に寄りかかっている。その姿を改めて見て、拓海は今はとにかく裕斗の体の手当てを優先すべきだと思った。

「……帰れよ、後処理くらい自分で出来る」

ハンカチを水で濡らしていると、拓海が何をしようとしているか勘付いた裕斗は壁に凭れたまま横目で拓海を睨んだ。拓海は何も答えなかった。裕斗が口で何と言おうと、冷え切った体のまま服の乱れも直さずにいるのは、後処理すら億劫な程疲弊しているからだと判りきっている。拓海は黙ったままハンカチを絞って出来るだけ肌に馴染むようにそれを手の平で温めた。そして、いざそれで裕斗の肌を拭おうと口元に寄せると、裕斗は頑なに拒んでくる。拓海は途方に暮れながらも、裕斗を納得させられそうな言葉を探した。

「秋津って男が裕斗は俺の身代わりになったって言った」

こう言えば一応の大義名分は出来る。拓海は強引かと思ったが、裕斗の顎を捕らえて手早く頬や口元を汚している残滓を拭った。裕斗は少し顔を顰めて、もう抵抗しようとはしなかった。

「冷たいと思うけど、少し我慢してくれ」

拓海は裕斗が観念したものだと思い込んで、そう言って拭う手を胸元へと移した。返ってきたのは冷ややかな声だ。

「……俺がお前のために犠牲になったと思って責任感じてるってわけだ。つくづくお人好しだな」

拓海は作業を続けながら裕斗を見た。裕斗は無表情のまま淡々と言葉を続ける。
「拓海を此処に連れて来たのも、そこに縛ったのも俺だぜ？　第一、お前を助けたいと思ってたらこんな回りくどい真似しなくてもお前が助けを呼ぼうとするのを邪魔しなければ済んだ話だ」
裕斗の主張は確かにある意味では尤もな話だった。だが拓海が知りたいのはそこではない。拓海は出来る限り穏やかな声を出した。
「俺が知りたいのは、そういう事ぢゃない。何でこういう目に裕斗が遭ったか、だ。でも、話したくないならそれでいいんだ。無理に訊こうとは思ってない。でも、傷の手当てくらいはさせて欲しい」
拓海はそれだけ言って、汚れてしまったハンカチを洗うために一旦裕斗に背を向けた。蛇口から流れ出る水は春めいてきたこの頃の陽気とは無関係に冷たかった。濯いでいるうちに拓海の指先の体温を容赦なく奪ってゆく。それでも少しでも冷たさを和らげようと、拓海は絞ったハンカチを手の中で何度も擦っていた。
「……加虐心をそそるんだよ。俺みたいなのは」
「え？」
拓海がハンカチを温めるのに葛藤している隣で、裕斗は唐突にそう言った。拓海が驚いて振り返ると、裕斗は冷めた顔のまま話続ける。
「俺は傍から見れば、恵まれた環境で何の苦渋も知らず幸せに生きてるように見えるって事。一部の卑屈な人間は俺みたいなタイプは我慢ならないのさ、だから苦しめて屈従させたくなるんだろうな。お前も俺の事そういう風に見てただろ？」
裕斗が投げやりに言い放った言葉に、拓海は何も言い返せなかった。実際に拓海は今日まで、裕斗が幸せな環境に置かれて愛されて育ってきたのだと信じて疑わなかった。奔放な言動もたまに見せる不安定なところも、裕斗の真意が分からない事さえ、愛されてきた裕斗と自分とでは住んできた世界が違うから仕方のない事だと結論付けていたのだ。それを裕斗に言い当てられて、拓海は卑屈な自分

の心持ちを全て見透かされていたのか、と強い自己嫌悪と恥に苛まれた。
だからといって拓海は、秋津達のように裕斗を屈従させたいと思った事は一度もない。だが、今迄自分が裕斗に対して言った言葉や、自分ばかりが不幸だと思い込んでその苦しみから逃れるために裕斗を利用しようとした事を考えると、結局自分が裕斗に対してしてきた事は秋津達となんら変わりはない、いや無意識だった分、余計に性質が悪い、拓海はそう思って苦しかった。
自分は今まで裕斗の何を見ていたのか、裕斗の真意も何一つ知らない状態で裕斗に惹かれているだなんて厚かましく信じ込んでいたのか、拓海が今まで勝手に作り上げていた裕斗は単なる身勝手な思い込みの虚像だったのだと悟った。眼の前に居る少年は、拓海が知っている裕斗ではない。いや、初めから知っていたわけではない、勝手に思い込んでいただけだ、裕斗は幸せな環境に守られて傷付く事なく無邪気に育ってきた少年だ、と。本当の裕斗は痛みも何も知らない傷付いた事のない人間ではない、目の前で痛々しい姿で無表情のまま立ち尽くしている少年も、たしかに裕斗なのだ。
しかし目の前の裕斗は、今まで拓海の知っていた彼とあまりにかけ離れた処にあった。拓海の知る強気で奔放に振舞い表情のころころと変わる裕斗と、今日初めて見た弱気な態度の彼と今こうして感情の消えた冷めた態度を貫いている彼、あまりに違いすぎている。拓海は一体どれが本当の裕斗の姿なのか分からなかった。でも、そのどれも裕斗なのだ。拓海は整理出来ない感情を持て余して、そう思うしかなかった。裕斗という人間をもっと知りたい、自分が裕斗に惹かれているという感情自体は制御出来るものではない、けれど今まで無神経に自分が裕斗にしてきた事や言ってきた事を考えると、自分にそんな事を思う資格などない、拓海は強い罪悪感に泣き出したいような気持ちを抑えて、何も言い出せないまま裕斗の足元に跪いて血と精液で塗れた痛々しい太腿を拭いはじめた。

「……お前も試してみる？」
太腿を拭い終えて、後は一番酷く傷付いた場所だけだというところで、さすがに拓海は躊躇いから手を止めた。拓海は自分がそこへ勝手に触れていいものなのかどうか戸惑っていたのだ。その事に気付いた裕斗は掠れた声でそう言って自嘲気味に笑う。それはいつもの挑発的な口振りとは違う、ひどく投げやりで自虐的な言い方だった。
「何で俺が裕斗の自棄に付き合わなきゃなんないんだよ」
内心の動揺を押し殺して拓海がそれだけ言うと、裕斗は不意にいつもの表情を取り戻して声をあげて笑った。
「人の科白パクんなよ」
拓海は堪え切れずに裕斗の体を抱き寄せた。直に感じる裕斗の肌は以前感じたそれとは別のもののように冷え切っている。裕斗は突然の抱擁に反射的に体を強張らせた。それがまた拓海の感情を酷く揺さぶった。
「……何が本当なのか、わからないんだ」
拓海は溢れてくる感情の整理が付かないまま震える声でそう言っていた。裕斗が自分の見慣れた笑顔を見せてくれた事が嬉しいのかもしれない。自分の抱擁を拒むかのように身を固くした事が悲しいのかもしれない。自分の知っている裕斗とあまりにかけ離れた今日初めて目の当りにした裕斗のどちらを本当だと思っていいのか、どう整理して考えればいいのか混乱しているからかもしれない。ただ拓海は抱擁を緩めることもせず、気付けばそんな事を口走っていたのだ。
「……そんなの、俺だってわかんねえよ」
裕斗は拓海の腕の中で目を伏せて、静かに呟いた。

二十、少年遊戯（前編）

「シャワー浴びたい」
拓海の家に着くなり、裕斗はまずそう言った。
「中がまだ気持ち悪い、それに手当てするんなら傷口をまず洗わないとな」
裕斗の言い方は、まるでそれが自分の体の事を言っているわけではないかのように平然としたものだ。
あの後、簡単な後処理を済ませてから、拓海は半ば強引に裕斗を自分の家へと連れてきた。とはいえ、それは単にあの場所からは裕斗の家よりも自分の家の方が近かったからだ。ショッパーズモールを出て、覚束ない足取りで勝手に駅に向かおうとする裕斗の腕を掴んで、拓海は通りかかったタクシーに殆ど裕斗の意見を聞かずに乗り込んだ。そのまま拓海が運転手に自分の住所を告げても、裕斗は特に何も言わなかった。ただ、車内ではずっと無言だった。拓海は内心で、裕斗は自分の強引なやり方に怒っていて、拓海の家に入ろうとはしないのではないか、と冷や冷やしていたが、それは杞憂に終わった。
「ついでに風呂も沸かしてくるよ。少し身体を温めた方がいいから」
裕斗をリビングに通して、拓海はそう言って浴室へ向かった。浴槽は今朝湯を抜いて掃除をしたままの状態で、湯は入っていない。拓海は蛇口から流れる湯の温度を確認して、湯が溜まるまでの間、タオルや着替えの用意を済ませ、リビングへと戻った。裕斗は床の上に直に座っていて、いかにも手持ち無沙汰で仕方がない、という顔で、拓海に無理矢理着せられていたコートの裾を触っている。
「なんで床に座ってるんだよ、余計体が冷えるだろ」
リビングに戻るなり呆れた顔で拓海が問うと、裕斗は冗談っぽく笑う。
「いいのか？　汚れるぜ、まだ垂れてきてる。あいつ等の、」

言葉の途中で拓海は裕斗の腕を掴んで、そのままソファへと乱暴に座らせた。半ば衝動的なものに突き動かされてとった行動だ。無理矢理体をソファに押し付けられる形になった裕斗は、体に受けた衝撃に微かに眉を歪める。傷口に障ったのかもしれない。その表情にはっと我に返らされた拓海は、また罪悪感に襲われて暗い気持ちになった。

「体……酷く痛むなら、アスピリンならあるけど」

遠慮がちに拓海が問うと、

「いらねー」

裕斗は拗ねた顔でぶっきらぼうな声を返す。拓海は居た堪れなくなって何か飲み物を用意しようとキッチンへと向かった。裕斗は陵辱された事自体には傷付いた素振りを見せていない、だがその話題に触れる時にはどこか自虐的な言い方をしてくる。拓海はそれにどう対応すればいいのか、労わってやるべきなのか、何事もなかったかのように振舞うべきなのか、正直持て余していた。拓海には普段の裕斗が強気で自信に満ち溢れているように見えていた分、不意に裕斗が自虐的な言い方をするのが余計に痛々しく思えてならないのだ。

「何も聞かないんだな」

ホットココアにブランデーを数滴落としたものを受け取りながら、ぽつりと裕斗は呟いた。伏し目がちにカップを口へ運ぶ裕斗の表情からは、裕斗が一体何を望んでいるのかは読み取れない。拓海は裕斗の隣に座り、しばらく考えを巡らせて静かに言った。

「俺が聞いたら、全部正直に話してくれるのか？」

我ながら狡い言い方だ、と拓海は思う。あらかじめ裕斗の了承を得る事で、自分が裕斗に無神経なことを聞いてしまうかもしれないという不安を紛らわせようしている。裕斗はその拓海の心持を悟ったのか、拓海の質問を鼻で笑って言った。

「やだよ、めんどくせー」

あっさりと返された言葉に拓海は二の句が継げられなくなってしまう。でもぶっきらぼうに言った裕斗の表情が思ったよりも穏やかなもので拓海は少し安堵した。裕斗が話したくなるまでこの話題には触れないようにしよう、拓海はそう思った。無理に聞き出したところで、裕斗の為になるような言葉を言ってやる術を拓海は持ち合わせていない、その自覚はあった。

それに以前に裕斗に言われた言葉――それぞれに与えられた人生があって、それぞれに不幸があり、人はその与えられた境遇で生きて行くしかない――それが裕斗の考えなら、自分があれこれと横から口出しをするべきではない。自分がこれまで生きてきた中で感じた苦痛が本当の意味で自分にしか分からないように、裕斗が今思っている事もこれまでに受けてきた傷の痛みも裕斗にしか知りようがない。それを分かち合おうとする事自体が無粋で偽善的な事で、裕斗自身も下手な同情や慰めなど望んではいないだろう。

拓海は裕斗がココアを飲み干したのを確認して立ち上がった。

「バスルームに案内するよ。そろそろお湯も溜まっただろうし」

裕斗は頷いて、拓海の後をついてきた。

「タオルと着替えは此処、下着は新しいのがあったから気にせず使ってくれ。今着てる服はこの籠に。後で洗っておくから」

脱衣所に着くと裕斗は勝手に服を脱ぎ始めた。拓海は慌てて簡単な説明を済ませ、その場を立ち去ろうとした。裕斗は上半身裸のまま、脱衣所を出て行こうとする拓海の腕を掴む。

「一緒に入ろうぜ」

「……窮屈だろ」

「どこが、一人で入るには広すぎるぜ。それに俺は怪我人だ」

裕斗は拓海の腕を掴んだまま浴室の戸を開けてみて試すように言う。拓海の家の浴室は六畳程の広さで、そのうちの二畳分が浴槽になっている。一般的な家庭の浴室がどの程度の広さなのか拓海には知る由もにないが、自分の家の浴室が一人で入るには広すぎるとい

う事は拓海も常々感じていた。
拓海がどう切り抜けようか考えるより先に、裕斗はさっさと自分の服を脱ぎ捨ててしまい、拓海の服に手をかけてくる。拓海は慌ててその手を遮って言った。
「わかった、体洗うのは手伝うから」
「脱げよ、お前も。濡れるだろ」
「……大丈夫だって、着替えもあるし」
「照れんなよな、今さら」
裕斗は口を尖らせて、先に浴室へと入っていく。拓海はほっと安堵の息を吐いた。自分でも不謹慎だと思うが、直接的に肌が触れ合ってしまうと拓海は平常心を保つ自信がなかった。ただでさえ平生から人肌の温もりに飢えている上、その欲求に容易く自分の理性が挫かれてしまうという事は閉架書庫で裕斗に触れられたときから自覚している。だから、もし裕斗が浴室で戯れに触れてきたら、と考えると拓海はどうしても服を脱ぐわけにはいかなかった。生理的な体の変化を意思で律する事は難しい。それを裕斗に見られるのは嫌だった。

「強情なやつ」
結局服を着たまま腕まくりだけをして浴室に入ってきた拓海をみて裕斗は呆れたように笑う。裕斗は既に自分で体を洗い始めているらしかった。湯気と薄い靄の中で、シャワーの飛沫に打たれて濡れた肌の上
を白い泡が滑ってゆく。
「来いよ、濡れたっていいんだろう？」
裕斗はシャワーを止める事なく、揶揄うように言って拓海に泡立てたスポンジを差し出してくる。拓海は濡れるのも構わずにそれを受け取った。裕斗の肌に弾かれた水滴が拓海の服を湿らせる。仄白い狭霧の中でも裕斗の肌に残る乱暴の痕は目立っていて、その中でも特に首筋に秋津が付けた紅い痣は際立っている。嫉妬、とは言い

切れない何か複雑な気分に囚われて、拓海は何度も裕斗の首筋をスポンジで拭った。吸い上げられて出来る痣は、表面上のものではない。皮膚の内側に残されたものが、薄い皮膚を隔ててその内面に傷があると主張しているに過ぎない。秋津が何故わざわざこんな痕を裕斗の体に残すのか、それが拓海には分からなかった。

首筋の痕にばかり気をとられて、裕斗の背中を流す拓海の手は鈍りがちだった。そんな拓海に気付いたのか裕斗は拓海の手からスポンジを取り上げて、そのまま拓海を引き寄せて急かすように言う。

「一番洗わなきゃいけない場所、わかってんだろ？」

振り返って見上げてきた裕斗はいつもの試すような笑みを浮かべている。引き寄せられた拓海は体勢を崩して後ろから裕斗を抱く形になっていた。濡れてしまった服を通して感じる裕斗の背中は、熱いシャワーにあたっていたとは思えない程に冷えたままで、拓海はひどく動揺した。裕斗の肌が冷たい儘なのは、肉体的な負担だけの問題ではなく、心因性のものもあるのかもしれない、それでもとにかく湯船に浸からせて少しでも温めた方がいい。拓海は半ば自分自身にそう言い聞かせて、裕斗の挑発的な言葉に従う事を選んだ。

「早くしろよ、それともこの体勢ぢゃやりにくい？」

覚悟を決めたはずが、いざボディソープを絡ませた中指を裕斗の後ろに当てたまま拓海が戸惑っていると裕斗は急かすように揶揄ってくる。

「このままぢゃ少し、やりづらい」

拓海は正直に言った。実際に拓海の胸に裕斗が背中を凭れさせて立っている状態で、手を動かし辛いのは本当だった。

「よく見えるように、四つん這いになってやろうか」

裕斗は拓海を見上げて、悪戯に笑ってみせる。拓海は慌てて首を横に振った。

「そうぢゃなくて、少し身体を離して欲しいんだ。手を動かしやすいように」

躊躇いがちにそう言うと、裕斗は言われた通りに少し身体を離して、拓海は心底ほっとした。身体同士が密着したままだと、単に物理的にどうこうというよりもむしろそれとは別の自分の生理的なものの心配があったからだ。拓海はそういう問題を今ここに持ち込みたくはなかった。努めて冷静に、これから為される行為は作業の一種だと思い込まなければならない、拓海は裕斗にもう一度確認をとって、ゆっくりと裕斗の中へと指を挿れた。

「沁みたら、言って」

裕斗は拓海の指を受け入れて、小さく吐息を漏らした。拓海はゆっくりと指を動かしながら、不安気に裕斗に言った。裕斗の中は、冷えた肌とは対照的に温かい。拓海は裕斗の内側にはきちんと血が通っていて温もりが損なわれていなかった事に安堵しながらも、指先に絡みつくような柔らかな抵抗とぬるついた感触に心地よさを感じそうになって怯んだ心地になる。

「お前の触り方、すっげーやらしい」

裕斗は振り返って薄く笑う。拓海は反射的に赤くなってたじろいだ。

「からかうなよ、」

出来る限り冷静さを装って、拓海は機械的に指を動かそうと試みた。しかし、冷静でいなければならないと思えば思う程、指先に触れる裕斗の内側の熱ばかりを鮮明に感じ取ってしまうのだ。本来なら、真っ当な主義の人間なら、男のそこに指を入れても不快感しか持たないはずなのに、拓海はそう思ってどうしようもない気持ちになった。嫌悪感どころか、初めて感じる裕斗の中の熱と濡れた粘膜の感触に、そこに指先を侵入させているという事に、どうしようもないくらいに興奮して心を乱されている自分が居るという事を拓海は認めざるを得ない。ただその欲望に理性が屈してしまわないようにと自分を止めさせているのは、裕斗への想いと、今の状況に肉体的な欲望を持ち込みたくないという拓海の倫理的な意志である。

裕斗はそんな拓海の心持に揺さぶりをかけるように、何のためらいもなく濡れた声と反応を返してくる。そして拓海の葛藤をよそに裕斗は振り返り様に拓海の首に腕をまわして唇を被せてきた。何の抵抗も
出来ずに、拓海は裕斗の舌が口内にはいってくるのを受け入れた。
――これ以上は駄目だ、溺れてしまう――既に霞みがちになった思考の中に警鐘が鳴る。裕斗の舌は拓海の意志すら容易く弄ぶように、拓海の舌を絡めとって濡れた音をたてる。拓海は呼吸も自由に出来なくなるほどの激しいキスに、四肢の均衡を保てなくなって、裕斗の中に触れていた指を抜いてそのまま縋るように裕斗の華奢な体を抱き締めていた。
「……好きだ、」
長く深いキスの後、拓海は裕斗の首筋に顔を埋めて呟いた。肉体の欲望のためではない。その言葉を言わせたのは、追い詰められた拓海に残された最後の理性だ。

二一、少年遊戯（後編）

「もっとマシな誘い方しろよ」
裕斗は冷ややかに吐き捨てて拓海の身体を押し戻した。自分の心持とは全く逆の意味で、自分の言葉を裕斗が受け取ったのだと拓海は悟った。
「違う、誘うつもりで言ったんぢゃない」
「こんな状態で言っても説得力ないぜ？」
裕斗は熱を帯びはじめた拓海のそれに手の平を当てて笑う。口調自体は普段裕斗が拓海を揶揄う時とかわらないが、向けられた笑みも視線も酷く冷め切ったもので、拓海は困惑してたじろいだ。裕斗が勘違いするのも無理のない話だ。自分の体の反応もそうだが、あの流れで「好き」と言われたら、その先の行為を正当化するための言葉だと受け取られても無理はない。拓海は裕斗の冷めた態度に怯みながらも、誤解を解こうと必死に言葉を探した。
「セックスがしたいから言ったんぢゃない。俺が今、欲情してるのは事実だけど、裕斗が好きだからこうなってしまっただけで、」
「で？　好きだからヤらせろって？」
冷めた裕斗の表情には、侮蔑の色さえ滲んでいる。拓海は自分の心情が上手く伝えられないどころか裕斗の感情をさらに逆撫でてしまっている事に泣きたくなった。
「そんなつもりはないんだ。欲情したからって、それだけでセックスしてしまったら秋津達と同類になってしまう。俺は、裕斗を傷つけるような真似はしたくないんだ。だから、したくて好きって言ったんぢゃない」
絞りだすように言い終えたところで拓海は乱暴に襟元を掴まれた。不意に強い力で後ろに押された拓海は、何の身構えもなかった分あっさりと体勢を崩して浴槽の中に倒された。浴槽の縁に足をとられて後ろ向きに倒れたが、浴槽が広かった事と湯をはってあった事が

幸いして頭は打たずに済んだ。だが、その代わりに湯を大量に飲み込んでしまった。びしょ濡れになって立ち上がる事も出来ずに噎せている拓海を見下ろして裕斗は吐き捨てるように言う。
「俺はお前の恋愛観なんて興味ないって言ったよな」
そして、何も言い返せずに呆然としている拓海の上に覆い被さってきた。着衣のまま湯に浸かってしまった拓海は纏わりついてくる服とその中に入り込んだ湯のせいで思うように身動きがとれない。裕斗は拓海の膝に馬乗りになって、性急に拓海のズボンのチャックを下ろして下を肌蹴させると露骨にそこに触れてきた。反射的に拓海は小さく声を漏らす。裕斗はその拓海の反応を嘲るように笑い、何のためらいもなく拓海のそれを口に含んだ。
裕斗が頭を動かす度に、音をたてて湯が跳ねる。裕斗の濡れた髪が湯の中でひろがって、柔らかく拓海の腰を擽った。拓海は混乱した意識さえ、身体に与えられる強い快楽に奪われてしまいそうになる。裕斗はそれに追い討ちをかけるように、根元を手で乱暴に扱きながら先端に舌を寄せてきた。赤い舌は水中で遊ぶ金魚の尾のように湯の中で揺らめいて拓海の敏感な部分へと絡みつく。
「出せよ」
「い、やだ」
「こんだけ腫らしといて、出さずに治まんのか？」
散々煽られて、拓海の限界は近かった。湯の中で口淫を繰り返していた裕斗よりも、拓海の方が呼吸の乱れは激しい。追い詰められながらも頑なに達こうとしない拓海に、痺れを切らして裕斗は顔をあげて拓海の耳元でそう囁いたのだ。それでも拒む拓海に、裕斗は揶揄いを含んだ問いかけをして何とか堪えている状態の拓海の先端を指先で刺激しながら耳を食んでくる。
「もう、だめだ……これ以上は、」
途切れがちに言って、拓海は力の上手く入らない手で裕斗の手を退けようとも足掻く。裕斗はその手を掴んで拓海の自由を奪うと、また拓海の下肢へと顔を埋めてきた。根元まで口に含んで、痛いく

らいに喉奥で締め付けてくる。裕斗の舌が這う度に、口内へと流れ込む湯まで温い粘膜のように拓海のものを撫でて、その後に触れる裕斗の舌を余計鮮明な感触にする。拓海はもう自分の体を律する余力は残っていなかった。そのままキツく吸い上げられて、感情とは裏腹に身体は欲望を吐き出した。満足気な笑みを浮かべて、裕斗は口内に放たれたものと湯を吐き出す。白濁の液体は透明な湯に混じる事なく湯の中をゆらゆらと漂った。

「……ごめん」

拓海は肩で息をしながら、悄然として呟いた。

「何で拓海が謝るんだよ」

裕斗は拓海を訝しげに見上げる。

「こんな事、させるつもりぢゃなかった」

「頼まれてやったわけぢゃない。拓海は嫌だって言ってんのに、俺が勝手にやったんだ。怒るなら分かるけど、何で謝るんだよ？」

「達ったんだから、同じことだ、」

裕斗は何か言いたげに眉をひそめる。それを遮って拓海は俯いたまま話し続けた。

「俺も結局、秋津達と同じ事を裕斗にさせたんだ。肉体の欲望を裕斗で解消した。好きだって言っておいて、あんな目に遭った裕斗に欲情する事自体不謹慎なのに……結局身体の欲望には勝てなかった。最低だ、」

「自己嫌悪に浸りたいだけなら勝手にしろよ。そういう謝罪は迷惑だ。言っただろ？　俺は欲望を分けて考えてる。肉体は肉体で独立した欲望を持ってんだよ。だから頭でどう考えてようが身体は身体で欲望に忠実に反応する。俺は別にそれでいいと思ってるけど、それを最低と思い込むのはお前の勝手だ」

「それは、裕斗の言う通りかもしれないけど……裕斗が欲望を分けて考えるのって、秋津達の事が原因なんだろう？　あれだけ酷い事をされてきて、裕斗が欲望を分けて考えるようになったのなら、俺は絶対、肉体の欲望を裕斗に見せちゃいけないと思ってた、それな

のに、」
「それで同情してんのか？　ふざけんな」
拓海の言葉を途中で遮って、裕斗は刺々しく吐き捨てる。違う、と否定の声をあげる前に裕斗に喉を押さえ付けられていた。片手で首を締め付けられて、冷めた目で睨みつけられた拓海は黙るより他なかった。
「不幸なのは自分だけぢゃなかったって知って気分がいいんだろ？　好きだって感情もお前のは単なる錯覚だ。お前は勝手に俺を不幸だと思って、親近感を持っただけだ」
そうぢゃない、拓海は咄嗟に叫ぼうとするが喉を押さえ付けられたままで声にはならない。掠れた息が漏れるばかりだ。拓海はそれでも自分の意志を伝えようと必死に頭を横に振った。
「ついでにもっと気分の良くなる話を聞かせてやろうか？」
裕斗は拓海から目を逸らして半ば自虐的な笑みを浮かべる。
「欲望を分けて考えるのは、レイプされてたからぢゃない。それはそういう目に遭う前からの考えだ。……薄々感づいてるとは思うけど、俺は秋津が好きだった。秋津とは元々幼馴染みで、俺があいつを意識しはじめたのは中学に入ってからだけど、あいつは真っ当な人種だったからな、俺の都合で幼馴染みって関係を壊そうとは思わなかった。だから適当に他の男と付き合って肉体の欲望は処理してた。親友面を続けるには体の方を落ち着かせる必要があったからな。それで万事上手くいってたし、その頃から欲望は分けて考えてたさ。ただ、問題になったのは精神の方の欲望だ。高校は我を通して秋津と同じ所へ行ったけど、その先はそうもいかない。あの高校の普通科のレベルは判るだろ？　到底学力で大学へ進学しようと思う奴が行く高校ぢゃない。俺のおふくろは予備校の講師だし、俺もそれなりに勉強は出来た。大学へ進学するのを条件に、反対を押し切って普通科に入ったから高校を卒業すれば秋津とは離れる事になる。あいつは専門学校志望だったから。それで、焦ってたんだな、多分、色々あって。去年の夏休みに、秋津が家に遊びに来た時、告白した。

当然、秋津は戸惑ってた。何を血迷ったのか俺は試してみたくなったんだ。秋津に触ってみたくなった。その時には男の悦がるツボは分かってたしな。だから秋津のを手で、した。その位なら冗談で済むと軽く考えてた」

裕斗は淡々と語り、そこで一息吐く。拓海は首筋を押さえつけたままの裕斗の手が急速に冷えていくのを感じた。

「秋津はそうは思わなかったんだろうな。真っ当な人間は男の手で達かされると、自分もホモなんぢゃないかって不安になるんだろう。夏休みが明けて、放課後に呼び出された。今日、俺を犯した奴らと他にも二人居たな。秋津は笑いながらそいつ等に言った。コイツは男に飢えてるから触らせてやれ、結構上手いぜ、って。……つまり秋津は、自分はホモぢゃないって確認したかったんだ。他のヘテロの奴らも俺に達かされたら、それが当然の事、男の手で達っても異常ぢゃないって思えるだろう。俺も秋津を追い詰めた責任は感じたし、言われるまま触ってやった。それからは単なる性玩具さ、はじめは抜いてやるだけで済んだけど、段々エスカレートして今日に至るってわけだ。……どういう風にエスカレートしていったか、聞きたい？」

裕斗は自嘲の笑みを浮かべて、伏せていた目を拓海へと向ける。拓海は裕斗に聞かされた事実に呆然として、何の言葉も出てこなかった。傷付いている、という素振りは見せない、それどころか裕斗は秋津を憎んだり責めたりする気は微塵もないらしく、庇うような口調だった。それが俗に言う惚れた弱みというものなのか、秋津との関係を壊すきっかけを作ってしまった事の責任を感じているからなのかは拓海には分からない。だが、それが裕斗を必要以上に苦しめる原因になっているのは分かる。

苦痛を受けて、その苦痛の原因は自分の引き起こしたものだと痛みを受け入れてしまう事は、そしてそれに堪え続ける事は容易ではない。原因は自分にあるから仕方がない、と苦痛を受ける事自体を諦めて受け入れてしまっても、受ける痛みも苦しみも消えるわけで

はない。それは確実な痛みとして自分自身に刻まれてゆく。拓海もそれは痛いくらい知っていた。兄から別れを告げられた時、失恋と喪失の苦痛をただ受け入れるしかなかった。自分が想い続ける事で、兄を追い詰めてしまっていた罪悪感があったからだ。……本当は縋りたかった。兄を責めてしまいたかった。はじめから突き放すつもりなら、兄弟以上の関係を続けるつもりはないと決めていたのなら、何であんな抱き方をしたんだ、と。あんなに激しい触れ方で、あれだけ何度も名前を呼ばせて求めさせておいて、そのすぐ後に別れを切り出すなんて酷いぢゃないか、そう詰って縋れば優しい兄は責任を感じて、決意を変えてくれたのかもしれない。それを許さなかったのが兄に対して感じた罪悪感だ。罪悪感は苦痛も願いの叶わぬ寂しさも何もかも自分の中へと縛り付けて必要以上に自分を痛めつける。それに耐え切れなかった拓海は、その苦しみを他の痛みで紛らわせる必要があった。だから、裕斗を利用しようとした。でも本当に拓海が必要だったものは気休めの痛みではない、そんなものに縋っても悪循環にしかならない。それを裕斗は食い止めて叱責してくれたのだ。だから拓海は堕落せずに済んだ。

　でも、その時の拓海と今の裕斗は違う。苦痛から逃れるために、仮初めの痛みに縋ろうとした自分とは違い、まだ裕斗は傷付いている素振りも見せずに痛みを自分の中に留めようとしている。その痛みが分かち合う事の出来るものではないと拓海は知っている。でもそれが眼の前の裕斗を不安定に揺るがせ、脆く今にも壊れてしまいそうな笑みを浮かべさせている。何が一番最良の方法なのか、裕斗が何を望んでいるのか、それを知るだけの器量をまだ拓海は持ち合わせていない。それは拓海だけでなく、彼の両親も、どんな偉人にも、裕斗自身でさえも分からない事なのかもしれない。ただ、拓海に出来た事は、今にも消え入ってしまいそうな儚いものを必死に繋ぎとめるように、目の前に居る裕斗という存在を抱きしめる事だけだった。

二二、少年遊戯（後編）

「止せよ、慰めなんか欲しくない」
抱き寄せられた腕の中で身じろぎもせず、裕斗はポツリと呟く。
「慰めぢゃない。俺はこういう時、どうしていいのか分からないし、慰め方も知らない。それにそんな資格だってないよ」
拓海は裕斗の背にまわした腕に力を込めたまま、沈んだ声を出す。
「本当は、好きだなんて言える立場ぢゃない事だって分かってたんだ。俺は裕斗の事、何にも分かってなかった。……秋津達と同じように裕斗の事見てただろって言われて、本当にその通りだと思った。裕斗は幸せな環境でぬくぬくと生きてきたって、だから自分とは住む世界の違う人間なんだって思ってたから。……だから兄さんに振られた時、平気で裕斗を利用しようとした。自分の事しか考えられなくて、無神経な事も沢山言ったと思う。秋津達よりも性質が悪いよな、傷付けようと思ってたわけぢゃなくて、裕斗は幸せだから、俺の自棄に付き合わせても傷付く事なんかないって決め付けてた」
「……それは、」
裕斗は何か言いかけて拓海の腕の中で微かに身じろぐ。拓海は構わずに言葉を続けた。
「でも、好きって気持ちは本当だ。利用しようとして言ったんでも、同情で言ったんでもない。本当は秋津達に会う前、約束の話の時に裕斗に好きだって言おうか迷ってた。だけど、裕斗に惹かれてるのは分かってたけど、まだ兄さんの事を引き摺ってる自覚もあるし、自分がちゃんと卑屈にならずに裕斗と向き合えるまで言うべきぢゃないと思った。だから約束をした。それなのにさっき思わず言ってしまったのは、親近感とかぢゃなくて、肉体の欲望だけで関係したくなかったからだ」
拓海が話し終えても、しばらく裕斗は黙り込んでいた。抱き寄せている拓海からは、その裕斗の表情は見えない。しかし、腕に触れ

ている裕斗の肌は少し温かさを取り戻していて、拓海はそれだけでも充分に不安は薄らいでいた。少し冷静さを取り戻すと、現実的な事柄に意識が向きはじめる。浴槽の湯は大分ぬるくなってきているし自分は着衣のままだ、自分の事は後回しにするとしても、とりあえず追炊きをしないと裕斗が湯冷めしてしまうかもしれない、拓海はそう思って、裕斗の背に回していた腕を緩めた。

「このままだと、湯冷めしそうだから追炊きしないと」

離れようとした拓海の腕を掴んで、引き戻しながら裕斗は困惑気味に問う。

「分かんねえな、何でお前が俺に惚れるんだよ？」

「何でって……自分でもはっきりとは分からないけど、多分、裕斗が俺に同情しなかったから、だと思う。俺は幸せそうな人達を見ると卑屈になってたから、今まで兄さん以外の誰とも深く関わって来なかった。自分の境遇や気持ちを打ち明けたら、他にもっと不幸な境遇の人はいるって叱責されるか、辛い思いをしたんだねって同情されるかのどちらかだと思ってた。そんな事言われたら、余計卑屈になってしまう気がして、誰とも深く関わる気にはなれなかった。でも、兄さんと別れて、自棄になって裕斗に縋ろうとした時、裕斗はどっちの言葉も言わなかった。自分の境遇を不幸だって思っても仕方がないし、与えられた人生を生きていくしかないって言われた時、何故だかすごくほっとした。兄さんとの事も家の事も、辛くても受け入れていくしかないって、初めて思えた」

「そんなのお前に甘えられたくないから言っただけだ」

「それでも俺は救われたんだよ。……あ、でも、だからって、俺の気持ちを裕斗に押し付ける気持ちはないけど、」

長々と語った後で、拓海は気恥ずかしさと自己嫌悪に似た暗い沈んだ気持ちに襲われて目を伏せた。――また身勝手に自分の気持ちばかり話してしまった。もっと他に、裕斗の話に何か、裕斗の苦しみを少しでも取り除けることを言わなければならないと思っていたのに――肝心な時に何の言葉も出てこない。拓海はそんな自分が歯

痒かった。
拓海の重苦しい気分を遮って、唐突に裕斗は笑い声を漏らす。その笑い方は自虐的なものではない。どちらかといえば、ショッパーズモールで秋津達に会う前に気落ちしていた拓海へと向けていた揶揄いに近い屈託のないものだ。
「ネガティブだな、お前」
口調も笑みもいつもの裕斗だ。裕斗は浴槽のふちに凭れるように座り直して、膝を崩したまま急にくだけた口調で話し続ける。
「あれはそういう意味で言ったんぢゃない。お前の勘違いだよ。まぁでも確かにあの言い方ぢゃ誤解するかもな、」
「あれって？」
拓海は裕斗の態度が豹変したことに戸惑いを隠せないまま聞き返した。
「あいつ等に犯られた後に言ったことだよ。『お前もそういう風に見てただろ？』って言ったのは、拓海を責めるつもりで言ったんぢゃない。つまり、拓海も俺の事を秋津達と同類だと思ってただろうって言いたかったんだよ」
「え、どうして裕斗が同類になるんだよ」
拓海は急に打ち明けられた事実に頭が追いつかないでいた。裕斗は動揺した拓海を見て呆れたように笑う。
「いくらなんでも人が好過ぎるぜ、そんなんぢゃ悪党に利用されるのがオチだ」
あからさまに揶揄われて拓海はむっとした表情になる。裕斗は薄く笑みを浮かべて話し出した。
「考えてみろよ。俺だって拓海の意見は無視して散々体を弄んできただろ？　電車で痴漢まがいの事をやったのだって、いわゆる優等生ってのを間近で見て苛めてやりたくなったからさ。俺のやってた事も秋津達と変わらないぜ」
薄く浮かんでいた笑みが消え裕斗の瞳に翳が差す。濡れた前髪から滑り落ちる雫が裕斗の頬を濡らして、拓海にはそれが涙のように

映った。
「あの頃は散々な気分だったからな。真っ当な世界に憧れてたんだよ。自分の今置かれてる環境とは全く違う環境で暮らす奴と関わってみたかった。試験会場に居る奴は皆それなりに真面目な環境で過ごしてる奴に思えたし、少なくとも普通科に居るような連中は一人も居なかったからな。でもその中でも拓海は際立ってたぜ。全然緊張してる素振りもないし、こんな試験余裕ですって顔ですまして一人で座ってたから。つまり、俺もお前が幸せな人種だと思い込んでたんだよ。だから電車の中で、初めは声かけて仲良くなるつもりだった。けど、思い悩んでるような顔したお前を見たらさ、受験如きで悩んでんぢゃねえよとか思って苛めたくなった。だから俺を利用しようとした事にお前が負い目感じる必要はない。俺だってお前を利用するつもりだったんだからな」
「今は、利用する気はないって事？」
問いかけで返した拓海は、裕斗からどんな返答を期待しているのかすら分からなかった。自分が裕斗を利用しようとした事には、罪悪感と自己嫌悪を強く感じてきた癖に、裕斗が自分を利用するつもりだったと聞かされても不思議と何の苛立ちも覚えない。むしろその頃の自分の存在に裕斗が何らかの利用価値を見出した事実に、妙な喜びさえ抱いてしまっていた。しかし、その一方でその利用価値を崩してしまいたいと望んでいる自分が居るのも確かだった。多分、裕斗が利用しようとしたのは、自分の肉体の欲望と、傍から見れば真っ当で、何の挫折も知らぬ優等生にしか見えない自分の表層だったのだろう。後者はもう裕斗の中では崩れてしまっている。拓海は、他の人間でも取替えのきく身体や表層に利用価値を認められるのではなく、もっと別の拓海しか持ち得ない部分を裕斗に求められたかった。だが、求められたいと思っている事自体、裕斗に見返りを求めてしまっている事になる。相手を思いやる気持ちだけで、献身的に自己を犠牲にしてまでただ利用されてやるという寛容さが自分にない事を拓海は知っていた。それ以前に、今の自分が裕斗にとって

利用価値があるものかすら自信が持てない。問いかけた拓海の心は複雑だった。
「だから、言っただろ？　遊びは終りだって。拓海に利用されてやらなかったのに、拓海を利用しようとすんのはフェアぢゃないもんな」
きまり悪そうに裕斗は笑って、立ち上がった。
「あがろうぜ。あんまり長く浸かってたら、のぼせそうだ」

慰める言葉も励ます術も持たない。ただ自分が持っているものは、外へと上手く示す事の出来ない曖昧で脆弱で、でも確実なものを内に秘めた身体の存在だけだ。

どちらかが言い出したわけでもなく二人は身体を寄せ合っていた。湿り気の残る二人の髪へと、窓から差し込む静かな西日が纏わりつく。眠りにつくには早すぎる宵の時の長さを、遊びを終わらせてしまった心と身体が持て余してしまっていたからなのかもしれない。
浴室を出て、拓海の部屋で髪を乾かしているうちに、ごく自然なことのようにそういう空気になっていた。裕斗が平生のように強引に求めてきたわけでも、拓海から誘ったわけでもない。どちらから、というわけではなく、夕闇の仄かな色がシーツの上に影を落としていくように、気付けば唇を合わせていた。
ベッドの上に、向かい合う形で横になっていた拓海の胸へ裕斗が手を伸ばしてくる。その触れ方に、いつもの欲望を引き出すための露骨さや性急さはない。ひとつひとつ、その存在を確かめるように静かに肌の上を撫でてゆく。拓海も腕を伸ばして裕斗の肌へと触れた。温もりを取り戻した滑らかな皮膚を指先に感じながら、肋骨を辿ってゆく。柔らかい皮膚の下から揺ぎ無い心音が掌へと伝わってくる。拓海はその拍動を感じているだけで、今までの不安定で曖昧

な自分の内側が充分に満たされていく気がした。
鼓動をもっと確実に感じたくなって、拓海は裕斗の胸に耳を寄せた。裕斗は腕を回して拓海の頭を抱き寄せてくる。しばらく拓海が心音を聴いている間、裕斗の指は拓海の髪を優しく梳いていた。優しすぎる指先に髪を弄ばれているうちに、拓海は自分が裕斗に優しく扱われている事が可笑しくなって、思わず笑みを漏らしてしまう。
「裕斗に頭撫でられてるなんて変な感じだ」
「俺もお前の頭撫ででてんの、変なカンジ」
胸に頭を寄せたままの拓海を見下ろして、裕斗は穏やかに笑う。
「俺、やっぱり裕斗の事、今まで全然知らなかったんだな。初めて見た、そういう風に笑ってる顔」
「俺だってお前が素直に笑ってんのなんて初めて見たぜ」
裕斗は照れ隠しのように、いつものからかう口調へと戻してぶっきらぼうに言う。裕斗が喋る度、心音とは違う声の響きが頭の中へと染み込んでゆくのを感じながら、拓海は裕斗を見上げた。
「もっと裕斗がどんな人間なのか知りたい。今日まで、裕斗の真意が全く分からなかったんだ、多分、表面的なものしか見てなかったから。裕斗とは理解り合える関係になりたい」
「お前って、たまに真顔で恥かしい科白云うよな」
真剣な気持ちで言った言葉を揶揄で返されて、拓海は恨めしげに裕斗を軽く睨んだ。裕斗はその視線を悪戯っぽい笑みで受け止めて言葉を重ねる。
「自分がどんな人間か解る奴なんて居やしない。自分でも掌握出来ないものを、他の人間が完璧に理解しようなんて不可能だよ。拓海に会った時の俺も、秋津達と居る時の俺も、今の俺も、全部確かに俺なんだろうけど、それが全てぢゃない。性格なんてはっきり決まってるものぢゃないし、本当の性質なんて存在しない。ただ周囲がどう判断するか、だ。拓海には、秋津は悪人にしか映らなかっただろうけど、それはあいつの単なる一面に過ぎないんだぜ。ふとした事で、判断材料も認識の仕方も変わってしまう。だから、解り合う

事なんて幻想だ。そんな事望んでたら、どっかで行き詰るぜ」
裕斗は宥めるような言い方だったが、拓海は真剣に伝えた望みを遠まわしに断られた事に沈んだ気持ちになった。解り合えない、と言われてしまったら、裕斗へと向かう感情をどう扱っていいのか分からない。黙り込んでしまった拓海の頭をもう一度撫でて、裕斗は笑う。その手は拓海の肩へと下りて、右肩を軽く押された拓海は、裕斗の胸を離れて仰向けになった。裕斗は拓海を見下ろして、悪戯な笑みを浮かべたまま唇を被せてくる。拓海は困惑しながら裕斗のキスを受け入れた。
「俺は、解り合うよりも求め合う方がいい」
唇を離して、裕斗は試すように言ってくる。拓海は自分の感情の居場所を与えられた気がして、裕斗の背に腕を回して微笑んだ。
「……俺も、その方がいい」

優しく撫でてくる手付きは、兄のやり方と似ている。でも、兄に触れられている時に感じたあの安心感はない。触れられれば触れられる程、自分も裕斗の存在を確認したくなる。
欲情、とは違う、もっと強い情動だ。その情動は拓海の身体の中を静かに満たして、裕斗の感触を少しでも逃すまいと感覚を鮮明にしてゆく。欲情に駆られて溺れてゆくような激しさはない。ゆっくりと沈み込んでゆくような穏やかで甘い快感を裕斗に触れられる度に拓海は感じていた。色を薄紫へと変えてゆく夕闇を背に浴びた裕斗も柔らかな水底へと共に沈んでいくように思えて、拓海は恍惚としてその背に腕を回して、何度も裕斗の肌の温もりを確かめた。

二三、遊戯の痕（完）

いつの間にか部屋には、淡い月明かりが差し込んでいた。開け放していた窓からは夜の匂いを纏う狭霧が流れ込んで、熱を帯びていた肌を静かに冷ましてゆく。

「お前って根っからそうなわけ？」

裕斗は拓海の胸の上に頭を乗せたまま、少し照れたように笑う。

「……何が？」

急に話を振られた事に驚きながら、ぼんやりした思考のまま拓海は問い返した。

「いや、普段から受け身？」

人をマグロみたいに、と呆れて拓海が睨むと

「だって外見的には誰が見ても俺の方が下だろ？　しかも犯られてんのも見てて俺ん中に指まで挿れといてさ。でもいざセックスとなったら当然の様に俺の下で喘いでんだもん」

揶揄うというわけでもなく、あっけらかんとした調子で裕斗は言ってくる。拓海は束の間の情事の名残も忘れて、赤面して叫んだ。

「それはっ、しょうがないだろ！　何だよ、俺が下だと満足出来なかったって言いたいのか？」

裕斗は怯むどころか拓海の動揺ぶりに声を立てて笑い出す。ムードも何もあったもんぢゃない、拓海は溜め息を吐いて、胸の上で笑い声を漏らしている裕斗を押しのけた。押しのけられた裕斗は身体を起こして拓海の耳元へと顔を寄せてくる。

「良かったぜ、今までで一番」

平然とそう囁かれて拓海は思わず赤くなって黙り込んでしまった。

裕斗はまた笑って、含羞（はにか）んで俯いた拓海を両腕で抱き寄せてくる。二人の肌は情事の時の熱は既にひいていたが、裕斗の肌は確かな温もりを持っている。あの冷え切っていた肌ではない。首筋に触れる裕斗の腕の確かな温もりに、拓海は絆されて安心して目を閉じた。

「遊びの意味、教えてやろうか」
裕斗は抱擁したまま、ふと思い出したように呟く。
「さっき言ってたのと違うのか？」
拓海は少し不安を覚えながら訊ねた。裕斗は笑って
「意味、っていうより、目的だな。俺はお前に振られたかったんだよ」
「え？」
「つまりさ、俺は秋津と同じ高校に行ったけど、実はお前のとこの高校も受かってたんだよ。それで少し教師や親と揉めたんだ。周りは当然の如く東高に行けと言ってたし。でも秋津と同じ高校に行った。多分、拓海に目をつけたのは、それも理由だったんだ。あの時は秋津と同じ高校を選んだ事まで、後悔してたから。だから現実逃避のちょっとした遊びを思いついた。自分が中学で秋津を吹っ切って、東高に行ってたらっていうシミュレーション。それなりに真面目な奴とつるんで、仲良くなったりして、それでまたヘテロに惹かれたりする学生生活を送ったのかもしれないな、と思って。それで告って撃沈してみたかった」
「なんで撃沈、」
「普通、高校でそうそう同じ主義の奴になんて出会えるもんぢゃない。それに優等生なら、ホモに出会っても理性的に対処して振ってくれるもんかな、と思ったんだよ。少なくとも、不良呼び集めて姦そうなんて思わないだろう？　内申書とか考えてそうだし」
「まぁ、それはあるだろうけど。優等生ぢゃなくても、普通は乱暴なんてしないよ」
「それもそうだな。まぁ、とにかくヘテロに普通に振られたかったんだよ。俺は」
「俺が望みを叶えられないって、そういう意味だったのか」
「あぁ。ヘテロぢゃない上に、誘ってくるんだからな。どう考えても冷静に振ってくれそうにはないし。……挙句の果てには好きだとか言いだすし」

言葉のしまいはいつもの揶揄いに変わっていた。
「悪かったな、望みを叶えてやれなくて」
拓海は拗ねて悪態をつく。裕斗はまた声を立てて笑った。
「でも、今は秋津と同じ高校に行った事は後悔してないぜ。確かに酷い目には遭ったけど。……それだけぢゃないって思えたからな。だから、もう大丈夫だろ？　俺もお前も」

それだけぢゃない、という裕斗の言葉を拓海は何度も反芻する。――裕斗が秋津に傷つけられる事が無ければ、きっと電車で自分に声をかけてこなかっただろう。それにもし、裕斗が秋津を吹っ切って東高に来ていたとしても、多分、自分と求め合うような関係にはならなかった。自分が兄の事で不安定になっていなければ、きっと裕斗に振り回される事も惹かれる事もなかったのだろう――どれも欠けてはいけなかったのだ。今、裕斗と寄り添って眠る穏やかなこの瞬間を手にいれるためには。拓海は隣で寝息をたてはじめた裕斗を静かに眺めた。痛ましい偶然が重なったからこそ、この瞬間がある、そう思うと拓海は眠るのが惜しかった。
約束がこれから先、果たされる日が来るのかは分からない。九州の国立大に進学するといった裕斗と、関西の大学を受験する拓海とでは、これからの時間を共有していく可能性は低い。新しい環境に身を置いて、それぞれの時間の波に忙殺され、性格も生き方も変わっていく。その中でお互いの存在も求め合った想いも色褪せ、懐かしい感傷として胸の奥底にぼんやりと痕を残すだけになるのかもしれない。
しかし、拓海はまだ見えぬ未来に、はっきりと定まらない進むべき道に不安はなかった。これから手探りで生きてゆく中で、もっと悲惨な事が待ち受けているかもしれない、時に自分を見失い、自分の無力さに打ちひしがれる日も来るかもしれない。でも、その時は

思い出せばいい。苦痛の中で生まれた奇蹟のようなこの瞬間を。これから先、与えられた道がどんなに悲惨なものでも、もう二度と報われる事がなくても、きっとそれは自分をこれから支え続けるだろう。拓海は生まれてはじめて自分の人生と自分自身の存在を信用出来るような気がした。大丈夫、お互いに言い聞かせるように裕斗の言った言葉は、不安定に揺れる精神と肉体の中へと緩やかに響いて、自分の中へと光を灯す。過去の苦痛に囚われる事があっても、寂しさに押し潰されそうになっても、きっともう絶望する事はない。光りが灯された瞬間があった事を忘れない限り。拓海は全てから赦されたような、全てを赦したような不思議な心持になった。不意に頬を伝った涙はこれまでに流したどの涙よりも温かい。

〈了〉

二三、遊戯の痕（完）（後書き）

子供から大人へと変わっていく「少年」の認識の世界は曖昧だ。見える世界は単純なものから複雑なものへ、美徳だけでは生きていけない程、矛盾や欲望が取り巻く世界だけでなく自分自身の中に生まれてくる事を知る。それをどう認識し処理していくか、束の間の「少年期」に彼らは流されながら、でも手探りでその術を探してゆく。

拓海と裕斗という二人の少年が出逢って共有した時間は、短い二人の人生の中でもごく僅かなものだ。知り合って一月も経たず会った回数は五回、傍から見れば二人の共有した短い時間も、そこで為された関係も、単なる「遊戯」に過ぎない。

別々の世界を傷付きながら生きていきた二人が、一方は「遊び」を思いつき、一方はそれに振り回される形で惹かれあってゆき、偶然のはずみで傷を負った心が寄り添いあいお互いを求め合っただけの仮初めの「遊戯」。

単なる偶然と気まぐれが引き起こした「遊戯」から生まれるもの、痕として二人に残るもの、その瞬間、瞬間がこれから生きて行く上での希望となるようにとこの『少年遊戯』を書きながら思った。

堅苦しい書き方をしましたが、これからが本当の長い後書きです！最後まで読んでくださった方本当に有難うです（≧ω≦）

『少年遊戯』は「春エロス２００８」という企画に参加させていただいたのですが（「春エロス」という単語で検索すると他の作家さんの参加作品を読むことができます）、大幅に締め切りを遅れて、結局企画終了から一ヶ月以上も過ぎた完結になってしまいました←←

「春エロス２００８」のテーマは「１８禁にならない範囲でぎりぎりのエロス」を書く事。

普段から１８オーバーしか書かない私は、そのギリギリというものに惹かれつつ参加したのですが、実際どこからが１８禁なのか分からずに苦しむ事になりました。
そこで、打開策として「いっその事、エロスをテーマにしなければ何書いても大丈夫！」と何故か思い込み、あえて文学的っぽい雰囲気とテーマを出せば、別に性描写があろうがボーイズラブだろうがセーフなんぢゃないか、と方向転換する事に。
つまり、セックスのための性描写じゃなく、テーマっぽいものを導き出すための性描写ならアリではないかな、と。
……一応、露骨な表現は省きましたけど。＾＾；
おかげで、文章は堅苦しいし、エロくもないし、ボーイズラブだけどボーイズラブ作品として楽しめないものが出来上がってしまいました。
設定は、ベタというか王道（痴漢、兄弟もの、強引攻、トラウマなど）にしてあるのですが、それが書いてる時のバランスを崩してしまって収拾がついてないですね。文章も、連載を続けるうちに自分の至らなさをひしひしと感じました。
書いてる途中で作者自身も何度も投げ出したくなった『少年遊戯』。完結出来たのは、企画に参加したものだという責任感と、最後まで読みに来てくださる方が居てくれたからです☆
本当に有難うございました（＊，∀、＊）
そして、めちゃくちゃ長い後書きを書いちゃってすみません（汗

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8968d/

少年遊戯

2010年10月8日13時36分発行